

340

318

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



340-3/5



評	文學博士	萩野由之	文學士	笹川臨風
議	文學博士	黑板勝美	文學士	菊池謙二郎
員	文學博士	松本愛重	文學博士	三宅米吉

黑川真道編

朝鮮征伐記
蒲生軍記

全二

大正
7 26
内交

國史研究會藏版

(順ハロイ)

解題

蒲生軍記 六卷

本書は蒲生氏郷・秀行・忠郷の三代の事蹟を記したるものなり。

國書解題に云

【蒲生軍記 六卷】

蒲生氏の盛衰事歴を記したるもの、最

初蒲生の由來より氏郷、織田信長に仕へ、後豊臣秀吉に仕へて榮進し、文祿四年、石田三成の讒により、遂に卒去に及ぶこと、其の子秀行封を襲へること、又其の子龜千代封を繼いで下野守忠郷と稱し、寛永四年會津にて卒去せること等までを略記す、元祿八年乙亥(二三五五)岡西惟中自序して同年版行す、

岡西惟中は大日本人名辭書に云

岡西惟中は醫師にして俳人なり、始め一有

と號す、後、一時軒と更む、元と因州鳥取の人大阪に出でて醫を業とす、傍ら俳

解題

諧を能くす、醫を杉田望一に、又俳諧を西山宗因に學ぶ、又書を能くして其名高し、元祿五年八月十日歿す、年五十四。
と見えたり、猶國文學についての著書許多あり、世の知るところなり。
本書は元祿八年版を採收す。

大正五年十二月

黒川眞道識

蒲生軍記

序……………二七

卷之一……………二八

蒲生由來の事 知閑入道の事并秀紕自害の事 小倉兵亂の事 後藤兵亂

の事 信長出張の事并賢秀幕下に屬する事 大河内軍の事并氏郷祝言の事

卷之二……………二九

蒲生左兵衛大夫領分の事 信長公自害の事附日野籠城の事 信孝御自害附龜

山軍の事

卷之三……………三〇

信雄秀吉と不快の事附松ヶ島軍の事 加々井軍の事 氏郷松島に封せらる

る事 木造軍の事 小山戸軍の事 紀伊國軍の事 越中軍の事

目次

三

目次

卷之四

筑紫軍の事 氏郷居城を松坂に移す事 西村相撲の事 秀吉大佛殿建立の事 小田原攻の事 佐久間兄弟附尾藤が事 氏郷會津を拜領の事 葛西大崎一揆蜂起の事附氏郷發向の事

卷之五

名主軍の事 會津騒動の事井氏郷歸陣の事 九戸謀叛の事井根勇利穴田井の城攻落す事 九戸城没落の事井氏郷加増の事

卷之六

若松繁昌の事 高麗陣の事 秀吉公御成の事 氏郷逝去の事 子孫繁昌の事

目次終

目次

朝鮮征伐記 二

第十

大明兩使日本渡海 石田治部少輔三成加藤清正を讒す 京伏見大地震
加藤清正將軍御勘氣御赦免 將軍秀吉公大佛を鑄給ふ 大明兩使伏見著岸
井兩使登城 大明封號の儀相違に依り秀吉公再び朝鮮征伐を催す 大明朝鮮四使歸帆

第十一

加藤清正小西行長朝鮮に入る井太閤より仰付けられし軍法條々 日本諸軍勢
朝鮮渡海 大明石司馬將軍囚獄に入れらる 大明國禁中に於て軍評定 沈惟敬謀翰を加藤清正に遣す 遊撃沈惟敬召捕はる 日本人南原城攻落附楊

目次

元敗北 陳愚衷全州逃去る 茅指揮平倭の十議を上る

第十二…………… 五

大明邢提督大軍を率ゐて朝鮮に入る 浅野幸長蔚山城に入る并大明人蔚山を圍む 大明勢島山砦を攻む并加藤主計頭蔚山に入る 蔚山城兵糧盡くるに及び飢ゆ并楊鎬加藤主計頭を虜にせんと欲す 日本諸軍勢蔚山城後卷并大明人敗北

第十三…………… 一五〇

大明人重ねて軍評定 日本勢過半歸朝 日本中國四國勢歸朝伏見に著く 大明人蔚山順天表働并劉挺小西行長を擒にせんと欲す 太閤秀吉公御薨逝望洋永春昆陽の三城大明人攻取る 泗川落城 大明人新寨城を圍む并大明勢敗軍 浅野彈正石田治部少輔博多に到り朝鮮在陣の日本勢引取らんと欲す 日本諸大將朝鮮引取評定 朝鮮在陣の日本勢残らず歸朝 日本勢残らず歸朝して伏見に著す

例言

一、本編には、朝鮮征伐記十卷以後と蒲生軍記六卷とを採收す。
一、通讀の便を計るため、假名を漢字に改め、語尾を補ひ、文字の一定を計り、句讀を正す等、編輯上につきての努力は、既刊書と異なることなし。

朝鮮征伐記第十

大明兩使日本に渡海

司馬石星が奏聞、既に天子の上聞に達し、皇帝之を準信し給ひて、遂に封王の儀を定め、工に命じて、日本國王の金印一顆を鑄さしめ、竝に冠冕朝服を調へて、日本關白秀吉に贈らんと欲す。其費數萬金なり。臨淮侯李言恭が嫡子李宗城に詔して正使とし、都指揮楊方亨を副使とし、策命印章を齎しめ、秀吉を封じて日本國王とし給ふ。兩使に仰付けられけるは、汝等先づ三浪江に行きて、爰に逗留し、釜山浦城々に日本の兵一人も残し止めず、皆本國に歸帆するの旨、朝鮮王より告げ來らば、日本國に渡海し、秀吉を封すべしとぞ仰せ遣されける。石司馬猶も心許なく思ひ、楊鎬を遣し、沈惟敬がする處を見せしむ。惟敬先きに日本にて給はる金銀を以て、中

沈惟敬李
宗城を嫉
む

國の寶物を買取りて、商賣する體なり、今度定宗城冊使に成りて、爰を晴と出立つ由
聞きて、京師の諸官盡く集りて之を見るに、傍も耀く計りなり。惟敬心に羨しく思
ひ、此和議、初石司馬が爲めに渡海して調ひぬ、其功を以て、今度は吾身冊使たるべし
と思ふ所に、副使にさへ成らず、案内者迄にて渡海する事、面目なく思ふに、李宗城
は貴人の子にて、惟敬を直に下に會釋し、何事も無禮なり。然れども宗城若輩にて、
専ら對に習はず、斯様の使不案内なるを見て、惟敬も又彼を侮り輕んせり。初め乾
伏山にて、小西行長と和議七箇條を定め、六箇條は叶はずして、封號一つ漸く調ふ
上は、關白遂に合點仕給ふべからず。其のみならず、日本へ討取る朝鮮四箇道をも
朝鮮王へ返し與へ、釜山浦の和戸を毀除け、又日本人一人も殘さず歸帆仕るべしと、
大明よりいひ遣され、日本より所望の七箇條は、一つならでは叶はず。却て大明よ
り、二三箇條の好有り。内日本勢一人も殘さず引取る事と有り。是又成難きと思ひ架
への體に持成しけり。楊鎬、實否を質さんとすれども、日本勢も引取らず、朝鮮王よ
りも一時の奏報なし。扱止むべきにしも非ざれば、李宗城楊方亭は釜山浦に行き

沈惟敬石
司馬を欺
く

て、相待つ事半年計りなり。石司馬之に驚きて、急に渡海し、策命を與ふ可しと責
めけれども、惟敬様々に辭を飾り、渡海の成らざる由を申す、大明の官人も之を聞
きて、石司馬が惟敬に賣られたりと沙汰しければ、司馬之を愁ひて、竊に常鶴を單
騎にて、釜山に遣して聞かしむ。常鶴還り來りて、日本人の情、變幻謀り難く、使
者往々に行くべからざる由を申す。司馬猶も不審に思ひ、家人の王胡子を渡海さ
せ、直に旨を問ふ。惟敬が方より、通事婁國安をして返答し、封の事決定なる由、申
すを聞きて還れば、司馬少しく心を安んずと雖も、冊使兩人は日本へ渡海せず、今
年は文祿四年
未の歲釜山浦にて暮らしけり。其年十二月に、惟敬は遼東寬奠の官馬及び京
營の選馬(をい)に百七十七頭買ひて、潛に船に載せ、日本近き島々へやりて、喂養ふ。之は
大明兩使の郎等を乗せん爲めなりと陳ぶれども、實は日本に良馬を好むを以て、太
閤に獻じ、媚を成さんが爲めなり。兩使は惟敬が伴に依りて、爰に一年留められし
事を迷惑し、如何あらんと怪しむ。殊に正使の宗城は、斯様の憂事に馴れぬ者なれ
ば、夜晝泣き悲しみて、歸郷の念忘るゝ隙もなし。惟敬之を窺ひ見て、すはや究竟の

李宗城明
に逃る

能き威おびし者なれと獨笑して、酒に宗城が親しき知音の謝隆を呼びて、封の事破れたり。冊使日本に渡らば、執らるべしといふ。謝隆眞と思ひ、宗城にいひ聞かせて泣き悲しみ、宗城を動かす。案の如く宗城大に恐惶して、密に一人の僕と謀りて、印信詔勅の御書を捨置き、衣裳を改め、金銀數百兩腰に付け、夜に紛れて釜山の營を出で、傍道より大明へ逃げ還りける處を、加藤清正内三宅角左衛門が鐵炮の者五人、夜中にひたと行會ひたり。宗城がいちはし鬨氣に落行くを見て、盗人なりと心得追懸けたり。宗城は大名の子にて、旅は之が始めなり、清正が足輕共に追詰められ、深田へ迂り落ち、手を合せて拜み、泣き悲しむ。清正が足輕共、宗城を踏倒し、散々に打擲し、腰の金銀残りなく奪ひ、衣裳迄剝取り、赤裸にて追放す。宗城は裸に成りて、日を経て、乞食しながら大明へ歸りて、父がもとに隠れ居たり。宗城が召仕の者共二百餘人、主の行衛は知らず、こは如何にと迷ひ歩く。次の日に副使の楊方亭、此旨を擧げて遼陽に報す。經略の孫鏞、以聞して禁中に奏す。此時大明の萬曆廿四年、日本の慶長文祿四年の改正元年丙申二月十五日の事なり。正使の李宗城逃去れば、沈

惟敬の謀
的中

惟敬はすはや仕澄したり。思ふ圖に落入りぬと、獨り手敲して踊り悦び、副使の楊方亭は吾一人に成りては、如何有らんと安からず思ひ、惟敬を見てかこち泣く。惟敬大言して曰く、人臣は國の難に當りては、嘗て身を損ひし、徒に泣く事何ぞやと辱しめける。方亭訴へて曰く、母老子幼きを思ふ故に、自ら心を取定め難しとて、いとど涙もせきあへず。惟敬眼を見出し、方亭をはつたと睨み、汝實に本國に歸らんと思は、之も亦安かるべしと、心安すげに申しけり。方亭は惟敬が常に日本と昵ぶを知りて、惟敬が心に逆らはしと懇誠を盡しけり。惟敬笑ひて曰く、直に還らんと思は、敬ひて兩語を記せよ。方亭何の語を記すべきやと問ふ。惟敬が曰く、我大明國を關白に與へ、日本に擧承せんのみといふ。方亭きやつめが日本と肌を合せたる事を知りて、如何と思ひながら、若し惟敬が心に逆ひなば、殺さるゝ事も有るべくと案じて、進退盡く貴邊に任せ置きぬといひて約諾しけり。其上宗城が殘し置きし錢糧、銀兩竝に酒器、金帛を皆惟敬が取用に任せて、石司馬に報じて、極めて倭情變りなき由を申し、却て宗城を誹排け、惟敬能き事に任せたりと薦む。司馬悦びて疏

楊方亭惟
敬を恐る

を作りて、禁中に奏請し、楊方亭を以て正使と攝し、沈惟敬を神機三營添註遊擊將軍に充て、副使に攝して封を行はしむ。惟敬既に命を拜して、望の如く副使となれども、未だ日本へ渡海せず。益、財寶を求む。石司馬心を枉げて惟敬が求むる所に隨ひて、項汝變といふ者を遣し、冊使東行の公用の爲め、銀二萬兩を惟敬に與へ、又割付三張を與へ、銀五百兩を約し、冊使私の仕用とす。大明にては、惟敬が家の賂して月々に銀子を給はり、司馬が夫人時々惟敬が妻に陳濟女が事飲食を饋り持成し、其心を悦ばしむ。司馬猶も心許無く思ひつゝ、陳雲鴻を釜山浦へ遣し、倭衆に宣詞す。其年六月に又、王胡子を遣し、釜山を窺見せしむ。冊使既に釜山を出船する時に、釜山に猶ほ日本の軍勢殘る。惟敬がいふ、之れ降參する倭人なり。朝鮮に居る事苦しからずといひしかば、王胡子、還りて此旨を告げ、石司馬遂に奏聞していふ、釜山の城盡く焚拂ひ、餘和猶ほあるは冊使を守護するなりといひて、朝廷を欺聞ます。今年、日本の改元慶長元年丙申六月十五日に、楊方亭沈惟敬竝に従者四百餘人、釜山浦より船に乗り、日本へ渡る。清正行長も後先きに兵を撤して、同じく日本に歸

石司馬朝廷を欺く

る。朝鮮人は元來和議調ひ難き事を知りて、使者を遣す事を合點せず。去れども遊擊惟敬に責促されて、止む事を得ずして、全羅道の觀察使黃愼と、同じく將官朴弘長を使者として、大明兩使に隨ひて、同じく日本へ渡海せり。

石田治部少輔三成加藤清正を讒す

兩雄は必ず争ふ習なれば、加藤主計頭、朝鮮在陣にて種々の私曲をなし、將軍の御爲を存せず、一方の大將に仰付けられたる小西攝津守を、日本堺の津の商人と惡口し、吾身は御免もなきに、豊臣清正と大明の報書に書送り、剩へ大明、日本和議の爲めに著越さるゝの冊使後軍都督府僉事署李宗城といふ正使の上官を、清正が鐵炮大將鶴平次・三宅角左衛門、おひはす並氣に仕り赤裸になし候旨、小西行長一書を石田治部少輔迄致し、潛に差越し、かば、治部の少輔も清正と中惡しければ、即時に上聞に達す。將軍大に怒り給ふ事甚だ淺からず。御朱印を以て、加藤主計を召されければ、清正は漸く此頃朝鮮より返陣し、休息もせざりける處に、京都より召狀到來

石田治部少輔三成加藤清正を讒す

石田三成
清正を設
さん謀
る

し、何事とも知らず、肥後を出でて上洛に赴きけり。治部少輔は主計が上洛するを聞き、天の與ふ所と悦び、道にて打殺さんとぞ工みける。抑、長門國上の關といふ處は、九國の地と相對して、其貌吭に似たり。爰にて遠矢に射殺せとて、屈強の手垂、鐵炮の上手を選び、上の關の定番毛利中納言輝元が内粟屋平右衛門を頼み、山々島島に隠し置き、清正が船を待懸けたり。關守の粟屋平右衛門は、日來清正京都上下の折節、金銀・小袖を毎度にくれ、懇に仕置きければ、此旨を聞くと均しく、早船にて告げたりける。清正大に悦び、一世の大慶、此上有るべからずと返事して、大船に乗りたれば、彼必ず見知る可し、所詮謀を成さんとて、清正は飛脚船に乗り、朝鮮より大坂へ通る飛脚の眞似をなし、潛に上の關を漕通る。人之を知らざりけり。日夜怠る間なく急ぎければ、七月廿八日に大坂に著き、直に伏見に至り、密に己が屋形に隠れ居て、行長・三成讒言一々聞届け、御返辭の品々、申分の理非、次第を逐うて談合しつゝ、閏七月三日に清正が本船をば、主計乗りたるふりに持成し、五日後れて大坂に著き、直に川船を支度し、清正船と號し、伏見に著くと均しく、清正は其時

私宅より罷り出で、只今上洛せる體にて、股引脚絆しながら、日來の取次、又入魂深間なれば、増田右衛門尉許へ參り、今度召上らせらるゝ御用を承る可しといひ入れける折節、増田家には兎長老など參られ、其外客數多にて、四方山の雜談しける處へ、奏者罷り出で、高麗より歸朝の由にて、主計頭殿御出で候といふ。増田聞きて、此方へと請むれば、清正直に座敷に付、吾等只今上洛仕り、直に貴殿へ參る事餘の儀に非らず。内々御存知の如く、清正と治部少輔奴と中惡しきにより、色々様々吾等を讒言仕るに付、將軍實儀に思召し、切腹仰付けらるべしとの沙汰を承るに依つて、貴殿に申披の爲め、相談に參り候ぞや。治部と清正不和の段、上にも御存じと承り及ぶ所に、五年以來の大功を無に成され、三成奴が口舌を御信用候て、斯くの如き段、是非に及ばずとて、大の眼より涙をはら〜と流しければ、長盛も道理至極にて候へども、去り乍ら退きて愚案を連らし候に、上への御斷りの儀は、治部と御和陸之無くば、必ず事濟み候まじ。先づ案じて見られよ。今の世に於いて、誰人か三成を治部少輔奴などと惡口する者は、日本國中に有るべからず。右申候

清正の憤怒

通り、上への御断りの爲め、三成と御和談有り度くば、明日にも長盛、其段を申達し、早速和睦させ申さん。さなく候に於いては、申譯の相談には、長盛罷成り間敷くと申しける處に、清正大に氣色を損じ、増田をはつたと睨み、御身は日來の入魂にも似ず、途方も無き事申さるゝ者かな。軍神八幡も御照覽候へ、治部少輔奴とは一生の中和睦仕るまじきぞ。其仔細は、朝鮮國にて數箇度の合戦に一度も手に合せずして、人の影事のみ申廻り、口先にて人を倒さんと工を致す臆病者、算用算勘を本望に存する蓬奴原きんがらやづばらと和談して何かはせん、譬ひ御不審を蒙りつゝ、此儘切腹仰付けらるゝとも、治部奴と中は直るまじ。貴方も只今の仕方申分、近頃奇怪に存するぞや。實に五年異國へ渡り居て、晝夜苦勞したる清正が、直に貴宅へ参りたれば、且頃の好なきとて、せめて遠侍迄も出向ひ、久敷して逢ひたる一言の禮儀は有るべきに、次の座敷へも出合はず、頭計り捻出して分別貌なる挨拶は、嬉しくも候はず。所詮御身の様なる禮儀を知らざる人とは、いひ昵みても何かせん。向後申通まじと、大兼光の刀戻廻し、匂り／＼立歸る。右衛門尉追付きて、其儀にてはなし。先づ歸ら

れ候へと、種々に宥め留めけれども、返事もせず歸り、直に御城へ出仕し、此旨申上げければ、中々御對面の事は扱置き、徳善院玄以山中山城守を以て、其方事、朝鮮表にて在陣中、惡逆を翔めらす由、分明に上聞に達す。此故に急度御穿鑿仰付けなさるべく、召上げらるゝ者なり。暫く御膝下に罷り有り、御糺明を相待つべしと、したたかに仰出されければ、清正承り、五年以來異國に在陣し、元良哈朝鮮表の數度の戦に粉骨を盡し、萬死一生を出づる事、其數を知らざりしに、其忠節を賞し給はざるさへ有り、無實の讒言にかゝり、浸潤の誹遂に晴れず、御對面は扱置き、御糺明有るべきとは無念なる事かなと、聲を上げて泣きつゝ、御城を出でければ、一座の人々主計を憐みて、袖を濡さぬはなかりける。

京伏見大地震

斯かりける所に、閏七月十二日の夜半に大地震して、伏見・京都はいふに及ばず、五畿内近國一度にゆり立ち、伏見御城を始め、人民の屋宇に至る迄倒破し、老若貴賤、

清正伏見
城に駈付

男女僧俗はいふに及ばず、牛馬雞犬の死傷する事、幾千萬といふ數を知らず。家々の崩るゝ音、喚叫ぶ聲、雷の鳴るが如く、貴賤東西に馳せ違ひ、男女巷に逃躰り、諸大名も面々に忘却して、御城へ馳著く者なかりける所に、加藤清正は御勘當の身なれども、主君の大事は見捨て難しとて、鎧を取りて肩に抛懸け、上に小袖を打ち羽織り、屈強の兵百餘人、鐵手子持ちたる足輕二百人召連れ、一番に御城へ駈入る。將軍は御殿崩れしかば、早や御庭へ立出で給ひ、疊廿帖計り敷かせ、御幕・屏風にてかこひ、大挑灯を燃させつゝ、女郎達の中へ交り、御身も女房の出立に成り給ひ、北の政所御同道にて、松の丸殿其外の女房・女房召連れられ御座しける所に、御聲を聞き知り、清正之れ迄参り候。恙無く御出でなされ、目出度こそ存候へ。幸藏主は御座らぬかと、大音にて匂りくゝ出来る。尼幸藏主は、聞くよりも誰ぞ早や参られ候といふ時、加藤主計にて候ぞや。大地震夥しく候間、上を始め奉り、壓に打たれ御座有るべしと存じ、刎脱けん其爲め、二百人の足輕に手子を持たせ参り候間、將軍御臺北政所へ、御申上候へといふ其聲を聞召し、太閤竝に政所扱も早く参り候者か

太閤政所
清正の登
城を感悦
す

な、氣のついたる仕方、比類無き事かなと御感悦淺からず。北政所は、清正を他に異に思召候ゆる、様々の御取成しにて、將軍一入御感なり。清正土の上に畏り、兩手をつき、幸藏主に向ひて、御身能く聞きて、御披露候へ、清正此五年朝鮮國に罷り有り、數箇度の合戦に大利を得、朝鮮兩王子・諸官人を生捕り、兀良哈迄で攻入り、彼國の王城に放火し、吉州表にて手を碎き、開城府川にて南兵十萬餘騎を夜駈に打散し、麻貴將軍を清正自身打取り、總軍を川へ追浸し候ひき。其外傳奏館にては、自ら先登し、晋州城一番に乗崩し、安康にては大明の劉縵と一戦し、霜に打たれ雨に濕され、日夜山野に身を任せ、苦勞せし忠功をば思召捨られ、あの小西攝津守が如くなる臆病至極の者は、御不便を加へられ、平壤にて李如松に攻められ、竹内吉兵衛といふ家人を敵の餌に養ひ、夜逃にしたる越度をば、曾て御咎にもまします。剩へ彼方此方へ詐を申し、和議の扱を御用ひ、治部少輔と御相談有りて、清正に切腹仰付けらるべしと、朝鮮より召登せられ候へ共、身に過なき所、天の照覽に任せ置き、急ぎて歸朝仕りしなり。あの治部少輔に支へられ、腹を切らんと仕る事、只今

清正幸藏
主傳奏
を頼む

まで二度なり。今度の次第も天心曇りましまさねば、定めて虚名は遁れ申すべしと、高聲に申しければ、太閤具に聞召し、清正五年以來、朝鮮にて炎天・寒天とも言はず、晝夜辛勞仕り、日にやけ色黒く、瘦せ衰へたる不便さよと、御涙をはら〜と流し給ひければ、北の政所松の丸殿を始め、御前の上臈・女房達、皆袂をぞ濡されける。清正幸藏主へ申されけるは、夜中無用心に覺え候間、中門には吾等侍共附置き申すべきやと問ふ、幸藏主、此旨伺ひ參らせけるに、太閤は未だ物は宣はず、少し御相圖成されしかば、清正が家老加藤與左衛門・加藤傳藏・和田備中守・大木土佐守・小代下總守・出田宮内など御門に附置き、清正に斷り申さずして、誰をも入れ申問敷と、堅く法度し、主計は白手巾にて鉢巻し、大長刀を搔込んで床几に尻を懸け、兎せよ角せよと、御城中の事ども下知しつゝ、肱を張りて居ける所へ、治部少輔を始め、五奉行打連れ登城仕る。加藤與左衛門以下、中門を打ちて通さず。其時三成は、治部少輔なり苦からず候間、通し候へといふ。清正が兵共、何と治部少輔と申すか、治部などといふ者が、今迄運參仕る者か、通す間敷くといふ。三成大に腹を立て、何者なれ

石田三成
怒る清正三成
か罵る

ば斯様の悪口申すぞ。當時天下に於て、三成を治部少輔とは、何者ぞなにと、知らず顔するは安からざる徒者なり。御門の當番は何奴ぞと怒りける。加藤が兵聞き敢ず、主計頭清正なり。何奴とは聞えぬ申分哉と、口々に匂る。治部少輔聞くよりも、御勘當の清正が、いつ御免にて斯様に振舞ふぞ。仔細を云へと散々に怒り、御門口騒動す。將軍聞召され、松の丸殿を御使にて、治部少輔通り候へと仰付けらる。時に清正大音揚げ、御門に罷有る加藤主計が者共、治部少輔御用有る間、入れ候へと上意なり。夜中狼藉者も紛入るべき間、能く見分けて通し候へ。治部少輔は背の少き瘦男の、臆病げに見ゆる奴にて紛れはなきぞ。通し候へと匂しるに付、御門を開きつゝ、五奉行何れも内へ入り、治部少輔が通るを、加藤與左衛門・出田宮内等立挟みて有りければ、三成も刀に手を懸け通りける。暫く有りて、家康・景勝・隆景・輝元・秀家を始め參らせ、大名小名雲霞の如く登城有りしかば、廣庭も狭く成る。其時將軍竝に北政所・松の丸殿以下の上臈・女房達、皆々石垣の背、築地犬走へ挑灯を上げて、御坪み成されつゝ、仰せられけるは、未だ御前をも御免なき者が、萬事取持ち候間、石

垣より上には無用なりと、御叱り成されけれども、清正少しも痿まず、石垣の傍に立居ける。去れども御詞も懸給はず、如何思召しけん、女郎達に挑灯を燃上させ、清正を頻りに御覽じ成され、御落涙せきあへねば、政所よりも松の丸殿よりも、女郎達を御使に下され、御前は大方濟より候ぞ。心に氣遣ひ仕るべからず。御前をば吾々に任せ候へと、仰せられければ、清正手を合せてぞ悦びける。去る程に、夜も明方に成りしかば、諸大名何れも退出仕るべきにて罷出でければ、清正も退出せり。清正が今宵の働、傳へ聞く輩迄も譽めぬ者はなかりける。

加藤清正將軍御勸氣御赦免

北政所の内意

夜明けぬれば、北政所並に松の丸、京極御局より御使を主計頭に下され、清正御勸氣の義、早や相濟み候なり。去りながら、清工程の者の勘當を、女の取成しにて召直さるゝ事、後難遁れ難し、表向にて、家康・景勝・利家取成しにて、召直され候はんと、の義にて、只今將軍御廣間へ御出で成され候間、定めて頼て召出さるべく候

清正勸氣
赦免

條、左様に心得候て、進物など何にても上げ候はんと存候はゞ、書立を以て御城御臺所へ主計者を著上ぐべしとの御使有りけるに、案の如く家康より、榊原式部大輔康政を使にて、只今將軍御廣間へ御出で成され、主計頭事仰せ出さるにより、景勝・利家・吾等三人取合ひ申候へば、夜前早速罷出候段神妙に思召され、御勸氣御赦免成され候。委細は德善院治部少輔・右衛門尉より、申來るべしとの義なり。然る所へ、德善院玄により大池清左衛門、治部少輔より柏原彦左衛門、増田より谷市之助使とし、主計頭事、數箇度不届仕り候へども、夜前早速登城致し、神妙に思召し、御勸氣御免成され候間、早々登城仕るべしと申越し、三使潛に申けるは、三奉行内意にて申候は、將軍未だ筑前守殿にて御座候時、清正は虎之助と申し、御腰元にて召仕はれ候時分の如くに、何事を仰せられ候とも、御口答仕られ間敷候。今は天下の主とし、攝政關白迄に御昇進ましゝ候間、古の如くに存せず、何様の義を仰せられ候とも、謹みて承るべき由申越し、三人の使は歸りけり。清正は榊原式部が歸りし後より、加藤傳藏を使にて、唯今三奉行使者を差越し候に付、頼て登城仕るなり。何事も口答

加藤清正將軍御勸氣御赦免

仕る間敷と申越し候が、左様に上意之れ有り候やと申越しければ、家康御返事に、景勝・利家・吾等三人、御傍を少しも去らず罷有り候が、左様の義は仰せ出されず候間、何事にも申分候は、御前へ罷出で、次でに何事をも眞直に申上げられ候へ、其儀計りに又御勘當候は、景勝・利家・吾等三人、申分け仕るべしとの返事成りしかば、清正斜ならず悦び、長袴にて登城仕る。進物には虎の皮五枚、三間續きの猩々緋折に包み、御廣間の縁迄持出づる。石田治部少輔奏者にて、披露申上げければ、將軍御覽有りて、此進物は、朝鮮にての亂妨物にて有るべしと仰せられ、主計頭御前へ近く参り候へと御意成されければ、清正は柿の帷子に紺の大筋の長袴にて、膝に障る大鬚を作澄し、御前近く畏りければ、將軍は國綱の御太刀に御手を懸けさせ給ひ、偕々己は古へ虎之助とて、小性にて召仕ひし時の分別も、亦只今一國の主となし、異國退治の大將を仕る時の分別も替へず、傍輩競を仕り、小西攝津守を堺の町人と悪口し、日本に人も無き様に大明へ申越し、又大明への勅答にも豊臣朝臣と書きたるとな。汝よく承り候へ、豊臣を免す事は秀家・秀保・秀俊三人の外は、天下に赦免な

秀吉清正
に詰問清正の返
答

し。己には誰が免して斯くの如くには書きたるぞ。是非に及ばざる次第なり。仔細を申上げよと、したゝかに御尋ね有り。清正謹みて、家康・利家の方へ向ひてし申けるは、斯様に申上げ候へば、返答に似て候へども、能く聞召され下され候へ。勅答を調へ申候事は、清正蝗乗といふ所に在陣仕り候時、大明天子より勅使参り申候は、往古足利公方鹿苑院義満が時より、吾が大明へ内屬し、日本國王の封號を請けしより以來、貢物代々納め來り候處に、萬松院義晴が時、細川右馬頭高國が使者、宋素郷が寧岐府にて亂を起せしより以來、市舶を罷め貢物を絶し、剩へ只今關白秀吉、小國の臣下を顧す、干戈を動し、朝鮮を攻め伏せ、大明境まで兵を押詰め候に依り、李如松を大將にて、四十萬の人数を出す所に、其勢に恐れ、日本勢武具を捨て、小西行長逃散に付きて、朝鮮王城まで追詰め、碧蹄館にて合戦し、太閤名代の者を先きとし、一人も残さず逃去り、それより釜山浦まで、傳々の城に居候者迄、残さず討取り、朝鮮の内日本人といふ者一人もなし。清正一人計りなり。清正は萬事淳直に申付、慈悲第一と叡聞に達し候間、汝が手へ生捕る朝鮮王子並に國中第一の美女を此方へ

加藤清正將軍御勅氣御教免

返進らせ候へ。左候は、一命を助け、北京より數千艘の船を仰せ付けられ、日本へ送り届くべし。此勅諭を用ひずば、蝗乘へも四十萬騎を差越し、一人も残さず討果すべしとの宣旨なりと申渡すに付、清正承り、彼美人は鍋島生捕り候由承り候に付呼寄せ、王子兄弟並に美女を勅使に見せ候へば、紛れ無き事なりといふに付、天子への勅答を書認め、王子は太閤へ伺はずして返す儀成難し。美女は勅使の前に置き、大明筋へ働き候、小西行長は、日本堺の町人なれば、本の大將にてなし。宗對馬守縁者たるにより、案内者に差遣せば逃げたるも道理なり。又豊臣と書き申す事は、清正三歳にて父彈正に離れ、苗字を漸く存じたる計りにて、氏も系圖も存せざる故、豊臣とは書き申候なり。扱又右の勅答に、小西は案内者、本の大將は清正なり。之れへ四十萬の御勢を下され候は、盡く切崩し、其勢に追詰め、大明國迄攻入り、北京を焼拂ひ、天子をも朝鮮王子の如く生捕り、日本へ引渡し、支那四百餘州を屠戮、灰燼と成すべしと、日本を飾り小西を惡しく申つるなり。扱美女をば門外に磔に上げ、清正自身等長の鍵にて、芋刺に突通し見せ候へば、大明人恐怖れ、舌を

秀吉清正
の返答に
感ず

震はし逃散す。それよりして、清正をば鬼神上官と申して、大明・朝鮮にて、清正を恐れざるは候はずと、辯舌は達したり、立板に水を流す様に、一々に申しければ、將軍御涙を流され、扱秀吉に能く似たる者哉。彼が後紐の時より、秀吉が膝の上にて生立ち、謀の段々を能く見置き、其儘似せたる者なり。秀吉が爲めには近き一族たれども、餘りに腹悪しき曲者にて、喧嘩すきを少時より仕るに付きて、筋なく死を仕るべき奴と思ひ、今迄は隠せしなり。彼れが母と大政所殿とは従弟なり。いかにも近き間なり。されば豎子の時よりも、座敷の上の立翔は不骨なれども、武者事に見落す事なし。されば今日豊臣朝臣の姓を御免成され候間、向後心立を嗜み、神妙に覺悟を爲すべしと仰せ下され、御盃下されければ、清正涙に咽びつゝ、兎角の事に及ばず、久々にて御盃を頂戴し、三度傾ける時、將軍それくと仰せられければ、御縁通りに居並びたる四座の大夫共、目出度き謠を諷ひ出し、御盃度々廻りしかば、家康景勝、清正に向ひて、家人共も心許なく存すべし、罷り歸り五年以來骨折りたる家の子郎等に申聞かせ、安堵させよと申さければ、清正畏りて、御禮申上げ、御前を

罷立ちにけり。扱も清正罪科の條數の内、大明の冊使李宗城を家人鶴平次・三宅角左衛門追劔ぎしたる事は、御尋ね有るとも申分け成すまじきと、清正案じ居たるに、鶴・三宅進み出で、之は清正曾て御存じなき事、吾々も存せず候へども、足輕共追劔ぎ仕るは、兎角の申分成され難く、只鶴・三宅仕たりと仰せ上げられ候は、定めて御用捨あるべからず。さ候は、平次角左衛門罷出で、切腹仕るべしと、頻りに申切つて待ちけれども、申分成るまじきとや思召けん、又清正が運や強かりけん、其御沙汰も無かしりかば、主計頭家人、悦び勇む事限りなし。されば行長・三成心を合せ、清正を惡み、讒言度重ねしかば、五年過ぎ、關ヶ原一亂の砌、清正別して粉骨し、小西が宇土城を攻落したりとぞ聞えし。

將軍秀吉公大佛を鑄給ふ

去る閏七月十二日の大地震にて、京・伏見は扱置き、畿内近國の堂塔・伽藍・神社を始め、人民の屋々の損じたる事、夥しとも中々なり。就中、將軍御建立なされたる東山

秀吉大佛
像を射る

の大佛殿大破に及び、佛像裂け破れしにより、將軍大に御腹立有りて、大佛殿へ御越し有りて、佛に向ひ、夫れ佛像を安置するは、國家の太平を守護せしめん爲めなりき。然るに世尊として、衆生の艱苦を拒ぐ事遂げず、剩へ吾身をさへ保つ事能はずして、斯くの如く摧け破る。何の益か有るべきとて、持たせ給ひたる弓に鷹股つがうて、ゆらくと引張り、弦音高く切つて放ち、大佛の胸板に籠中せめて立ちたりける。御供の人々は扱置き、傳へ聞く貴賤上下、興を覺さぬは無かりける。扱御使を下され、佛像を求めらるゝに、信州善光寺の無量壽佛を迎へ奉り、大佛殿に安置し参らする。其以後、又數萬人の人夫を集め、百工に命じ、大佛を鑄直しつゝ、善光寺の佛像をば本寺へ返遣されけり。大佛殿のみならず、方々にて大厦・高塔の崩懸るに打れ、壓殺さるゝ男女老若、幾十萬といふ數を知らず。中にも伏見御城大破して、將軍の召仕はるゝ上臈・女房達、壓に打たれ大方死傷せしかば、召仕はる者共、俄に集め難ければ、其間の御用として、洛中・伏見・大坂・堺の傾城・遊女、容顏美麗なるを百十三人選出し、御簾中にぞ召仕はれける。將軍、元來大度の量飽迄なりしかば、尋常

將軍秀吉公大佛を鑄給ふ

に越過したる事共多かりしかども、素姓才智四海に溢れしかば、少しづつの誤は、人の誹も無りしとかや。今度破損せし大坂・伏見兩城の修理仰付けられしかば、大明の冊使も長崎に逗められ、御一左右次第京著致すべきの旨仰せ出されけり。

大明兩使伏見著岸并兩使登城

大明の正使都指揮楊方亭・副使遊擊沈惟敬、並に朝鮮使黃愼・朴弘等、小西攝津守行長と同船にて、八月十八日、泉州堺に著岸す。此旨申上げければ、將軍大に御威成され、増田右衛門尉長盛に仰付けられ、大坂・堺を點檢し、牛・豕・雞を數百匹相調へ、大明・朝鮮の四使に下されけり。扱又加藤主計頭清正を御使とし、遠路渡海を祝著に思召され候。先づ堺に五六日逗留致し、休息仕り候て、伏見へ上著然るべしと、仰せ遣されければ、大明・朝鮮の四使、清正が來ると聞き、此五年以來、武勇の程を知りてんげれば、恐れ悲みし處へ、主計頭參られ、穩に上意を演べければ、四人の使者愼みて、畏き旨御請け申上げけり。去る程に同月廿九日、大明の冊使楊方亭・沈遊擊等、

大明朝鮮
の兩使堺
に著る

兩使上洛
の模様

堺を出でて上洛に赴きけり。路次の警固・辻固・鎗・長刀を立並べ威儀嚴重なる次第、言語道斷の形勢なり。天下の貴賤・老若・男女・僧俗ともに、大明より太閤を封する勅使を見物せんとして上集り、堺の北の端より伏見迄の道、十二里が間は沓の子を打ちたる如く、充滿ちたり。人は顧る事を得ず、踵を爪立て、押合ひたり。大明より本朝へ勅使立つ事、近代未聞の事共なり。誠に斯様の珍事を見ん事は、末代の物語なりとして、巷に滿ち道に擁して、秀吉公の威徳を感ずる聲々、洋々として耳に盈てり。冊使も爰を晴と威儀を調へ鸞輿に乗り、蓋を差懸けさせ、笙・箏・篳篥を鳴らし、笛・太鼓にて管絃を奏し、幢をさゝせて、已に伏見の旅館に著く。即ち正使楊方亭は、宇喜多中納言秀家の館に入り、副使沈惟敬は蜂須賀阿岐守家政宿所に入り、御馳走大方ならず。時に將軍は、柳川豊前守調信を以て、朝鮮の使者黃愼・朴弘張に仰付けられけるは、今度、大明冊使を渡す砌、朝鮮の王子、自ら來り謝せずして、兩使を以て申す事、寔無禮の至りなり。其罰甚だ輕からず。然る間、明使には御對面有るべく、其方には御對面成されざる旨、申出されければ、朝鮮使の黃愼・朴弘張等驚懼れ、悲

兩使伏見
に著る

秀吉朝鮮の無禮を詰る

伏見城中の模様

み愁ひて、小西攝津守行長を頼み、頻りに御對面下され候へと、様々歎き申しけれども、將軍遂に免し給はず。之に依りて、朝鮮使の泣き悲しむ事斜ならず。さる程に九月二日、大明使に御對面有る可き由、仰せ出されければ、正使・副使同道して、伏見城に登りける。下馬より御白砂迄、警固の侍充滿ち、威行傍を拂ひて魏然たる粧ひ、言語に及ばざる事共なり。大老中には、徳川内大臣家康卿・加賀大納言利家・上杉中納言景勝・小早川中納言隆景・毛利中納言輝元・宇喜多中納言秀家・大和中納言秀保、小年寄には堀尾帶刀先生吉晴・生駒讚岐守正俊・中村式部少輔一氏、五奉行には淺野彈正少弼長吉・徳善院玄以・石田治部少輔三成・増田右衛門尉長盛・大谷刑部少輔吉隆等を始め、武將には加藤主計頭清正・小西攝津守行長・黒田甲斐守長政・立花左近將監宗茂等を始め、天下の大名小名、一人も残らず出仕の體を刷ひ、殿中より庭上迄、膝を屈して並居たり。縁の通りには、黄母衣の衆・御使番・御馬廻・大身小身・雲霞の如く充滿ち、威儀嚴重なり。大明の冊使兩人、已に御殿に著座す。正使の楊方亭は、誥命を持ちて前に立ち、副使の沈惟敬は、金印を捧げて、階下に立つ。良久し

沈惟敬秀吉の威に懼る

明國よりの進物の

く有りて、殿上の黄幄を卷上げ、侍従二人に太刀を持たせ、兩方に隨ひて將軍秀吉公出で給ひ、御座に著き給ふ時、出仕の百官・大名・小名・殿中・庭上一同に頭を地に付けて拜禮せり。沈惟敬、此威光の甚しきを見て、大に恐れ震ひて、金印を持ちながら、地に匍匐して平伏したり。正使の楊方亭は、惟敬がする真似をして、震ひ戦ぎ、伏倒る。其體の笑しき言語を絶する計りなり。秀吉公著座有りて、冊使渡海苦勞の旨仰せ出されければ、楊方亭も沈惟敬も、我を叱責し給ふと心得て、趨起として足進まず、囁嚅として口戻れり。其時小西行長進出でて、之れ天朝禮を遂ぐる時なり。謹みて禮を行はるべしといへば、正使は誥命を渡し、副使は金印を奉り、封王の冠冕・衣服竝に日本諸臣の冕服五十餘具調進し、位階に依りて著服せらるべしと申上げけり。進物は生きたる孔雀・麝香・白象・黒象・馬・唐犬、次に金襴百卷・緞子百卷・早綾二百端・綾・白端・錦五十卷・縮子二百卷・虎皮三十枚・豹皮三十枚・唐皮・青皮・猩々・緋・何れも三十枚宛なり。大明より用意し來る冠服は三十具計りなり。日本に斯様に大名多かる可しとは知らず、俄に調進する事も叶はず、冊使の著ける衣服迄、其數に

大明兩使伏見岸井兩登城使

秀吉の大
量

入れ奉り、石田治部少輔之を見て、將軍に申上げけるは、勅使の舊著迄奉るは如何、請取り候はんやとぞ伺ひける。太閤聞召し。打笑ひ給ひ、日本に大名多くして、彼が衣服の用意不足して、舊著を奉る事、猶ほ以て吾國の威徳なり。見分けぬ體にて、それぞれに著服すべしとぞ仰せける。彼程の大禮に少事を咎め給は、遲滞すべきを、元來大度の量有るに依り、一言の下にて道行しける豪氣の程こそ由々しけれ。冊使拜答の禮畢りて、旅館へ歸へれば、其後より石田治部少輔・長束大藏大輔御使にて、饗膳美麗を盡し持成しけり。翌三日に冊使等を宴すべしと仰付けられ、兼日より定め給ひし饗宴なれば、善盡し美盡せり。御殿の上壇中央を御座と定め、次の間右の方に大明兩使の座を設け、左の方御相伴の爲め、内大臣家康・大納言利家中納言景勝を先きとして、中納言以上の大名七人の座を設け、秀吉公威儀を明人に耀さんと思召し、紅葉衣に緋の大口、大明の冠を著し給ひ、中央の曲糸に坐し給へば、御相伴七人の衆も、皆大明の冕服を著し、何れも曲糸に坐せらるゝ。残る諸大名も大明の冕服にて、南の縁に坐せられける。廊下・庭上には、諸大夫以下の侍、満々として

明使饗宴
の様

並居たり。膳部は大明の禮法に隨ふべしと沙汰ありて、高さ三尺に五尺四方の膳、牛・羊・雞・家魚鳥を盡して調味し、金銀の鏤飾の作花、丹青を粧ひ、傍も耀く計なり。安藝宰相秀元・結城宰相秀家を始とし、宰相以下侍従以上、歴々の若大名十餘人、色々の装束に出立ち、綾羅錦繡を飾りたり。三獻の御酒・種々の御肴・様々の折敷重ね、山海の珍物を極められ、秀吉公御盃を明の冊使に下され、獻盃の禮終りければ、歌舞管絃は唐朝より來れば珍しからず。日本に弄ぶ亂舞・拍子を仰付けられ、即ち觀世金春、御舞臺に伺候し、既に御能始まり、謠の聲に殿中も澄渡れり。嘹唳の笛の聲、嗙嗙の鼓の響に、勅使耳を驚かし、こはそも何事ぞと見居たるに、大鼓打つ指より血を流し叫びける懸聲に色を變じ、何程の罪人なれば、斯程の糺明に及ぶぞと、楊方亭も沈惟敬も色を失ひ恐れければ、通辭の者之は大鼓役者にて、罪人には有らずと委細に言聞かせければ、其時色を直しける。咲敷き次第言ふ計なし。實に九詔三夏の音は、折楊皇花の耳に入らざる例有れば、聞き馴ぬ事に驚くも理なり。秀吉公も大明の冊使來るを悦び、冊使も旅館に歸りて、今日の享宴を忝しと、喜悅の眉を開きける。

大明封號の儀相違に依り秀吉公再び朝鮮征伐を催す

將軍は花島の御茶屋へ入り給ひ、御膳を上り常に伺候ひし兎長老三長老哲長老を召し、大明の誥命璽書を讀ませ聞き給ふに、小西攝津守は、吾僞りて申せし事、一々顯れん儀を恐れ、三人の長老達に囁きけるは、將軍若し書翰の趣を聞き給はば、御腹立有りて、和議破るべき事疑ひ無く候間、日本國王に封ずると有る文章を讀みかへ、大明の大王に封じ奉ると、讀み給へと頼みければ、長老達領掌せず。流石異國、本朝の大義を僞りにて暗まさん事、本朝末代の爲すべき瑕瑾とて、將軍の御前にて、有りの儘にぞ讀上げたる。其辭に云、

明王の書 翰其一

聖神廣運、凡天覆地載莫不尊親。帝命溥將、暨海隅日出罔不率^レ。俾昔我皇祖誕育^{〔本元〕}多方、龜紐龍章遠錫扶桑之域、貞珉大家榮施鎮國之山^{〔副永樂〕}。以海波之揚、偶致風占之隅、當茲盛際、宜續彝章。咨爾豐臣平秀吉、崛起海邦、知尊中國、西馳一介之

明王の書 翰其二

使、欣慕來同、北方叩萬里之關、懇求內附、情既堅於恭順、思可^{〔レ〕}斬於柔懷、茲特封爾爲日本國王、錫之誥命、於戲寵賁、芝蒸襲冠裳於海表、風行卉服、固藩衛於天朝、爾其念^{〔レ〕}臣職之常修、恪循要策、感皇恩之已渥、無替擬誠、祇服綸言、長遵聲教、欽哉。萬曆廿三年乙未正月廿一日

又頒日本國王詔諭一道、至廿三日復頒勅諭一道、其文云、皇帝勅諭日本國王秀吉、

朕恭承天命、君臨萬邦、豈獨入安中華、將使溥海內外日月照臨之地、罔不樂生而後心始慊也。爾日本平秀吉、比稱兵于朝鮮、夫朝鮮我天朝二百年、恪守職貢之國也。告急於朕、人々是以赫然震怒、出偏師以救之。殺伐用張、原非朕意、迺爾將豐臣行長、遣使藤原如安、來具陳稱兵之由、本爲乞封天朝、求朝鮮轉達、而朝鮮隔越聲教、不肯爲通、輒爾觸冒以煩天兵、既悔過矣。今退還朝鮮王京、送回朝鮮二王子、陪臣、恭具表文、仍申前請、經略諸臣、前後爲爾轉奏、而爾衆復犯朝鮮之晉州、情屬反覆、朕遂報罷。爾者朝鮮國王李哈、爲爾代請、又奏釜山倭衆、經年無譴、專

大明封號の儀相違に依り秀吉公再び朝鮮征伐を催す

俟封使。具見恭誠。朕故特取藤原如安、來京令文武群臣會集闕庭、譯審始末、并訂原約三事。自今釜山倭衆、盡數退、回不留住一人。既封之後、不敢別求貢市、以啓事端。不敢再犯朝鮮、以失隣好。披露情實、果爾恭誠。朕是以推心不疑、喜與爲善。因勅原差遊擊沈惟敬、前去釜山、宣諭爾衆、盡數歸國、特遣後軍都督府僉書署都僉事李宗城爲正使、五軍營右副將左軍都督府署都督僉事楊方亭爲副使、持節賚誥、封爾平秀吉爲日本國王、賜以金印、加以冠服。陪臣以下、又各量授官職、用諄恩資。仍詔告爾國人、俾奉爾號令、毋得違越、世々居爾土、世々統爾民。蓋自我成祖文皇帝、賜封爾國、迄今再封、可謂曠世之盛典矣。自封以後、爾其恪奉三約、永肩一心、以忠誠報天朝、以信義睦諸國、附近夷衆、務加禁戢、毋令生事於沿海。六十六島之民、久事微調、離棄本業、當加意撫綏、使其父母妻子得相完聚。是爾之所以仰體朕意、而答天心也。至於貢獻、固爾恭誠。但我邊海將吏、惟知戰守、風濤出沒、玉石難分。効順既堅、朕豈責報。一切免行、俾爾後襲遵守朕命、勿得有違。天鑒孔嚴。玉章有赫、欽哉。故諭二月初三日、又頒二使勅諭及沈惟敬勅諭各一道、皆

申勅三事、各要遵行。

とぞ讀みたりける。將軍秀吉公聞召して、大に色を變じ、眼を瞋し、憤怒甚しく、大音揚げて宣ひけるは、文章の趣、大明の皇帝吾を封じて日本の國王とす、言語道斷の曲事なり。吾武略の名譽長せるに依り、既に日本の主たり。何ぞ大明の力を藉らんや。前日小西申上げけるは、大明より、吾を大明國の皇帝に封す可しといふに依りて、朝鮮表の軍勢を引取りぬ。斯く有るべしと知りたらば、生捕りし朝鮮王子奴を還さず、王城の人數を引取るまじき者を、口惜しとも無念ともいはん方なし。小西奴日本に在りながら、志を大明に通ずる所、其罪輕からず。三族の刑に行ふ共、何ぞ飽き足らんや。吾を瞞しける腹立たしさよ。小西奴呼出せ、手討にし首を刎ぬべしと知りながら、即ち召したる大明の繒物の冕服を脱ぎ、冠を脱ぎて庭上に抛ち、踊上り踊上り怒り給ふ。諸大臣以下色を失ひ、手に汗を握り、唾を吞み、小西未だ御前へ出ざる内に、兎長老諫め申して曰く、大明は中國にて、諸國に勝りたれば、古より國封を請る事無禮に候はず。今御威光目出度きに依り、冊使を奉る事、古今稀なる例

秀吉憤怒す

兎長老の諫言

なり。願くば冊使を褒し返書を遣され、好を通ずるは本朝の光輝、末代の龜鑑たるべしと申し上げられしかば、顔色少し解け給ふ所へ、小西は召に應じ、震戦き伺候せり。秀吉公御太刀を叩き、大の眼を見出し、怒り匂り給ふ聲、唯雷の鳴落るが如く、小西を己に御手討に成さるべき所を、三人の長老達御袖にすがり、口々に諫め止め參らする。小西も震ひく懐より、三奉行の命を受けて申行ひし條々、數通の證文を取出し、行長一人の爲業に有らざる旨申上げければ、憤りを押へて止み給ふ。小西も辛うじて命助りて、宿所へ歸りける。秀吉公は御廣間に出で給ひ、加藤主計頭清正竝に西國・中國・四國の諸大名を呼び、仰せ出されけるは、今度の次第、憤押へ難しと雖も、大明遙々と冊使を奉る所に、又宥免せずんば有るべからず。冊使も久しく留むべからず。明日堺迄歸すべし。吾再び大軍を起し、朝鮮を攻平ぐべし。皆々用意せよと仰付けられて、朝鮮入の日限を定め給ふ。翌日四日に、大明の冊使皆すごすごと伏見を立ち、堺の津へぞ下りける。楊方亭沈惟敬等相議しけるは、吾等萬里に遠來して、御返事さへ取らずして還るは、何の面目有りてか人に面を向くべき。

再び朝鮮
征伐

明朝鮮の
使節大いに窮す

且つ勅書の三事、初より行長と堅く約束せし事なり。今太閤遊撃を叱り給ふにより、行長迄迷惑に及ぶ條、是非無き次第なり。再び行長に見えて、此儀を論すべしとて、堺の浦に數日逗留す。秀吉公忿怒猶ほ止まずして、朝鮮の兩使黃慎と朴弘張とは、伏見に止めつゝ、御誅戮有るべしと仰せ出されけるを、三人の長老達、晝夜御前に相詰めつゝ、色々御詔言申上げられければ、御宥免成され、朝鮮の兩使命助かり、同八日、堺に下り著しかば、大明の冊使も明日出船すべしと定め、爰にて明使朝鮮使共に相議して曰く、我曹歸朝の時、大明朝鮮にて此爲體を明白に奏聞すべし。然らざれば、國事を誤る事疑ひ無しとて、只茫然として、進退爰に谷まりぬ。秀吉公は大明の冊使、萬里の雲海を航海し、簡だにも取らずして、空しく歸帆するを不便に思召し、且は其心の苦勞を哀憐し給ひ、柳川豊前守調信を御使にて、金銀數千兩吳服、太刀、刀影しく下し賜り、御返翰をば、此方より遣さるべしとぞ、仰せ下されける。九日に大明・朝鮮の四使、堺の浦を出船する刻、柳川豊前守調信、潛に朝鮮の正使黃慎に囁きけるは、來春再び朝鮮を征伐せられん事必定なり。汝等歸國せば、王子を

秀吉兩使
の情を憐

大明封疆の備相迄に依り秀吉公再び朝鮮征伐を催す

來朝させ、其宥免を乞ふべし。若し然らざれば、此二人の王子を擒にすべしと、清正・行長・長政・義弘等の四人の大將に仰付けられ、明年二月、大兵渡海すべしと告げければ、黃愼恐れ悲みて、大明二人の冊使に告ぐ。然れども沈惟敬は猶ほ之を信に用ひず。九月九日に大明・朝鮮の四使、已に堺の浦を出船して、歸帆にこそ赴きければ。文祿元年壬辰より、慶長元年丙申に至る迄五年の間、調ひし日本と大明・朝鮮との會盟の和談の事、朝鮮より王子をして、來り謝せしめざる事を太閤安からず思召し、又大明より、秀吉を封じて大明の皇帝に成すべしとの定め、行長並に三奉行の聞き違ひし事を怒り給ひ、再び大軍を起し干戈を動し、今度大明使等を追返して、將軍下令して曰く、加藤清正・小西行長兩先手にて、中國・四國・九國の勢は殘らず渡海し、朝鮮を攻め平ぐべしと仰出されしかば、九月の末より、九州・中國・四國の勢は普請を止めて、己が國々へ下り、來春朝鮮入の支度せり。東國・北國・畿内の大名集り、二三年の間築立てし伏見の御城、去る閏七月十二日の大地震に崩れしかば、別に又所を點じて、上の高みへ引上げつゝ、一日も休息させず、夜晝の堺もなく急がる。天

伏見城再
廣の普請

災と謂ひ人の勞苦と謂ひ、其上に又朝鮮に入る御觸を聞き、こは淺ましき次第哉と、心有るも心無きも、軍旅の勞れ土木の役、竝に起る事を愁歎し、仁政に非らずと咤く人有りと、顯に諫むる臣は無かりける。此四五年、吾人朝鮮に居住して、彼國の武勇を恐るゝに足らずと侮り思ふは、軍に負くべしとは思はねども、歸陣の後一年も休息せざるに、又陣觸あれば、船よ筏よ馬物具と、俄に拵急ぎ、人民の騷動斜ならず。最前は肥前名護屋迄御動坐有れども、今度は皆案内知りたれば、それ迄もなしとして、名護屋は在番計りにて、朝鮮へ兵糧運送軍勢渡海の爲め迄なれば、大將をば置かれず、何も來年二月、總軍又朝鮮に攻入るべしと仰せ出されければ、又大亂となりけり。

大明朝鮮四使歸帆

大明・朝鮮の四使は、已に肥前國名護屋に到り、渡海の順風を待ちて、數日逗留する處に、長政豊前に下り、清正は肥後に歸り、人數を催集め、渡海の支度急なりければ、

大明朝鮮四使歸帆

楊方亭も朝鮮の兩使も色を失ひ、周章騒ぐ。獨り沈惟敬は、少しも騒がぬ體に持成し、我れ命だに有らば、和議又調ふべしと、強ちに驚く氣色もなし。斯かる所へ、倭の將寺澤志摩守正成、關白の書を齎して來り、大明朝鮮使皆共に謝恩の表ならんと思ひ、披きて之を見れば、朝鮮を責むる一檄にて、内に朝鮮の三罪を列擧しつ。其語甚だ倨れり。

秀吉の書

日本關白豊臣秀吉朱印下責朝鮮國王李昞

(皇朝イ)

前年朝鮮使來、雖委悉下情、卒不達大明、無禮多々其罪一。既依沈都指揮、寬宥二王子竝夫妻以下、不先致禮謝、隨(天朝イ)明使過海之役、歷數日而王子不親來、唯馳黃朴之賤价、其罪二。大明日本之和交、依朝鮮之反覆、經歷數年、其罪三。右件々之大罪、雖天地豈能可蔽之乎。明春舉百萬大兵、屠殲朝鮮禽王李昞、懸首於日本獄門、且國城亦一炬成焦土者、猶指諸掌、爾莫悔。

とぞ書かれける。朝鮮使驚きつゝ先立ち、此檄を王京へ達しければ、朝鮮王敢て隠れ給はず、一通を寫し、大明へ進呈し、急に加勢援兵を下さるべき由、告げたりける。

朝鮮八箇道の貴賤上下、只途方を失ひ騒動す。十二月十七日、大明冊使、釜山浦に著きて、急ぎ帝都へ歸り、奏聞すべき由をいひて、同廿五日、釜山を出で浹川に至る。此時に朝鮮京畿道の都體察使李元翼は、先立ちて歸へりける朝鮮の兩使黃慎朴弘張に逢ひて、具に太閤の怒心を知りて、軍勢を集め、防ぎ戦はんと用意しけるが、今日、大明冊使の歸るに海邦寺にて行逢ひ、又日本の情を問ふ。楊方亭一々に申聞えければ、元翼さらば日本勢の多く著かぬ先に、先づ釜山浦の城を急ぎ攻め落すべしとぞ申しける。沈惟敬制して曰く、驢は眞に正に乗り動く可きも、又宜しく慎む。初手の軍を仕損じなば、後悔すとも叶ふべからず。其上日本人は武勇甚だ勝れたり。只策萬全なるを兵家の良將と稱すれば、幾度も謀略にて攻討つべしと申しければ、元翼此語に冷かされて、兵を出す事を停めたり。斯くて年も暮れ、明くれば萬曆廿五年丁酉二月十六日に、冊使關に入り、何れも日本にて多くの繒を受けて歸るとぞ見えし。遊擊沈惟敬は、人の疑ひ笑はん事を恐れ、和議の破れたる事を蔽隠し、日本國王關白秀吉、十分に恭順し、冕冠を戴き、頭を叩き恩を謝せんと、様々作

沈惟敬復命を詳る

言を奏聞す。日本より大明へ贈物なくば、猶ほ人疑ひあるべしと思案を廻らし、攜來りし金を以て小西行長に誂へ、猩々毡四條天鵝鶩及び大小の倭の金器皿三十餘握を買取りて、其櫃の上に日本國王豊臣秀吉餽遺す所の什物なりと大書して、荷はせ、兵部が所へ行きて、之にも贈物を遣し、之より帝都北京に到り、太閤貢獻の物なりと披露し、朝廷に奉る。明人皆笑ひて、猩々緋天鵝絨は南蠻より出づる土産なり。然るを日本の方物なりとす。尤も笑ふべき所なりと難じける。倭將正成が惟敬に與へる所の泥金の屏風迄、此内へ入れて奉る。朝廷之を罪せずして、勅して内府に藏させられ、司馬石星も惟敬が大功を立つといひて褒美せり。去り乍ら、猶も必許なくして、眞實に和議調ひたるかとして、楊方亭に問ふ。方亭釜山にて約束し、惟敬が節制を受ければ、一味朦朧として、敢て明にいはず。されども太閤の返書無かりければ、人の疑ひ彌増すなり。惟敬之を迷惑して、再び釜山に行きて、人に誂へて返書を書かせて、只今到來の由にて奉れども、運の盡きにや、年月を書落しければ、徐黃門之を見て、惟敬が賈なりと吟味しければ、群臣一同に彼が奸謀を誹る。惟敬

も爲方なく、慙懼れてぞ居たりける。

朝鮮征伐記 第十終

朝鮮征伐記第十一

加藤清正・小西行長、朝鮮に入る井太閤より

仰付けられし軍法條々

大明・朝鮮の和議、一時に破れ、重ねて朝鮮征伐仰出されしかば、貴賤上下、夜を日に續いで支度せり。先手は先例の通り、加藤主計頭清正・小西攝津守行長に仰付けらる。兩人を御前に召し、清正には國光の御腰物を下され、此太刀を帯び朝鮮を攻平ぐべし。猶歸朝の上に、大身に仰付けらるべしと、直に上意なり。小西行長には、五年以來表裏を申し、何方此方と仕る事、是非に及ばず。殊に王子を返送りし事、千悔盡し難く、御成敗仰付けらるべく候へども、先づ差延ばされ候なり。今度朝鮮引口の様子に依るべしと、したゝかに仰付けられしかば、行長赤面して、罷出でけ

加藤小西
互に出征
を急ぐ

り。小西熟と思ふに、今度、朝鮮表の首尾、一期の大事たるべし。進發若し延引せば、又御機嫌悪しかるべしと恐怖して、中國大名へは、二月に渡海仕るべしと觸れられけれども、將軍の御憤を恐れ、正月上旬に出船せしむべしとて、九月下旬より肥後に下り、其用意頻なり。加藤清正は之を聞き、誠に劉琨が、祖生が先鞭を著けし事を恐れ、戈を枕にして晨を待つ處なり。行長に先を駈けられじと、日夜の支度急なりける。さる程に、慶長元年も鬧しきに早や立ち、同二年になりける。加藤清正は部將豊臣茂守等を領し、先づ武者船二百餘艘にて、正月十三日、順風を得て渡海し、十四日に朝鮮に到り、竹島の古城に入る。去年より朝鮮に残し置きし勢を一所に合せて、機張に陣を取り、頓て勢を出し、梁山を攻む。梁山の太守孔平春を追出し、加藤美作守を籠置き、土民は一人も打散らさず安堵させ、別に役を懸けず。同十五日に小西行長が兵船、釜山浦の外洋より、進んで豆毛津の浦に著く事、毎日引きも切らず。岸上に四色の旗を立て、觸れ聞かせけるは、朝鮮の人民疑義を抱く事なく、皆舊の在所に歸り安堵せよと、書載せたり。同廿二日に清正が先手の

加藤清正小西行長朝鮮に入る井太閤より仰付けられし軍法條々

勢、船にて西生浦に渡り、城取を見廻し、依つて牌文一紙を示して云く、

日本國加藤主計頭豊臣清正、受太閤殿下命令、再航海於此道、使遣使者于朝鮮之京城、回報之間、慶尙左道之民、更勿疑此書、莫恐怖而退散、先茲遣吾臣美濃部金太夫、以令告報也。

慶長二年丁酉正月日

平清正書牌

と書きて、所々の百姓に觸れ聞かす。是より加藤・小西、先手の勢三四萬渡海して、絶えず兵糧を運び、城々へ入れけり。二月朔日、小西行長、釜山の古城に行きて、材木を築めて内に殿主を上げ、外に三重の堀を掘り、塀欄丈夫に付けて、金吾中納言殿を入れ置き、之を本城とし、普請を始め據久の計を成せり。朝鮮の士民、初め和議の調ひたりと思ひ、山野に通れ隠る者、漸く還住せしに、今又日本の大軍到るを聞きて、晝夜驚惶して、荷物を運び、身の隱家を求め、騒ぎ立つ。釜山より王城迄の道筋は、數年の大亂に日本人通ひければ、亂妨せられて人居住せず。全羅道の地方は、兵火を脱れたれども、城々皆明けて、數年修理を加へざれば、之も去年夏より當

春迄、塀一所も付けず。然る所に、日本の大軍俄に至れば、朝鮮の貴賤老若、先年の敗軍に手懲りして、未だ攻め來らざる先に、親は子を負ひ、夫は妻の手を引き、資財・雜具を持荷つて、菴遺戸を放取り、只蛛の子を散らすが如く、便に隨ひ、南より北、東より西に徨ふ有様、目も當てられぬ次第なり。國王も前に懲り給へば、先づ宮中の后妃皇子を連れて、海州へ落ちんと犇めき給ふ。之に依り、軍民各一家の氏族を連れ、遠き境に移らんとす。大明より在番せし兵、之を止むれども聞かず、國王の第一の寵臣柳承寵さへ、山中城々の兵糧・草糠を王城へ運び取らんとし、託けて尙州へ逃去りけり。將官の權慄等、獨なりとも軍をしつべき兵なるが、各戰はずして東方の境へ逃走る。此由急ぎて大明へ告ぐる事、毎日引きも切らず。餘りに恐怖して、日本の兵百萬騎、分つて十三備とし、大明へ向はんとす。關白も名護屋に立ちて住し、自身軍の成敗を主りしかば、騶馬日々に馳せ、郵吏足齎ると風聞しければ、大明・朝鮮の間の早馬、櫛の齒を引く如し。大明の徐給事も亦、朝鮮にありしが、註進して云く、日本の兵日々に増し、兵糧日々に積る。然れども、軍を出し城

を取り、人を殺す事をせず。思ふに、潛に關白の親行を待つに似たりと告げ來る。獨り山海關の主事張時顯のみ申しけるは、關白秀吉を料るは此時なり。實に手を住めて粗略に爲すべからず。彼の六十六島の觀望、全く爰に懸れり。最前志を得ず、今國を傾け來る。時をば失ふべからざるなりといひて、罪を石司馬に歸す。兎や角といふ内に、三月になりにけり。日本より軍法條々仰せ下さる。其詞に云、

條々

秀吉軍法の條々

- 一、先手朝ノ儀、加藤主計頭・小西攝津守關取ノ上ヲ以、可爲二日代、但非番ハ二之目ニ可相備事。
- 一、三番、黒田甲斐守・毛利壹岐守・島津又七郎・高橋九郎・秋月三郎・伊東民部大輔・相良宮内大輔、可相備事。
- 一、四番、鍋島加賀守・同信濃守。
- 一、五番、島津薩摩侍從義弘。
- 一、六番、長曾我部土佐侍從・藤堂佐渡守・池田伊豫守・加藤左馬助・來島名代中川修理

大夫・菅平右衛門。

- 一、七番、蜂須賀阿波守・生駒讃岐守・脇坂中務大輔。
- 一、八番、安藝宰相・備前中納言、此兩人同勢可爲代々事。
- 一、釜山浦城、筑前中納言御目附、太田飛驒守在番仕、先手之註進無油斷可仕事。
- 一、安骨浦之城、立花柳川侍從。
- 一、加徳之城、高橋主膳・筑紫上野助在番。
- 一、竹島之城、羽柴久留米侍從在番。
- 一、西生浦之城、淺野左京大夫在番。
- 一、先手之衆御目附毛利豊前守・竹中源助・垣見和泉守・毛利民部大輔・早川主馬・熊谷内藏丞、此六人被仰付候條、任誓紙之旨、總樣勸等之儀、日記相付候テ、善惡無見隠聞隱、具ニ可令註進事。
- 一、諸事高麗ニテ之樣體、七人ヨリ御註進申上儀、正意ニ可被爲旨、被仰聞候間、存其上旨カ縱縁者、親類雖知音、無敢偏頗、有様ニ可令註進事。

加藤清正小西行長朝鮮に入る并太閤より仰付けられし軍法條々

一、先手働等之儀、各、以相談之上、多分ニ付テ其ニ可隨、拔懸ニ一人二人トシテ、中廻候ハ、可爲曲事事。

一、赤國不殘一扁ニ成破申付、青國其外之儀ハ成程可被相働事。

一、舟手之働入候時ハ、藤堂佐渡守・加藤左馬之助・脇坂中務少輔兩三人申次第、四國衆菅平右衛門并諸手警固船共可被相働事。

一、右働相濟上ヲ以、仕置之城々所納之儀、各、見及、多分ニ付テ城主ヲ定メ、則普請等之儀、爲歸朝之衆、令割符丈夫ニ可申付事。

一、右七人之者共、七枚起請ヲ被爲書、諸事有様之體可申旨、被仰付候條、忠功之者ニハ、可被加御褒美、自然背御法度、族有之バ、右七人申次第、不寄誰々、八幡大菩薩可被加御成敗條、得其意不可有油斷事。

一、自然大明國之者共、朝鮮之京ヨリ、五日路モ六日路モ、大軍ニテ取出於陣取ハ、令談合、無用捨可被註進、御馬廻迄ニテ、一騎駈ニ被成御渡海、即時ニ被討果、大明迄可被仰付候事。案内ニ候條、猶油斷者可爲越度事。

以上

慶長二年二月廿一日 御朱印

とぞ載せられける。日本の軍勢は壹岐・對馬に充滿ち、順風次第に、相續いて渡海せり。海上の兵船引きも切らず、日々に著岸せしかば、釜山浦・安骨浦・加徳西生浦・竹島等の處は、軍勢ならずといふ事なし。平安・黃海・忠清の三道、全羅の道筋へ、人民も守護の軍兵も足を恃て、今や日本勢寄せ來ると、荷物を除け、都遣戸を放取り、只上を下へぞ返しける。淺ましや去る壬辰の年三月より、去年申の三日迄出入、五年の間の大亂にて、餓學野に充滿ち、民屋火災に燒盡されしに、偶、和議相調ひ、去年夏初より、在々の舊宅へ還住し、妻子以下も少しく心を安んせしに、又、此亂出來しかば、こはそも如何なる因果ぞやと、歎き悲しまぬ者はなし。

日本諸軍勢朝鮮渡海

日本勢、清正・行長を先として、三番備黒田・甲斐守長政を始めて、總大將金吾中納言

日本軍朝
鮮に入る

日本諸軍勢朝鮮渡海

完

秀秋に至る迄、段々に一勢々々相續き、兵船數十艘にて、順風に帆を揚げ、引きも切らず渡海し、合せて十三萬騎、五路を分つて朝鮮に入る。東萊・機張・西生浦・豆毛浦・安骨・竹島・梁山・蔚山・加徳等は、皆日本人の居城となつて、熊川・金海・昌原・咸安・晉州・固城・泗川・昆陽も日本人自由に横行すれば、大明朝鮮の者は、此間を通る事叶はず、土民も亦安堵せずありしを、日本人相觸れ、盡く還住させ、耕作・商賣を快くせり。いつ迄も朝鮮に在住せんと思ふにや、地を取る事を速にして、財寶を掠め取らず、肝要の要害に寄る事を專一にして、人民を殺す事を欲せず、其志少にあらず、目中既に朝鮮を蔑如す。若し此時日本の勢、前の如く攻入らば、大明の加勢は未だ來らず、朝鮮の軍兵は退散する時なれば、全羅道・慶尙道には、拒の兵一人もなし。朝鮮王城に押入らんに、何の手間も入るまじ。さあらば少々残りたる大明の兵も引退くべし。然れば朝鮮の王城を居城とし、大明へ働かんに、遼陽震動して、登萊浙直も危急なるべきに、日本人も太閤は渡海し給はず、人数は不足なり。吾居城を取固めたる計りにて、敵を謀る手段のなきを、大明は幸に天運強きに依りて、日本人

大明朝鮮
天運悦ぶ

朝鮮兵亂
に疲弊す

寄せ來らずと悦び、朝鮮人も天未だ吾國を亡ぼさずと是を頼む。日本人は軍勢渡海すれども、此頃海上痛く荒れつゝ、兵糧船も來らず、先年朝鮮初入の時は、久しく兵亂に遭はざるにより、國々富貴にして、行先に兵糧澤山なりしが、今は近年の兵亂に國疲れて、城を取り館を破ると雖も、糧米少しもなく、土民は残らず山崖に逃隠れぬ。在々村々は兵火に焼かれ、土地空虚にして、野には青草なく、家には積む薪なし。何方も赤土のみにて、巷に白骨充滿ちたり。日本勢も腰兵糧のみにて働けば、長陣を張り軍をなすべき様なし。千里一望に人烟絶えぬれば、田地あつても耕す人なく、食物の類は一粒もなく、米穀魚鳥によらず、商賣する人さへなし。偶々あつても凡人の口に入るべき價ならねば、三月より渡海して、五六月に至る迄、鷺島の形を隠す如くに、居城の外十里二十里を領する計りにて出でやらず。朝鮮斥候の兵出でて、薪取る者を殺し、往來の離者を殺すと雖も、日本人は構はずして、朝鮮王の子弟を渡海して、禮を調べざる事を咎むといひ、又は重ねて大軍の渡海を待つとの擬勢なり。此時、陳雲鳴は、日本人の内通を聞いて、遼將に向つて潜に云く、清正

兵糧一年分の支度あらば、兵を分つて進むべしと待つ。行長は兵糧船の續き來ぬを見て、竹島の大将と議して、七八月五穀熟する時、刈田をして、働く可しと約束をせりといふ事を聞きて、大明人も心を休め、要害を固め勢を乞ひ、日本人の張防を備へ、逃れ散る軍勢共立歸つて、己が城々を固めけり。

大明石司馬將軍囚獄に入れらる

大明の朝廷、公卿僉議あつて、今度、日本人再び大軍を働き來る事は、石司馬が雅意に任せ、封號の事を調ふ次第分明ならざるに依つて、朝儀を汚すのみならず、又大明・朝鮮の軍兵を働く事、曲事の至なれば、司馬石星を重典に置かるべしと、口々と申しけり。司馬之を聞きて、沈惟敬を責めければ、惟敬が辭亂れて、様々に陳じ、日本人の來る事は、朝鮮の無禮なるを責むる計りなり。大明の御下知を背くにあらすと答へけり。徐成楚、之を折くちいて曰く、師を起す事十數萬、海に浮ぶ事數千里、獨の王子陪臣の來らざる、豈失禮の故のみならんや。謂はれざる長僉議して、手延に

大明石司馬の處刑を議す

徐成楚の意見

石星の上疏

石星の罪料定まる

せんよりは、速に其不意に乘じ、間者を入れて虚を襲ひ、忍を用ひ、兵糧を焼かんに如かずと申しけり。孫總督と巡撫の李化龍が徒は、皆老成の舊臣にて、日本へ渡りたる冊使の朝鮮に歸る時、其心を計つて司馬に勸めて、豫め堤防をなさしむ。司馬猶も心に懸けず、惟敬が遊説を聞きて、再び和議を調へんと、寺澤志摩守をして、親しく關白に報せしめ、朝鮮の陪臣を、日本へ一禮の爲め遣はし謝せんとす。されども朝鮮の帝王、能く倭情を知り、肯んじ給はざる故に、二月十八日に石星いかんともする事なくして、疏を以て請うて云く、司馬の官職を削り去つて、自贊書と同じく司官一二人を召連れ、便宜を伺つて朝鮮に行き、兩國をして會盟し、兵を退け無事を調ふべし。若し終に成る事なくば、大兵を動かして自ら進まん。今臣星を治るに、付託驗あらざるの罪を以て、身を獄中に極めんよりは、命を戰場に隕さんに孰歟と、頻に訴へ奏聞しける。趙相公は此儀尤なりと同じ、石星を往かしめんとす。兵部王瓊が哈密を經略し、楊轉が薊遼宜大を經略する事を引きて、石星が罪赦すべからずと決定す。萬事を止めて、今先づ兵四五萬を出し、朝鮮を救はずばなるまじ

大明石司馬將軍囚獄に入れらる

とて催せども、連年兵を用ひて、萬人疲れ苦しめば、召に應ずる者なし。朝鮮よりは日々に使を越し、先づ南兵三千か四千給はるべし。要害に差配して防をせんとす。時に劉綎が兵も泗州より歸り、天津・登萊の成の兵も罷められて歸る。其上平壤にて手柄を顯せし兵共、右に李如松と約束し、一番鎗又は一番登する者には、銀萬兩を給はんといへり。平壤にて南兵先登せしに、其以後石門寨に群集して、右約束の通り、褒美の賞を乞ふ。總兵の王保と南兵と喧嘩を仕出し、千三百人固まり、軍門に押寄せて騒動す。王保之を謀り、盡く之を殺す。之に依りて人の心恨み怒り、催促に隨はず。朝廷別に謀を出すべき術なし。皆曰く、石星を誅し、國典を顯はさんと、群議一同し、其歳の春、司馬石星を牢へ入れ、獄に下しけり。哀なりける事共なり。石司馬終に其翌年戊戌の夏、獄中にて死にけり。彼人久しく大臣の位に居て、和議を主り、一朝一夕も國の爲めにせずといふ事なし。されども、偏に己が目金を第一とし、沈惟敬といふ賤奴が言を用ひ、三國和議の大儀を彼者に任せ、又、山東の楊文、船手より兵船を出し、朝鮮の境に於て、忠功を彰せしかば、朝鮮王より、之を

石星獄死

大明へ奏聞し給へども、石司馬之を功とせずして、却て楊文が任を罷め、知行を取上ぐる。又、參將の高可學標下の有官陳定等、日本人六十餘人討取り、高名を持來れども、石星褒美せず、頓て高下學を罪科に行ひけり。斯様の偏見最員強き事のみ積りしかば、諸人恨をなして、終に牢下になり、獄死せりとぞ聞えし。

大明國禁中に於て軍評定

司馬石星は牢舎に仰付けられぬ。朝廷の大臣竝に總督經理參内して、朝鮮へ加勢を遣す軍の談合あり。又日本人、六年以來朝鮮に在陣すれば、案内を知りて、直に登萊か旅順かに来るべきか、北直隸天津の衛より山海關迄、陸路は百里なれども、海手よりは、旅順と相對して尺三十里なり。順風には頃刻の間に到るべし。登萊は海口に近くして、中國の襟帶たり。南は淮安に到り、三十里の間の船路なり。又、山東・江北の藩籬なり。此兩所に巡撫を置くべしと謀つて、固干徳をして船師を領して、旅順に留まり、李承隕に戍卒を増して、登萊を守らしむ。其上に孫經略が議定

明の軍備

にて、水兵三千人を統領して、旅順の口に止りて、天津を保守し、浙兵の遊撃三千人を以て、鴨綠江に止まり、海防をなさしむ。又張汝蘊が議定として、旅順より天津に到る迄、大軍の著岸すべき處二箇所あり。一には大沾といひ、二には起口といふ。二所相去る事百五十餘里、此兩所の兵を以て守り、若し敵襲ひ來らば、各鎮の兵を調へて、力を合せ守るべしと、先づ日本勢の大明へ入らぬ手段を本にせり。内閣張洪陽が云く、開城平壤の二所に於て、開府を置き、兵を練り、田を屯し、西の方鴨綠旅順の軍勢に接し、互に援け合ふべし。東の方は、王城、烏嶺の防の爲めに、援兵となつて奮發し、軍威を張り、勢便よくば、輕兵を選んで利に赴き、勝負を決すべし。便よからざる時は、虎路の敵の邪心を挫くべし。王城より釜山迄、一千二百六十里餘、王城より鴨綠江迄、一千二百里計りなり。然れば開城府は、朝鮮の真中なり。是に屯して、進む事あつて退く心なきを專とせん。日本人も軍を止めて、軍の兵糧を儲け、久しく屯する手段を成さば、吾大明も亦、兵糧を運び、久住の策を成し、朝鮮人に教ふるに大明の軍法を以てし、其怠氣を變じ、勇み進む様に叱り勵まし、農を

明の軍計

力め、商賣を通じ、工を專にし、樹畜の源を廣め、山澤の利を開き、錢を鑄、粟を輸して軍用を定め、開城府平壤を治め定めて、是より次第に慶尙、忠清、黄海等の三道を取復し、人馬を選び、先の所を本城として懸引すべし。速に勝つ事を求めず、務めて久留の計をなし、烏嶺より南は、敵の居所なれば、猥に深入して威を損すべからず。烏嶺より北は、味方の地なれば、堅く守つて、尺寸も失はざる様に爲すべし。凡そ事必ず先づ久計を成して、偶、倉卒に逢ふ時は、避くるに手段あり。苟も先づ暫く計を成して、思ふ如くにあらざれば、終を保つこと成り難し。一旦利を失ふといふとも、氣を屈すべからずと、進退の變化を、委細に朝鮮の諸大將にぞ教へける。其年三月に、經略の孫鏞も又任を罷められ、天子の詔勅にて、侍郎邢玠に命じて、經略の官となし、楊鎬を經理とし、巡撫使麻貴竝に劉綎を南北大師とし、湖東、浙江、四川、廣東の軍兵を催して、朝鮮へ加勢とし遣す。邢玠は山東青州人なり。謹重にして識略あり。萬曆廿五年四月廿二日に、蜜雲に到りて孫鏞に替り、命を受け、經略になる時、麻貴謀を上りて曰く、宜大の兵の到るを待つて、日本人の未だ備へざる

計 邢玠の謀

隙に乗じて、釜山浦城を取るべし。釜山浦城容易に取りなば、行長は擒とならん。然らば清正は、必ず走らん。一大事の儀、此一舉に定まるべしと、頻に諫めけるに、邢玠、思慮深き人なれば、兵道は先づ計を定めて、而して後に戦ふべし。今計畫未だ定まらずして、遽て、險阻の地へ行かば、是自ら敗軍を取る者なり。一度敗北せば、敵機に乗じて長驅すべし。然れば吾軍勢、氣勞れて、再び勢を奮ひ難し。吾分別するに、先づ楊元・吳惟忠に組を遣はし、兩將を全羅道の南原と、慶尙道の大丘・慶州とに屯せしめ、麻貴は王城に居て、兩方の懸引をすべし。但し楊元、此頃の註進に、南原城郭崩れ破損し、殊に櫓もなし。又、金銀も兵糧も半月の蓄もなし。慶尙一道は、又、半分日本人に取られ、吳惟忠、孤軍にて慶州に入り難し、今、只楊元を遣はして、兵糧を運び入れさせ、朝鮮王に相談して、塹・矢倉の普請し、南原を丈夫に持つ様にするべし。吳惟忠は、暫く忠州に行きて、日本人の後を取切り、後門を挫き、七月に、大明の大軍の入らんを待つて、手段を運らして、勝つべしと下知して、邢玠は未だ山海關を出でず。麻貴は朝鮮の都に赴きて、楊元・吳惟忠と面談し、又朝鮮帝王に

諮りて、國中の諸臣を集め、兵を練り、堅く地方を守つて、要害の地を取り固め給へと諫む。朝鮮帝王も麻貴が申すに隨つて、明帝の勅命を請けつゝ、自ら新總督の官になつて、將官等を手分けして、慶尙道左兵使の成允門・防禦使の權應珠等を慶州へ遣して、烏嶺に陣取りたる加藤清正・黒田長政・淺野幸長等を防がしむ。右兵使の金應瑞をば、宜寧に陣取らせて、釜山城にある小早川中納言秀秋を防がしむ。統制使の元均をば、船手なれば兵船を集めつゝ、竹島・加徳に控へたる久留米秀包・高橋主膳・筑紫上野介に指向く。大明勢も朝鮮人も、各、勵み勤めて、大明より大軍の來るを待つ。此時大明にて、又評議して云く、朝鮮、數年亡國となつて、國中に防ぎ守る軍勢なし。日本人若し襲ひ入れば、朝鮮亡ぶべし。朝鮮亡べば、大明も亦、兵を出すに費えて必ず亡ぶべし。如かず大明の司道官となし、入道を分理し、各、城々を守り、堅く山城に依つて兵を進め、敵を討たんと云ふ。此事朝鮮國王に達しければ、君臣共に大明へ、先づ吾國を取られん事を危ぶみつゝ、疏を以て大明へ報じて云く、朝鮮昔より三つの都あり。漢城・開城・平壤之なり。三都共に、數年敵に取られ、數

朝鮮帝王
を以て
哀
明
疏
に
す

千里の間盡く煨燼となる。今朝鮮王、漢城府に居住すれども、荆棘未だ除かず、陪臣皆、墻壁に依つて餘命を次ぎ、升斗を食とす。民百姓山林より還住する者、百に二三ならず。手負疵を蒙る者、這々の體にてよろほひ出づれば、働くべき様なし。若し大明の官人來つて、八道を分理せられれば、其糧米を出すべき様もなしと、歎き訴ふる故に、大明も尤として、此儀は止められけり。四月より六月迄、日本人も面々に城普請を仕て働かず、大明軍兵は未だ來らず。朝鮮人は、此間に人馬を抱ふ用意するとして、各、險安の地へ引籠りて、互に使者の往來も無し。只沈惟敬計りは、日本の城々へ往來す。是に依て、宜寧の一筋は日本人と相交はり、混亂して一家の味方の如し。大明の諸大臣よりは、日々に沈惟敬が方へ使を立て、何とて日本國王の封號を乞ひながら、是の如く兵革を動かすや、早々兵を撤して、日本へ歸る様にせよと責め懲らす。關白秀吉よりは、前の約束の如く、速に朝鮮の三道を割きて與へよと頻に使立てければ、朝鮮、日本に攻められ、兩方の意趣天地間隔なれば、如何せんと迷惑す。始め惟敬、只封號を乞うて、後の利害を顧みず、當座やかないに事を濟ま

沈惟敬の苦惱

せば、今、日本より三道を乞ふ。全羅道は土地肥饒にして、朝鮮の府藏なり。慶尙道は門戸なり。忠清道其間にあつて道筋なり。慶尙道なき時は、全羅なくなり、全羅なくならば、他の道ありといふとも、根本の策をする事成らず、海道筋に依つて誤をいへば、敵全羅に依つて陣せば、遠くしては西海一帶、近くして沈馬、濟川は皆敵の窟穴となつて、日本の兵船海上に縦横せば、至らぬ所もなく、順風には一日二日の内に鴨綠に到るべし。然らば開城府平壤を持固むといふとも、何の益かあらん。獨り朝鮮のみに非ず、日本人海路より入つて、大明を犯す事も、全羅・慶尙より働く事、手向よければ、日本より朝鮮に入るには、南風なり。朝鮮より大明の遼東へ進むには、西風に追手よろし。日本人の海路より入つて、大明を攻めざるは、朝鮮の慶尙・全羅二道の、日本人へ取らざるによれり。此二道倭に取られなば、陸地より遼東を犯さず、船にて直に山海關に入り、之より日本人手分して、四方へ廻り、大明の四鎮を亂さば、東陽・沼海は、容易取らるべし。必ず關白に三道を分與すべからずと、僉議を極め、沈惟敬兩方の間を往來して、謀略をなし、己が罪を遁れん爲に、様々に

沈惟敬の謀略

辭を飾り言ひ延ばす。始めは關白、日本の王になりたしと申候間、封號を遣され候へとて、大明をたらし、日本へは大明より降参し、關白を吾大明皇帝の塔にして、和談を乞ふとて偽をいひ、今は慶尙・全羅忠清三道を以て、日本へ渡すべからずといひて、日本勢の腹を立て、彌、軍兵を進むる様に手段をなす。兎角大明の爲め悪しく、日本の善き様にして謀りける。五月に遊撃の茅國器、人數を連れ、初て王城に來り、惟敬に逢つて、日本勢の多少を問ふ。惟敬狼に答へて云く、多を要すれば就いて多し、只軍兵を退けて、鴨綠江を守る事、上策たるべしとぞ威しける。されども茅國器良將なれば、少しも誘はれず、只あざ笑ひてぞ居たりける。沈惟敬は、日本と大明と兩方より、日々催促の使立ちければ、三道を日本へ渡す事もならず、日本人を引取らす事もならず、只罔然として、呆れ果て、ぞ居たりける。

沈惟敬謀翰を加藤清正に遣す

朝鮮在陣の諸將清正行長・義弘・長政等集まり、柳川豊前守調信を日本へ遣し、大明

惟敬朝鮮
人を欺く

加勢數萬騎、已に朝鮮に入る由承り候。何時此方より、相働き申すべく候やと申上ぐる。柳川が日本に歸るを朝鮮人聞きて、沈惟敬に問ふ。惟敬僞つて云く、柳川調信が日本へ歸るは、軍勢を撤せん爲めに遣すといひて、朝鮮人・大明人を騙す。さる程に、柳川は六月七日に伏見城に著き、此段申上げければ、將軍聞召され、仰下されけるは、朝鮮の奴原、吾所望に隨はざれば、全羅・忠清二道の無事にある故なり。諸軍勢打汰へ、八月朔日打立ち、直に全羅へ打入つて、刈田働して兵糧を調へ、道筋の城々を攻落し、進んで濟州を攻取るべし。若し味方草臥る時は、人數を慶尙へ引還し、固城より打廻り、西生浦へ打入らば、所々の城々に人數を澤山に入置き、或は十日餘、或は五六日程、馬の足を休め、不時に打つて出で、機に臨み變に應じ、城々を攻取り、上下心を一致にして、力を盡して戦ひ、手負死人ありとも顧みず、力を合せて戦功を立つべし。若し吾が下知に隨はずば、日本にある汝等が妻子を御成敗あるべしと、事細かに仰遣されけり。義弘・清正・長政・行長以下、諸大將此御下知に驚いて、又、柳川豊前守を日本へ遣し、御下知の旨一々承り奉り畢ぬ。去り乍ら、大明

沈惟敬謀翰を加藤清正に遣す

秀吉清正
行長等を
激勵す

の兵楊元陳愚衷等大勢にて、近日全羅道に到り候故、味方矢長に存候とも、合戦仕
り難く、如何候はんと申上ぐる。將軍大に怒り給ひ、文祿二年六月に大明の提督李
如松、二十萬騎にて開城府にありし時、清正が手勢計りにて、安南府を攻落し、又一
擧に晉州城を攻落したりき。今、大明の猛勢到るといふとも、何程の事かあるべき。
備前中納言は、宜寧晉州より全羅道に向ひ、安藝宰相は慶州より、蜜陽大丘を経て、
全羅道へ押し、兩方より立夾んで、大明勢を只一戦に踏躰すべし。何とて義弘清正
長政・行長は、いつの間に臆病者に成替り、大明人を恐れつゝ、弱き事を申上ぐるぞ。
早々歸つて、此旨を申し聞かすべしとなり。柳川調信、朝鮮に渡海し、此旨を申さ
んとて、六月十四日に早船に乗り著岸し、右の通り申渡し、かば、皆々相議して軍
評定す。來る七月に日本より、大軍一時に渡海すべし。備前中納言秀家、其外釜山
竹島等の兵は、宜寧晉州より、全羅に向ひ働くべし。毛利安藝宰相秀元並西生浦等
の所の兵、慶州より蜜陽大丘を廻つて、全羅に働くべしとて、軍支度専ら最中なり。
皆々兵を出さんとす。沈惟敬、此事を聞きて、如何せんと乗じ煩ふ處に、大明の諸

惟敬密書
を清正に
送る

清正の返
翰

大將より、此沙汰あるは如何なる仔細ぞと、日々に尋ぬる間、惟敬仔細を陳ぶるに
及ばず、爲方なくして、朝鮮の禪僧松雲大師、惟敬を倩ひつゝ、密帖の書を認めて、清
正に贈りける趣は、邢提督、大兵七十萬將至、勸公等速撤兵應歸于日本云々と。
此時、清正は西生浦にありしが、松雲大師が書を見て、返翰して曰く、雲大師曰、大
明兵沓至焉、是吾所願也。朝鮮弱兵而無向我之敵也。對大明之兵、快一戰則朝鮮
國不足云、大明北京燒却之、不可回踵。幸又幸也。唯恨明兵來之遲矣。吾得大師
之書而聚兵待明人之來。餘不具とぞ書きたりける。惟敬を始め、大明・朝鮮の兵
共、此清正が返事に驚いて、彌、心を安んせず、日々に大明へ加勢を乞ひ、城々を固
めんとす。惟敬、爲方盡き果て、僧を使にして、清正が臣箕部金太夫に書を贈り、彼
に付て和議を乞ひ、様々誑さんとす。金太夫曾て同心せず。大明人寄せ來らば、一
戦に打破り、直に大明へ攻入るべしとの返事、清正と同じ心なれば、惟敬も進退極
つてぞ見えたりける。

沈惟敬謀翰を加藤清正に遺す

遊撃沈惟敬召捕はる

那玠沈惟敬を捕へんとす

日本人は、三道を割いて渡し與へよと求め、大明人は、日本の兵を撤して歸る様にせよと、兩方より惟敬を責めければ、謀窮し術盡きて、返答にも及ばず。其上司馬石星召捕へられて、獄に入りしかば、惟敬身を怪しみつゝ、日本人に與みして、一命を續けんと思へども、其理由なし。邢總督、素より惟敬が、君を欺き國を辱しめ、石司馬を賣物にしたる事を心に啣みて、任を受け總督の官となりし日より、彼奴目を生取らんと志しけり。俄に取り騒げば、惟敬めが日本城へ逃入つて、大明の虚實を知らすべし。然らば大功なり難しと了簡し、先づ二つの檄文を作つて、惟敬が心を安んじ、又日本人と緩する計をなせり。之に依りて、沈惟敬曾て邢總督を疑はず、其内に家財・雜具を南原へ運び入れ、透間あらば、釜山浦の金吾中納言秀秋の城へ走らんと工みけり。南原より釜山迄、七百里なれば、容易に入るべき様なし。五月中旬に總督、未だ關山海關なり大明の内大明の内を出ず。楊元に遼兵三千人添へて南原へ遣し、吳惟忠・麻貴にも

惟敬日本へ亡命せんと謀る

牒じ合せ、密帖を遣し、元均に與へ、伏兵を設け、遁出を遮らんと謀を運らし、かば、天を翔けんより外は、惟敬が逃るべき道なし。惟敬が平生養ひ置きし兵共二百餘人、何れも惟敬が命に替らんと、思ふ様に心を得しかば、自然、夜の間に遁れ出づる事もあるべしと了簡し。邢玠諸將に下知して、其勢を引分けんと謀り、二百人の勢を遣し、惟敬が古參の二百人と置替りけり。惟敬彌、安からず思ひ、吾が頼み切つたる婁國安と張龍とを釜山へ遣し、詎へて云く、邢總督、吾を殺さんとす。日本の諸將慈愛の心あらば、其城へ走り込み、命を助からんと申遣す。行長元來知音なれば、返事して曰く、能き時分を見合せ、兵を遣し、迎へ取るべしと約束す。惟敬大に悦び、人を大明又は朝鮮の京へ遣し、虚堂・無準等の墨蹟、玉潤・馬蘭・郭燕・東坡等が畫軸數十幅、硯屏・筆架・花瓶・文鎮・茶入・肩付等の珍奇の道具ども、高麗茶碗・虎豹の皮などを買調へ、竝に狐貂皮八百張を求め、日本の大將達への土産進物にせんとす。六月十八日に、柳川豊前守調信、其勢五百、兵船九艘に取乗り、惟敬を迎に出でつゝ、海邊に著き、使者を宜寧に遣し、惟敬を呼んで媾和せんとす。時に金應瑞が斥候の

兵共、是を見付け、柳川が使者を生捕り、書帖を奪ひ取り、惟敬が使者張龍、是を陸路より山道を忍び通り、宜寧に行き著きて、此旨をいふ。惟敬悦び騒いで、支度し出でて行く。金應瑞が斥候共の奪取りたる書帖を南原へ遣す。楊元之を聞きて、事急なり、手延にして取逃したりとて、鎧取つて肩に投懸け、馬を馳せて、南原より夜通しに駆付くる。宜寧のきは十里計りにて、惟敬が駄に狐貂を乗せて、先だつて行くに行逢ひたり。楊元天の與へと悦びつゝ、惟敬を真中に取籠めつゝ、日本人の心如何と問ふ。惟敬答へて云く、和談は最早成るべからず。楊元責めて云く、和議成る事を得ずば、何ぞ分明に其旨を本鎮に申さずや。不審千萬なりと叱り讓む。惟敬承り、吾明日慶州へ罷越し、人を遣し清正と媾和し、一箇月半にして歸らんといふ。辭は狂人の如くにて、顔色變りければ、楊元見るよりも、すはや逃れ去ると思ひつゝ、兼ねて本鎮に約束せし事なれば、官六人を著けて釣票を出し示し、是非に此方へ参らるべしと、兵共群り集まつて、惟敬が馬を圍んで、轡を執つて引戻し、楊元之を先立てつゝ、丹城の方へ歸り、此旨本鎮に申す間は、何方へも遣るまじと、警固を居る

惟敬捕へ
らる

惟敬誅せ
らる

て置きけり。沈惟敬召捕られて、日本の向導、大明の禍根拔きたりと、大明朝鮮共に悦ぶ事斜ならず。其年八月十四日に御史則、大明北京にて、惟敬が留主にある妻女陳澹如が家を按するに、日本の旗一面、長短の和刀、和劔共に三百三十六口、倭衣、倭器、細絹、犀帯、日本の圖等共に三百六十三種あり。今年丁酉秋より、沈惟敬は北京の牢に入り、獄に下り、三年目萬曆廿七年九月廿四日に、終に誅せられけり。妻の陳澹如は、法の如く上り物にして、官家の奴となる。沈惟敬心を兩端に取つて、日本へも肌を合せ、大明へも忠功を成し、朝鮮の事をも荷擔し、偽を以て彼方此方と中言し、三國を戦はせつゝ、年月を送る。其内其間にて身を育てんと巧みしが、平壤の勝軍は、彼案内して、李如松に利害を告げ知らせたる故なり。又朝鮮二王を還す事も遊撃が功なり。其間に日本勢を延びくゞにさせ、大明の兵の到る様にしたるも、彼が手柄なり。されども正使の李宗城を蔑如し、日本へ媚を求め、石司馬をたらし、大明の威を損じ、貴を減する事、其罪輕からず。之に依りて、邢總督等未だ關を出ですして之を捕へ、大明心腹の患を除けり。然るに蕭應官が分別にて、惟敬を

遊撃沈惟敬召捕はる

究

赦さんと奏聞す。是れ惟敬が利口に惑はされて、斯くの如し。明帝逆鱗まし、蕭應官罪を得て、終に邊軍にあてられ、身外國に跼る。去れば利口の邪家を覆す事を惡といひし聖人の教、今こそ思ひ知られたり。

日本人南原城攻落附楊元敗北

沈惟敬は召捕へられつゝ、是れ楊元が所業なりと、痛く恨みけれ共、身擒なれば、此返報を爲すべき様なし。其時俄に思ひ出し、婁國安を遣し、小西行長に申しけるは、南原城に楊元居ると雖も、さしての兵なし。兵を發して、襲ひ取らんにと易かるべし。南原城といふは、東に雲峯鳥嶺あり、南に三良大江あり、路直に金海・竹島に通ず。之れ全羅道の門戸にて、肝要の地なり。之に日本より、馬武者を置くべし。閑山島は朝鮮の西海の水口に當る故に、朝鮮より元均、兵船を懸けて日本船の往來を阻てたり。是又南原の右障たり。邢總督が謀にて、楊元に遼兵三千を付けて、南原を固め、又、陳愚衷其勢二千を領して、全州に楯籠つて、南原若し變あらば、助合は

せんと控へたり。又、朝鮮の將金應瑞・李元翼が兵、雲峯の外にあり。權慄が兵閑山島の内にあり。閑山島は又元均が舟師を領して守をなし、各、南原を取らんと、互に應援をなす。此所に手當を置き、南原を攻取らば、餘の城々は、必ず攻めずして落つべし。只萬方を措いて南原を取らば、彈指の間に功を立つべき事、必定なりと告げ知らせければ、小西此日來南原を攻落して、太閤の御威に預らんと思ふ最中なれば、大に悦び、南原城を攻取らんと支度し、潛に諸大將に牒じ合す。今年七月初より、大雨連日止まず、晝夜洒流すが如し。之に依つて、宜府・大同の大明勢支へられて、中旬に漸く平壤に到る。麻貴も七月二日、碧蹄館迄出でたれども、長旅の大雨に支へられて、續く兵皆殿馳になつて、追ひくに来る。此時、舟師に使あつて、歩武者は一步も進み難し。之を見て、朝鮮水營の將官元均、閑山島にありしが、潛に謀つて兵を遣し、大明勢に約を定め、參會して、釜山城を忍び取らんと工む所に、宜寧を固めたる朝鮮の金應瑞、如何思ひけん、元均等が支度並に釜山へ寄る日限を、行長に告げ知らせたり。小西は南原を攻めんに、元均、權慄が舟師を以て、後より襲はん

かと思案する折節なれば、聞くや等しく、得たり賢しと悦んで、七月廿一日の未明に、大村新八郎豊茂竝に舟手の勢を遣し、逆寄にしたりける。元均は、之をば夢にも知らずして、明日は釜山浦へ寄すべしと支度して、油斷したる所なれば、弓鐵炮を取合せ、少々防ぎ戦ふ所を、行長眞先へ船を乗込み、弓鐵炮にて打痿め、打鎗網切にて、打懸けく引寄せつゝ、吾先にと乗移り、舳艫に廻りて攻めければ、元均戦ひかね、船百艘計乗取られ、辛き命助かつて、眞一文字に押切つてぞ逃延びける。豊茂竝に船手の衆、追々に乗付けく、逃ぐる船を五十餘艘乗取り、首數多討取り、其勢に閑山島の浦へ打上り、浦々の在家を放火して、即ち島を乗取りける。閑山手に入れば、日本船手の勢ども、自由に往還し、舟師の便最もよし。此勢に押入れとて、船手口本勢は、二三日中光陽豆恥津に亂れ入つて、後陣の味方を待つ。此所南京城を去る事甚だ近く、之に機を得て、七月廿八日より、先手を繰出し、全羅慶尙忠清の三道を押廻らんと支度し、先を競ひて進みけり。一方には小西行長を先手として、島津義弘加藤左馬助・峰須賀阿波守・長曾我部土佐守・生駒讚岐守を加へて五萬餘騎、宇

行長閑山
島を攻む日本勢南
原城を攻む

喜多中納言秀家を大將とし、慶尙を右に見て、雲峯へ働き、南原を攻めんと押入りける。一手は加藤清正を先手として、八月朔日より、段々に押出す。讀いて黒田甲斐守長政・左京大夫義長・毛利壹岐守・高橋九郎・秋月三郎・相良宮内少輔茂守・鍋島父子・伊達民部等、此外中國九國の勢を交へて五萬餘騎、慶州より押出し、密陽大丘を経て、全義館へ打つて出で、王城より大明勢出では、合戦を遂げんと、忠清道残らず打つて廻る。一手は小早川中納言秀秋が家老山口玄蕃允・伊藤雅樂頭・南部無右衛門等の六組、以上八千餘騎にて、密陽より玄風へ働き、一洞筋より忠清道に入らんと擬す。朝鮮の權慄李元翼等數萬騎にて、雲峯近邊に充満ちて陣取りたれども、中々遮止る事は扱置き、東の方へ雪類崩れ、吾先にと落ちてけり。日本勢勝に乗つて、口々に人數重り、雲峯・烏嶺近邊は、敵ならずといふ所なし。楊元驚いて、八月十日に財物二箱を持たせ、平壤へ除きけり。南原平壤を去る事一千餘里なり。小西宇喜多等、彌氣を得て、手分を定め、兼ねてより、全州より陳愚衷、後詰をする約束を沈惟敬が告げ知らせたれば、諸大將鬪取にして、全州の手當に置くべしと定め、島

南原城合戦

津義弘・加藤左馬助手當の鬪に取當り、兩勢一手になり、一萬五千餘、全州さして押出し、陳愚衷を押へられたれば、愚衷頭を出すべき様なく、義弘・左馬助が武勇に恐れつゝ、城門を固めて、却て用心す。同十二日に、小西・宇喜多・蜂須賀・生駒・藤堂・長曾我部、其外の勢四萬餘騎、南原城へひたゝと押寄せ、山下を放火し、四方を稻麻竹葦の如く打圍みたり。城中には楊元竝に朝鮮全羅道の兵馬使李福男、都合六千餘騎楯籠りたれば、鐵炮・半弓を以て、射立て打立て、爰を先途と防戦ふ故、竹束持盾も怖へずして、寄手少しく引退きけれども、大軍なれば入替へゝ、手負死人を事もせず、日本の名を惜しみつゝ、身命を捨て、乗越えゝ攻め近付き、四方に手を合せ、鳥も翔らす様に、十里廿里に打圍み、雲梯を作り、城へ懸梯を懸け、押入らんとす。又堀をば、埋草を以て晝夜埋め、堀の外に柵を三重ふりて、城より突て出でざる様に拵へ、四日の間息をも續がず攻め寄せける。城中も汗水になつて、防ぐ事怠なき間、秀家郎等明石掃部・花房助兵衛・蜂須賀内稻田・中村・森・進藤・藤堂が内藤堂新七・山岡兵部丞など申しけるは、當城の爲體が、攻むるに早速成り難く、熟と考へ候

に、先づ攻口を少しく甘られ、攻むる事を休み候はゞ、然るべく候。其仔細は、此中四日、晝夜怠なく攻め候間、内外同前の鬪とは申しながら、城中よりは、何方よりか攻入りなんと。安き心なし。寄手は是に違ひつゝ、荒手を入替へゝ、心任せに攻むるなれば、其勞るゝ所は格別たるべし。然るに今攻むる事を止め、虎口を遁れて遠く陣取らば、此間の草臥休めんとて、城中必ず油斷すべし。其變機を失はず、急に攻入候はゞ、勝利を得ん事、手の内なり。近而示之遠といふ、孫子が手段にて候と諫めければ、秀家を始め諸大將、等しく軍の事は、功者に任せ置かれ然るべし。兎も角も彼者共次第と感心し、十五日の夜半より、寄手鐵炮をも打たず、攻口を少しく明けゝる。案の如く、城中も此間の窮屈を休めんとて、大將も士卒も鎧を解き、甲を脱ぎ、弓鏑を枕とし、前後も知らず伏したりける。此四日が間、夜晝の軍に身心を勞したるを、俄にくつろぎ休みける程に、後先も辨まへず、高放たかひびき射かき寝入りたる所へ、十六日の早天に、小西行長手勢計りにて、南門を打破り、城へ押入り、相圖の貝を吹立つれば、宇喜多・蜂須賀・長曾我部・生駒・藤堂之を聞き、すはや相圖の貝が立

南原城陷

楊元逃走

つは、関の聲を合せよとて、追手搦手四萬餘騎、聲々に関を合せ、喚き叫ぶ其聲、天地を響かして、如何なる須彌の八萬由旬なりとも、崩れぬべくぞ覺えける。寄手吾劣らじと、面々の攻口より、打破つて乗入る。大將楊元は、帳中に伏しながら是を聞き、驚き騒ぎ起つて、衣裳を著るに及ばず、赤裸にて跣になり、逃げ去りけり。傳報官の寧國胤、這々靴帶をきて追付きけり。其外家子十八人、西門より逃出し、共に離れぬになつて、主の行方も知らず。遼東より來る兵共三千百十七人、城を逃出でて、三日目に思肆館に到るに、生殘る者僅百七十人なり。朝鮮の兵馬節度使李福男は踏み止まり、吾朝鮮の臣として、苟くも武官に列り、節度使の名を汚せり。爰を引くに於ては、何の面目あつて再び主君に謁せんやと、一思切つて劍を抜いて、眞裸にて踊り出で、四方八面に渡し合ひ、防ぎ戰ふ事何に喩へん方なし。然れども大軍、四方より攻入りければ、李福男、節石の如くなりと雖ども、其身金鐵ならざれば、數ヶ所の疵を蒙りしかば、士卒、郎等共に城中にて討たれけり。其外の兵共は、一人も取合はず、赤裸にて皆関の中より逃出づるを、追付け、斬伏せしかば、助かる

者はなし。小西宇喜多、其外大將達何れも手を碎き、首數三千餘、生捕少々相添へ、釜山浦へ註進す。金吾中納言秀秋之を早船に乗せ、日本へ申上げられけり。小西宇喜多其一組の人々、之より全州へ働かんと、任實を指して押出さんとす。遼東の兵は、元來南兵より勇悍にして、馬上の達者なれども、日本人と戰ふに毎度遼東の兵は利を失へり。最初に祖承訓、小西と平壤にて一戰し、盡く討たれ、今度又楊元、遼兵三千餘騎にて南原を守り、即時に攻落されたり。南兵は之に替り、日本人と毎度鬪ふに利を得たり。其故いかんと云ふに、遼兵は日本人に馴れず、常に見侮り、南兵は日本人に馴れて、能く軍の手段を知り、大事に懸けて利を見ざれば、猥に日本人も南兵をば恐れけり。扱も楊元、名城に籠りながら、一旦攻落され敗軍せしは、智略の足らざる故なりと、諸軍一同に難じ、沈惟敬が報なりとぞ笑ひける。南原攻落しつゝ、行長が威名、大明・朝鮮に充滿ちたり。王城近邊の貴賤男女は、こは如何せんぞ騒ぎける。

陳愚衷全州逃去る

邢總督兼ねて南原を攻められんかと了簡し、右より案内者なれば、陳愚衷を大將にて、強兵數千相附け、全州を守らせ、麻貴に二萬餘附けて、公州を固めさせ、南原城急あれば、救はん爲の手段なり。南原と全州の間、百餘里なれば、一日にも押來るべし。陳愚衷全州に入る時に、城中に兵糧なし。二千人の勢を養ふ事成り難しと、城番の者申しけり。陳愚衷、熟と地勢を考みて、十里の外の山中に、米大豆竝に甲冑弓箭鐵炮丸藥に至る迄、朝鮮人の隠し置く所ありと推量し、出して運び取つて、城に入れんとす。留守居城番の者、之を迷惑し申しけるは、朝鮮より今大明の御加勢を請くると雖も、又大明の軍勢に攻められ、害せらるゝ者の多き事、日本人に殺さるゝと増減なし。十里の外の山里に隠し置く兵糧雜具、時に當つて入るべき程には運び取るべし。若し皆々取寄せ置きて、日本人急に來る時、城を明除きなば、盡く日本人に取らるべし。然れば朝鮮の人民、一日も安んじ難しと嘆けども、愚衷此心を

陳愚衷兵糧を掠む

楊元愚衷に援兵を乞ふ

悟らず、夜を日に續いで、山中の兵糧雜具を一つも残らず運び入れ、兵を分つて籠城の用意せり。然る處に、南原城急に取詰められしかば、楊元方より、櫛の齒を引く如く、後卷せよと告來る。陳愚衷此時領する所の兵三千人、朝鮮の兵を加へ、士卒を勵まし、枚を啣んで早く發り、南原城中に約し、火の手舉げ、楊元又城より突いて出でば、寄手の日本勢を追拂ふべし。若し敵強くして退かずとも、後詰の勢出張ると見ば、南原城を急に攻むる事なるまじ、南原にも少しの兵ありと見ば、心を堅くし、拒ぎ守るべしと、愚衷議定しける處に、島津義弘、加藤左馬助兩人二萬五千にて、後詰の手當に向ひけるを見て、愚衷畏懦して進み得ず、却つて申しけるは、今南原に向ふ事、彼を願ひ之を失するの喻に同じ、又此城も程近ければ、卒爾に兵を出し難しといつて、少しも人數を出し遣さず。其内南原攻落つれば、全州の百姓共驚き震ひ、何方へも逃隠れんと騒ぎ旬る。愚衷が兵共之を靜むれども、制止を用ひず、百姓共却つて敵となつて攻戦ふ。近邊の百姓一つに固まり、城の兵糧藏を燒立て、夜に入つて城門を打破り、拔出でたり。愚衷爲ん方なく、兎や角やといふ内に、二十

愚衷全州
を捨つ

日の寅の刻に告げ来るは、日本勢早や任實迄押來るといへり。任實此處を去る事二十里なれば、陳愚衷周章ふためき、取る物も取敢ず、城を捨て、逃落ちけり。大將斯くの如くなる上は、士卒百姓町人等、資財雜具を持出し、妻子を先立て吾先々々と争ひ逃げしかば、日本勢一矢も射ず、全州を取り、兵糧弓鐵炮收取つて、爰に少時足を休め陣取りける。麻貴は南原城取詰めらるゝと聞きて、急に牛伯英を遣し、愚衷を催促し、後詰をなさしめんとす。然るに陳愚衷、城を捨て駈落すれば、牛伯英手を失ひ、少時公州に止りて、勢を張り、後陣を待つ。此時宇喜多・小西等、公州を攻取り、王城へ入らば、勢竹を破るが如くなるべきを、南原全州を容易く攻落したるを一面目にして、順天へ打入りけり。毛利宰相廻されし南の一手は、慶州より忠清・全羅を押廻さんと、全義館を指して進みける。公州は王城へ近し、其上公州の北に江道あり、王城にも漢江あり。麻貴急に日本勢攻來らば、公州近邊の勢を引取る事なるまじと思ひ、朝鮮の兵に言遣し、船を進めて浮船を連ね懸けて、往還の便にせんとす。朝鮮人は大亂に疲れて、四五日過ぎて、小船三十艘漸々出せり。麻貴大

いに怒つて、兵曹官を呼んで、大船を何とて出ださるやと叱り問る。兵曹官答へて曰く、朝鮮の糧米、全羅道より出す。然るに今全羅道、日本人に攻め破られ、兵糧敵に取られぬれば、運び送るべき様なし。此上は船をも、思ひの儘には出し難しといふ。麻貴怒甚だしく、是非船を出すべしと、厳しく呵責を加ふれども、口にて肯ふ迄なり。前には大敵を受け、後には長江あり、進退窮まりてぞ見えし。忠州に入り、前後より敵を受ければ、難儀なるべしとて、吳惟忠を残し置き、烏嶺を守らせけり。されども小西以下の日本勢、全羅道へ赴きぬるは、爰は益なしとて引いて歸す。朝鮮王も南原全州二つの城、即時に落ちたるに驚き、急に都體察使李元翼を選んで、將官高參等を率ゐ、烏嶺より忠清道に出でて、日本勢の鋒先を遮り止めんとす。されども慶尙全羅二道は、日本勢自由に横行すれば、遮る事も叶はず。國王先づ邢總督・楊鎬と謀つて、王城の中、老若婦女の軍陣の用に立たざる者共を盡く出して、敵を避けて山中へ落し給ふ。此時提督未だ關を出でず、萬事楊鎬が下知に任す。楊鎬共平壤に安坐して進まず。九月朔日に、二城の落ちたるを聞きて、王城に來れども、

陳愚衷金
應瑞重刑
せらる

何の手段もなく、只南原・全州を落されし事は、二將の罪なりとて、楸を陳愚衷に傳へて、速に兵を出し、全州の辱を雪ぐ一戦をせよと、催促をすれども、陳愚衷兵を按じて敢て進まず。此由邢總督報すれば、即時に失律の罪を疏して、愚衷を重典に置き、又今度行長方へ謀を洩しぬる金應瑞をも、朝鮮王と相議して、官を削り庶人になして、法度を正せり。邢總督、又書を朝鮮王に遣し、之を責めて云く、倭寇今朝鮮を攻侵す事は、之れ大明の恥なり。故に天兵數十萬、朝鮮に暴露する事既に久し。然れども朝鮮の人民、軍をせんといふ心なく、怠り疲れ、國王を初め群臣も戈を枕とし、膽を嘗むる志なく、軍に心を入れず、主辱めらるゝ時は、臣死するの節なし。今度、南原を取られ、全州を失ふこと皆王の過、臣の油斷なりと責めければ、國王も大に驚き懼れ給ひ、八ヶ道の勢を催し、軍列を稽へ、大明の諸大將に付いて、朝鮮の將吏を勵し、平安・黃海・京畿・咸鏡四道の軍兵、萬餘人を以て、經理提督が下知に付き給ふ。漢江の諸灘を計つて、其渡口を防守して、京畿都體察使柳成龍を差遣し、江と堀一筋とを巡歴し、守禦の形勢を察せしめ、國王も亦自らいんげん囊鞬を服して、戎馬

朝鮮王陣
頭に立つ

の間を駈廻り、四方に出で、所々の守の勢に氣を付け、力を致しつゝ、諸軍の成敗を主どり給ふ。總督、經理と共に王城にましゝ、晝夜防戦の術をなし、大明の下知に隨はれけり。初は南原・忠州を以て、左右の翼とし、王城を以て家とし、堅く守るべしと定めしかども、南原取られぬれば、朝鮮の大事此時なり、慶尙道・全羅道に日本勢充滿したれば、王城の防の兵としては、公州にある計りなり。其上、王城へ船手の便よし。又西北より、直に鴨綠江への船路あれば、日本勢半分は陸路より攻入り、半分は海に進んで、北より入るれば、大明勢は真中に取籠められ、籠の中の鳥の如くなるべし。但し日本人、久しく朝鮮に住居すれば、此手段を知らざる事はあるべからず。大明の軍兵未だ集まらず、兵糧多からず。日本人は船手の便よくて、運送の船引きも切らず。然れば日本人も寄せ來ぬは、一には大明勢百萬騎來る由、觸聞かするに依つて、恐れて來らざるか、一には沈惟敬擒となつて、案内者のなき故か、一には朝鮮、數年大亂にて亡國となり、城に居民なく、道に一夜の宿を取るべき處なければ、夫にて攻入らざるかと、日本人の心は知らず、様々に推量をなせり。加

藤・小西の諸大將も、將軍の御下知にて、朝鮮には入りたれども、數年の大亂に國荒れ、人逃げて田を耕す百姓もなく、萬づの商賣人もなし。山林野際には、強盜充滿ちて、日本人通るとても、五十人六十人固まらでは通り難し。此故に日本、又釜山浦より奥高麗へ飛脚の往還するも、絆々の城より、次第送りにするに、小勢にて送り迎へする事ならず。飛脚一人通るとても、馬乗五十騎、三十騎、弓、鐵炮百挺、二百挺宛にて送るに、夜とも晝ともいはず、奥高麗にて事ある砌は、一夜の内にも、飛脚三人四人通るを送届けて歸れば、又飛脚通る間、送りに出よと匂り呼はり、催促し、夜も定かに眠り得ず。朝鮮寒國にて、霰交りの時雨し、常に風烈しきに夜も晝も此の如くなれば、中々片時も堪へ難く、鹽味噌の類は、大將とても目にも見得ず、鼻紙には四書・五經を始め、諸の文書、又は一切の佛經を亂暴に取つては涕をかみ、不淨を拭ふ位なれば、一日も居住せん心なく、況して兵を進むる擬勢もなし。されども徒に日を送れば、日本太閤より咎に逢ふにより、打廻りの爲めに出でたれども、前年の如く、王城を破らんと思ふ心なければ、只人數を損せざる様に、宿々の要害を堅くし

て、全羅道・慶尙道を打廻る計りなり。此内に大明・朝鮮の兵糧も運送し、所々の城共も修理し、朝鮮の君臣の兵の調餉を送るに次第あつて、少しく心を安んせり。

茅指揮平倭の十議を上る

總督邢玠、遼陽にあつて、毎日檄書を以て、浙江・川廣の各兵を催し、糧米・薪草に至る迄、船と陸にて運送す。浙江の指揮茅明時といふ大將、兵を領して遼陽に來り、平倭の十議を上つる。邢玠之を美し、多く其弟を用ふ。其謀に云く、一には諸夷に檄す。之は琉球・女眞等の諸の夷國へ廻文を遣し、便よくば、直に日本の浦々に到り、朝鮮に渡る日本勢を遮るべし。之れ夷を以て夷を攻むるなり。二には間牒を工む。之は行長と清正と兩雄、久しく朝鮮に居て威を争へば、間者を遣し、兩人の間を引放つべし。三には投順を招く。之は今日本の軍勢の内、半は是朝鮮人なり。日本人法度を嚴密にして、逃歸る事能はず。或は頭を剃りて、再び吾陣へ歸入らざる様に制せり。是等を招取る事第一なり。されども事の心を知るべき様なし。合戦に臨

む時に、此方の兵に竹の筒一枚宛付けさせて、軍陣に落すべし。上言に、吾が華人共、本國に歸らんと願ふ者は、縦ひ髪を剃り、形を改むるといふとも歸るべし。若し又罪ある者、當座の難を通れん爲に、倭陣へ逃入る者も、今歸りなば盡く免すべし。其中に日本人の内、將官又は士卒に至る迄も、首を取り來るか、譬ひ首を取る事ならずとも、一人にても殺し來る者は、恩賞・俸祿は例の如く行ふべし。此筒を日本人拾ひ得、疑いて彼輩に心を置くべし。朝鮮人之を見て、遁れ歸らば、彼は勢少く、吾は彼倭情の案内を知るなり。後に邢玠、此謀を用ひて利を得たり。四には軍威を壯にす。之は兵聚る時は強く、分るゝ時は弱し。今大明の兵を以て、朝鮮所々の要害に籠置き、之に依つて、日本人吾兵に恐れず、只要害の城には、朝鮮人を入れ置き、大明勢は一所に集り固まりて、戰に臨んで打て出で、大軍を見せて日本人の膽を冷すべし。後、此謀を用ひて、四方に分つ軍兵を一所に輯めて、三路に分けつゝ、島津・小西・加藤と三所に戰つて利を得たり。五には士庶に誨ふ。之は朝鮮、昔は高麗なり。三韓の内にて勇武の國たり。太平日久しきに依つて、民兵を知らず。され

ども人の心は、昔に變はるべからず、今、日本勢を攻落さん爲に、遙々來れる南兵、よく日本人に馴れて、軍能くせり。南兵を師匠として、朝鮮人に軍の仕様を訓へ、一人にして十人に教へ、又百人に訓へば、一年の間に朝鮮の兵も、南兵の如くなるべし。然れば何ぞ關白を恐れんや。後に此法を用ひ訓練により、朝鮮も能く軍をせり。六には屯練を更ふ。之は大明、朝鮮の維兵共、今日は調兵となつて、武器を帶び、明日は兵糧を運ぶ人夫となれり。之に依つて、人疲れて働き得ず。只屯練の法を行ひて、年代りに仕るべし。今年屯し、耕作し兵糧を運ぶ者は、明年は練兵とし、今年練つて兵となる者は、明年又屯をなさしむべし。格番に用ひたらば、人休息して兵強く、兵糧は澤山なるべしといへり。七には倭情を計る。之は日本人の心を能く知るべし。孫子にも、彼を知り己を知るが、兵法の肝要なり。今要害を架へ、丈夫に拵へ、大軍にて持堅めたる釜山の城を攻めんよりは、船手へ能き大將を遣し、大船數多懸置かば、數千里の陸路を凌いで、燕京を侵さんとする心あるべからず。又船手より東に渡らんとせん時、吾大明の船大將共、船師を懸け、歸路を取る様會釋ちうかいひな

ば、人の心故郷を思はずといふ事なし。誰か家を忘れて、千萬里の海路を経て、鴨綠江へ入らんや。是遠きよりして、敵の心を碎く謀なりとぞ差上げけり。邢總督甚だ稱嘆して、之を用ひける。後に陳璘其外船手の大將共、多く敵を討ちけるも、此計を用ひたるに依るなり。去る程に、毛利宰相秀元廻されし南の一手、一組の軍兵五萬餘騎は、九月朔日に全義館に到る時、大明の勢に朝鮮の將高參相加つて、三千餘騎、全義館の右脇庭といふ處へ打廻り、全義館へ取込まんとせしが、日本の先手加藤清正と行逢ひたり。清正が先備加藤清兵衛・庄林隼人佐一備の者共懸け合せ、鐵炮を放たせければ、高參等も半弓を押立て、光手を張つて散々に射る。加藤清兵衛指揮を振つて、時分を見合せ、下知をなすべき物前にて、逸りて鎗を入るれば、勢力抜く者ぞ、吾次第にせよと、馬を乗付け、下知をなす。互に指取り引詰め射合せ打合けるが、味方の鐵炮に中りて、敵の馬武者半弓の者共、手負死人多く出來て、聊か白んで見えける時、清兵衛指揮を打振はす。懸れ者共と下知する言の下より、大將庄林隼人、自身一番に鎗を入るれば、清兵衛隼人が一組の勢、續いて踵とぞ懸りける。

大明朝鮮の兵共、悉く敗軍して、方々へ逃散しを、清正が勢追駈け、屈強の敵七十三人首を取り、勝凱を揚げて全義館へ押入りけり。全義館は、王城を去る事百五十里なれば、近日に日本勢來る由を聞きて、城を明けて、人民盡く驚騒ぎ、王城へ逃入りしかば、數萬騎の日本勢方々へ入渡り、在々所々を燒拂ふ。副總兵の解生は、日本人の眞直に王城へ攻入らんかと驚き、其手の軍兵を稷山と水源と兩所の要害に置いて、防がんと打つて出でたり。折節秀元が先手は、黒田甲斐守長政なり。朝鮮の兵共、長政が武勇に恐れつゝ、城を守つて出で得ず。毛利・黒田・加藤等が進み向ふ所に敵なく、猛威を振はずといふ事なし。旗の手を靡かし、貝鉦を鳴らし、曳々聲を揚げ、道筋を打つて行く程に、解生と長政が先手と、路五里を阻て、忽に行逢ひたり。此頃日本人の打廻るを聞きて、二十日路の間皆籠城し、城を取られずとのみ用心し、出づる敵一人も無かりしに、敵珍しく見てんげれば、長政が先勢栗山備後守・後藤又兵衛を始めとして五十騎計り、駈付け追討たんとす。解生が連や強かりけん、參將楊登山・遊擊牛伯英大將にて、大明勢五千餘にて、日本勢の通るを見んと

出でたりしと、長政が五十騎の勢はたと行逢ひたり。彼は大勢なり、一人も餘さじと真中に押取籠め、火出づる程こそ揉みたりける。栗山備後守利安は、朱具足に銀の戻馬蘭の指物にて、鹿毛なる馬に乗りたり。後藤又兵衛尉政次は、黒糸絨の具足に瓦毛の馬に乗り、黒き拘半月出したる黒母衣を懸けたりけるが、其勢五十騎を下知して、犇々と一所に寄り、眞丸になつて、同音に関を作り、解生牛伯英、楊登山が大軍の真中を、駈抜け駈入り、交合ひ頃刻に變化して、彼處に顯れ爰に隠れ、火花を散らし、東西南北に追ひ靡け、烟塵天を掠め、汗血地に満てり。栗山と後藤と三所に分れ、一所に合し、四隊の陣を破つて、八方に同じく當り、千變萬化して攻戦ふ。大明勢大軍なれば、事ともせず、五十騎を真中に取籠め、一人も洩さじと、栗山、後藤、弓手、妻手めてに敵を受け、數十騎斬つて落すと雖も、味方は手負、死人重なり、次第に弱り、援ふ勢はなし、栗山備後も後藤又兵衛も、數ヶ所創を蒙り、半死半生に討成され、本陣さして引歸る。之を見て、味方討たすな續けやとて、長政例の水牛の甲の緒を締め、馬上に手鍵提げ、麾を振つて下知しければ、衣笠因幡守・井上周防守・毛利

太兵衛・黒田總右衛門を始め、長政が二千餘騎と懸かる。秀元が先勢なじかは怵ふべき。阿曾沼豊前守・穴戸備前等其勢一千餘騎、長政に先立たんと乗出す。まばらに追來る大明三將の兵共、一支もせず、捨鞭を打つて引きけるに、干總・李益喬把總・劉遇節が二萬餘騎、折節馬煙を立て、馳來るに遇ひぬ。解生是に力を得て、取返して攻戦ふ。長政・秀元が軍兵共、少しも痿まず、乗付け、攻戦ひ、喚叫ぶ音、山を動かし、大方の合音止む時なし。劉遇節・李益喬は荒手なり、兩陣力を合せて、火出づる程戦ひける。大明人百六十餘討取ると雖も、味方も屈強の兵廿九騎、雜兵七十餘人討たれければ、兩方互に颯と引きて、息つき居たるに、同勢秀元の旗本、其外清正幸長を始め、路に續く大軍雲霞の如くなるを見て、解生・劉遇節・李益喬、叶はずとや思ひけん、手軽く山際の狭に取込み引入りけり。日本人も、日早や未の下りなり。爰にて時刻移りなば、晩の宿に遅く著くべし。大軍夜に入りなば亂るべし。軍は是迄なりとて、打つて通りけり。此時大明の大軍、未だ來らざれば、王城守護の勢多くもなかりけり。すはや只今都を取らると、朝鮮王を始め奉り、安き心

李如梅日
本勢を襲
はんとす

もなかりしに、解生手痛く合戦し、日本の首共持來り、軍に勝ちたる由を申しければ、王城主の軍兵共、氣を取静め持固めたり。十月になりぬれば、打廻りの日本勢共、釜山近く道々の城を明けて歸りけり。來銳を避けて、情氣を討つは、此時なりとて、麻貴が先鋒の副將軍李如梅等、二萬餘騎にて打立ちて、中節・星州・谷城等に陣取りたる日本人を襲取らんとす。星州城には、筑紫上野介・久留米侍從・秀包等籠りありしが、小勢にて、退く事成り難きに依つて、小早川中納言・秀秋・家老・山口・玄蕃・允が一與の内、南部無右衛門・伊藤雅樂助等五組二千餘騎、谷城を立ちて、星州の久留米筑紫が迎として、一日路遣しけり。かゝる處に、星州指して押來る李如梅が二萬餘と靦面に行逢ひ、路次中三十里が間打連れ、矢軍少々して送られけり。如梅が大軍急に懸り來れば、南部・伊藤等鐵炮を以て、打拂ひく多くの敵を打落せしかば、如梅大軍なりと雖も、三十里が間に、南部等が二千餘を討留むる事成らずして、無右衛門も雅樂助も、安すくと星州城へ入りにけり。李如梅は今日事を齒咀して、後陣續けば、是非取巻いて討果すべしと憤る體なれば、星州城には是を見て、今夜明除

かずば、後悔すとも叶ふまじとて、夜半の鐘響き出し、かば、下々に支度させ、筑紫上野介・久留米侍從・南部無右衛門・伊藤雅樂助等二千七百餘にて、曉方城を濶に出でつ、谷城へと志し引來りけるに、谷城を大明人攻落し、持固め、山口・玄蕃も落ちて居らざりければ、力を落し、是より求禮へ退きけり。此間に大河あり。船一艘も無かりければ、久留米・筑紫が兵共、如何せんと遽て騒ぎ、兎やせん角やあるまじと、口々に匂りけるに、扱止むべきにあらざれば、雜兵を下手に立て、馬武者を游がせ、上手を渡し、一時計りに三千餘の人数、一人も流れず悉く渡しけり。大明人は、星州・谷城二箇所の城を安々と乗取りければ、青山等の要害に陣を張る。されども日本人は、十月の事なれば、寒氣未だ至らぬ先に、秀元一手の打廻の勢の引入るを待ちて、俱に引取るべしとの談合なれば、青山の大明人を追落さんともせず、秀元一手の勢も次第に寒くなり、風雪烈しければ、早々彦陽・蔚山へ懸り、漸くに引入りけり。されども後を氣遣ひ、毛利秀元手より、宍戸備守・就宗一萬騎を添へ、淺野左京大夫幸長三千餘、太田飛驒守八百騎は、殿の爲めに路に残りける。

朝鮮征伐記 第十一終

朝鮮征伐記 第十二

大明邢提督大軍を率ゐて朝鮮に入る

邢玠朝鮮
王城に出陣

十一月中旬、邢玠鴨綠江を渡る。時に嚴冬に遇ひて、雨雪毎日降續けば、十一月廿九日に、初て朝鮮の王城に著き、楊鎬・麻貴と評議して兵を出し軍をせんとす。日本人も、大明の來るを聞きて、逆寄にする事も有るべしと、邢玠思索し、先づ斥候の兵を出し、日本人の動靜を窺ひ聞き、其間に、竹木を切取り、小屋具を用意し、稻を舂き糧を搜り、山谷の間に充満ちて、亂妨狼藉せり。日本人のかたまりたる城々多しと雖も、大軍は三所に屯す。行長は、松嶋に之ある船手にて、順天へ持續けり。清正は、蔚山に有り、要害の地なれば、初より諸大將の談合にて、北は順天を固め、大軍を入置き、南は蔚山に著きて、南方一筋を、心安く往還せんとの謀なり。共に

大明邢提督大軍を率ゐて朝鮮に入る

船手の便宜にて、然かも險阻切所にて、自然の要害なりき。此時蔚山普請總奉行は、加藤清正にて有りしが、船手の城々も普請せんが爲め、自身は西生浦へ行き、夫より機張に歸る。蔚山には、家人加藤清兵衛小代下總守・佐々平左衛門・齋藤立木に、三千餘付け、殘し置き、毛利家の軍勢に、筑紫衆少々相加へて、普請最中なり。是に依りて、大明人は、清正蔚山に有りと思へり。小早川隆景子息金吾中納言秀秋は、太閤御名代なれば、釜山城に有りて、松嶋蔚山釜山三箇所の日本人を合せて、兵馬十二三萬騎に過ぎず。大明の兵をも、三つに分けて、六備に分ちたり。三手の内大軍なれば、主將と偏將とを預ち、各一備にして、互に援け合戦せんと約束す。初め邢玠、遼陽を出でし頃より、朝鮮の君臣に、檄書を遣し、責めて云く、朝鮮人、日本人を恐れず、勵み戦ふべしと云うて送りぬ。今直に朝鮮王竝に諸臣に面談し、大明より援兵をかし、此國を安せんとする恩を忝うすと思はれ、王も群臣も、共に心を固めて戦ひ、主の義を専らにして、人馬を調へ、兵士を發し、日本人を殺すべしとぞ、恥かしめ勵しける。是に依りて、朝鮮の兵曹官李恒福と、諸道都巡察使權慄とを總軍

邢玠朝鮮
君臣を勵
ます

奉行として、十二月朔日より、諸方の城より打つて出でて、日本人の横行するものを遮ぎり止めて、小勢にて固めたる取出をば、攻めて破るべしと、下知をなす。初は朝鮮人の兵共、日本兵を虎の如くに恐れつゝ、逃げ隠れる計りにて、向ふ者なかりけるが、大明の提督に勵まされて、所々の朝鮮人討つて出で、方々にて軍をして、掟を獻す。其内順天にて李順臣任俊英との兩組の勢、小西行長が勢と矢軍して、打勝つ。小西が兵の首廿五取りて獻る。方々の手前より、あなたこなたに討取りし首數八十餘組、大明の邢提督に見せければ、朝鮮の兵、聊か頼もしとぞ悦びける。又李元翼令の軍將守合等の官に告げて云く、日本人に降參せし朝鮮人は、罪の多少を論せず、逃げ來らば、悉く罪を免じ、本領を返し與ふべしと觸れければ、日本へ馳せ付きたる朝鮮人共、逃げ來る事數千人、日々に引きも切らず。此時宣府大同補延綏保定浙勝營の兵共、悉く來る。續いて葉邦榮浙の兵共四千、南京の水兵二千六百八十人を募りて、陳雲龍と同じく朝鮮に來る。許國威は、福建の先調兵一千五百人を領し、參將王元周は、應天の先調水兵一千人を率ゐ、福昌升は、浪山の兵一千五

大明邢提督大軍を率ゐて朝鮮に入る

那珍日本
軍を攻む

百人を領し來れり。後より又浙福の水兵も續き、廣東の東璘も、陸兵五千・水兵三千人を召具して、既に路に有り。劉綎が川の兵と、陣廣が兵とは、來年戊の二月に、朝鮮に來る筈とぞ聞えし。提督那珍は、朝鮮王城に有りて、諸大將と進攻の次第軍評定有り。先づ日本よりの根城なれば、金吾中納言が居住したる釜山浦の城を攻めん事を先とす。されども釜山の道筋、陸路より梁山の西北によりて、高山峻嶺有り。一騎打の事なれば、大軍を押す事叶ふまじ。又南原に懸れば、三浪大江有り。金海・竹島へ通路宜しけれども、此二所は、咽喉の地なるに依り、日本人多く是を持固め、防を成せり。又巨濟・加德・安骨の一筋にかゝるも、船手自由なり。是又吶の所なれば、日本人共船數百艘有り。いかんともすべからず。但し巨濟は、襄陽をあけて守りの船も、日本人をかざれば、是へ著岸せんと、議定すれども、梁山・三浪江を往きて、遙々と越ゆる大明の大軍を知らぬ貌にては、よも巨濟迄通すまじ。その上巨濟の隣は機張なり。機張は、清正が充満したれば、聞くと均しく寄せ來るべし。然れば釜山へ寄する事、中々思ひも寄らず。只今、清正西生浦に在り。之を攻むる

には、陸路は西より東にして、東萊機張に懸る。又北よりして、南の筋へ出づれば、慶州蔚山に懸る。此路東南は大海、西北は山嶺なり。いづれも日本人共の城を取固め、持續きたり。又船手より出でんとすれば、東よりして西に廻り、長鬚耳浦により、朝鮮の水兵此處に在りと云へども、小勢なれば、大軍の著くを見れば、やがて拂はるべし。兎角謀の第一は、一備は南原に屯し、全羅道を防ぐべし。一備は大丘に屯して、以て慶尙道を防ぐべし。一備は慶尙・全羅の中に屯し、晉州・宜寧等の所を、本陣と定め、兵を分けて、釜山機張の兩城へ、陸より向ひ、水兵と東西四面より、一度に發して攻めんには如かじと、談合一決して定め、即ち此通り疏に載せて、北京の朝廷へ奏聞し、兵馬四萬餘人を以て、三協とす。左協は、副總兵の李如梅を大將とし、盧得功・董正誼・茅國器陣宜・大綱を、部將とし、馬歩一萬三千人を領せり。中協は、中軍副總兵の高策を、大將にして、祖承訓・頗貴・李寧・李化・童紫・登科・苑忠・吳惟忠を、部將とし、馬歩官軍一萬一千六百九十人、右協は、副總兵の李芳春・解生を、大將にて、牛伯英・方時新・鄭印王・戡直武・盧繼忠・楊方金・陳忠聞を、部將とし、馬歩官兵一萬

大明那提督大軍を率ゐて朝鮮に入る

一千六百二十人なり。又標下の參將彭友德、楊登山、大同の遊擊擺賓、坐營の張惟城は、泮武者にて、其期に臨みて、何方へも働くべしと、遊軍にて列を成し、監軍は監察御史陳効なり。邢提督が本領には、麻貴と楊鎬と、左右に協の兵を率ゐて、忠州烏嶺より、東に向ひて、慶州に赴き、清正が籠りたる蔚山を攻めんと思へども、行長、西より來たりて援けなば、悪かりなるとて、中協の兵馬をして、宜寧筋に出し、東は左右協の脇詰になり、西は全羅道より、蔚山を援けんとする敵を遮らしめ、又三協の中より、兵馬一千五百人を選みて、朝鮮の兵と營を合せ、天安、全州、南原よりして下り、大に旗を張り、順天を攻取らんとする状を見せて、行長を出すまじき謀なり。又平壤筋へは、兵糧十二萬石を備へ出すべし。頓て大明より、又二十萬騎到ると、僞りて觸れさせけり。王城の留守は、大明三將を残し、二千人に過ぎず。悉く打つて出でたり。朝鮮の兵は、忠濟道節度使李時言二千餘騎、並に平安道の兵二千餘、左協の組下に馳せ加はる。慶尙道節度使成允門が兵二千、應權珠が兵二百餘、慶州の撲殿長が兵一千、咸鏡道、江原道の兵二千餘は、中協の下に著きたり。慶尙道の郢起龍が兵

一千、黃海道の兵二千、防禦使高彦伯が兵三百人は、右協の備に入る。凡そ鐵炮一千二百四十四位、火箭十一萬八千支、鐵炮の火藥六萬九千七百四十五斤、大小の鉛十七萬九千九百六十七斤は、今度の用意として、遼陽の分主張登雲、之を承りて運送せり。此外、三眼銃、鐵鬚、衰銃、閤棍、大炮、火箭、團牌、佛郎機等の兵具は、皆日本人の恐るゝ物なり。攻道具一つとして、備はらざると云ふ事なし。兵糧は一箇月のを、具ふべしとぞ、夫々に手分けをして運ばせけり。朝鮮王猶も將卒を勇進せんが爲め、近習の高官四人を遣し、三協は一人づつ入り、觀察使黃愼をば、全羅道の城々へ遣し、丈夫に持固むべき由、下知をなし給ふ。自然兵糧續かされば、大軍難儀なるべしとて、十日の食物を炒米にして、腰兵糧に充てがひ、俄事の用に備ふ。陸の備は、是の如しと云へども、船手の分ちなし。閩浙の水兵を催すに、未だ至らず、十二日の初、天津の巡撫萬世德、水兵を併せ馬武者六千を以て、旅順、登萊に分けて、犄角せしむ。小西行長が順天城も、船手に近し、此押に水兵三千餘人置くと雖も、自然の事有らば、防かすべしとて、朝鮮水兵を、又重ねて遣しむ。又清正今に機張に居て、近邊悉

く切隨へて領知し、自由に働かば、此押に、朝鮮水兵官の李應龍五百餘人にて、伏島の中に有りと雖も、頭を出すを得ず。清正亦又侮り見て、物ともせず。國王に謀りて、重ねて鐵炮二百挺弓百挺を添遣し、其上に南兵把總の楊貴と于承恩とを遣し、李應龍と潛に、島の中に匿れ居て、時分を見て、軍を取りかけば、清正侮りて出づべし。其時清正兵を出し、挾みて討つべしと定めけり。此時陳璘未だ來らず、彼を待ちて、船手へ遣したらば、陳璘は、舟軍に老いたる良將なり。たとひ清正、出でずと雖も、挑出し討つべき者を、今少し待ちかねて、軍に馴れぬ者共を遣しけるは、謀の拙きなりと、老武者は、之を難じける。日本人も内々大明の諸大將勇士等、數を盡して、蔚山城を攻めなんとの催にて、向ふ由聞きしかば、去る十月十日より、諸勢を寄せ、普請等數日を分けず急ぎしかば、此頃は矢倉等も大方出來しかども、外郭三の丸等は、漸く堀の手の、合ふ所も有り、未だ合はざる處も有り。蔚山本丸には、毛利宰相秀元の兵、淺口彦右衛門・三刀屋四兵衛・冷泉民部大輔元光・吉見大藏少輔・成羽紀伊守・竝に清正家人加藤清兵衛・齋藤立木・佐々平左衛門・小代下總・相良宮内

明軍蔚山
城に向ふ

少輔・毛利壹岐守・高橋秋月・伊藤等の筑紫武者を加へ、八千に過ぎず。本丸の南に、島山有り。之を出城として、出田宮内少輔・佐々平左衛門以下の清正が兵共、持固めたり。其間に入江の大河有り。是に船を絆き置き、本城との通路をせんとぞ計りける。

淺野幸長蔚山城に入る并大明人蔚山を圍む

大明人諸方の手分既に定りて、十二月四日に、邢玠、諸軍勢を集めて、大將壇に登り、天地を祭り、諸將を犒ひ、官兵に告げ警戒し、旗を祭る。時に數萬の鐵炮をつるめ放つ音、天地に震ふ。朝鮮の臣民、手を揚げて、額に加へて云く、生れしより以來、兵革に逢へども、是くの如くの威儀嚴重なる事を見ずと、軍法の正しき事を感じけり。是より楊鎬・麻貴は、三協の大軍を引率し、南を指して押出す。朝鮮王も、李大諫を遣し、日本人に交り居る高麗の民に仰遣し、此時手引をするか、又自分の心操をして、味方へ馳入るべしと、潛に申送り給ふ。同二十日に、大將經理の楊鎬、同麻貴、三

淺野幸長蔚山城に入る并大明人蔚山を圍む

協の將士を引具して、慶州に會す。是より蔚山へ一日路に清正等、皆蔚山に集まり籠る由、聞えたり。蔚山の南は、島山なり。二山甚だ高山ならざるに據りて、固めをなす。中に一つの入江有り、釜山浦への通路なり。陸路は、彦陽より釜山への大道有り。麻貴等、力を専らにして、急に蔚山を攻落さんと思へども、其内釜山浦の日本人、彦陽道へ出抜き來らば、味方難儀になるべしとて、中協の高策、吳惟忠等を遣し、官軍數萬を領し、彦陽、梁山により、要害の胴筋を遮り止めんとす。此時、打廻りの殿の一組、淺野左京大夫幸長、太田飛驒守、穴戸備前守等、明日は蔚山へ入らんと、廿一日の夜は、彦陽に陣を取り、一里計り後に川あり。川向ふに斥候として、阿曾沼、豊前守を大將として、毛利家の勢五百餘騎を差遣し、一萬計りの日本勢、五里三里の間に、陣を取り、吳惟忠、高策が先勢、之を見て、すはや能きものなれとて、廿二日曉方、穴戸が先手の斥候、阿曾沼が手へ斬つて懸り、五百餘人討取りて、山を阻て、引入りけり。夜明けて、之を聞き、淺野左京大夫幸長、大に怒り、蔚山へ引入る儀なれども、五百人の味方を討たれ、敵のつらをも見ず城へ入りなば、後難天下の嘲哂となるべし。

日本軍明
合軍と小迫

あの山の彼方に、定めて唐人共は有らん。いざ懸りて、今朝討たれし味方の弔合戦すべしと奔きける。家老の淺野左衛門佐、馬より飛下り、主の馬口に取付き、こは勿體なき仰哉と、止る所に、穴戸が手に、古兵共多ければ、皆馬の前に馳塞り、左京殿の仰も尤もなれども、唐人百萬騎寄來る由、此中沙汰せり。治定山チヂマの彼方迄、押詰めたりと覺え候。其仔細は、今曉、味方の斥候の兵共の討れやう、又近邊に敵有りとも見え、引入れたるは、大軍一度に押來らん爲めなるべし。只足早に蔚山へ入らせ給ひ、吾等が手の者、過半今朝討たせれば、懸りてよくば、此方こそ進申さめ。されば孟子の、寡は固に衆に敵すべからずと云ひし處なり。其上先にも申せし如く、敵の引取り様、餘り速なれば、不審に存候。只理を枉げて、引入らせ給へ。後日に難する者有らば、某ら罷出でて、其咎を負ふべしと、頻に諫め止めける。太田飛驒守も、此儀尤もなり。太閤の御前申分は、吾等御目附の事なれば、任せ置き給へと、俱に達て止めけれども、幸長此時廿二歳、軍法未だ鍛鍊なし。剛氣なる猛將なれば、なじかは意見に付くべき、耳にだに聞き入れず、各はよきや

淺野幸長蔚山城に入る并大名人蔚山を圍む

うに計らひ申さるべし。某に於ては、敵を見ざれば、八幡大菩薩も御照覽候へ。蔚山へ引入るまじと匂りながら、駿馬に鞭を進めて、眞先にこそ進まれけれ。幸長其日は南蠻胴鳩背に、象眼の入れたる鎧を、紫糸にて緘したるを、草摺長にさゝめかし、銀の鍬形打つたる甲の上に、黒熊をかけて、猪首に著なし、金の天衝出したる黒母衣を、嵐に吹かせつゝ、さび月毛の馬の尾髪あくまで縮みたるが、天へも上らんと、早り切つたるに打乗り笛卷の柄の鎌鎧を、馬の平首に引側めつゝ、志有る人は續けやとて、馬を乗出し給へば、宍戸も太田も、今は制するに及ばずして、幸長に後れじと、馬を早めて駆出でぬ。相従ふ勢一萬三千餘、主に先立たんと、乗抜け乗抜け、向の山を押廻す時、案の如く、山陰に數萬の唐人、只今貝鉦をならし、軍勢を押出すに、出合頭にはたと行逢ひたり。幸長、宍戸屹と見るに、山も一面に、旗小符充滿ちて、山より山、里より里に押續き、溢れ來る有様、幾千萬と云ふ數を知らず、夥しきとも中々なり。味方の兵まばらの馬駆に、備をなさず、駆け來るを見て、高策、吳惟忠等喚きて敵は小勢なるぞ、引包み討てと下知して、馬は上手なり、後を取

切らんと、猛勢の中より、駿馬に鞭を揚げ、數萬騎駆出し、引包まんとぞ取廻りける。百分が一もなき味方なれば押立てられ、蔚山へ引取らんと、幸長、宍戸、牒し合す。一大事の退口なれば、幸長の鐵炮頭龜田大隅守高總、岡野彌右衛門、森嶋新五郎、大駄源右衛門、長岡茂助、木俣彦三郎、箕浦大藏、枝田喜左衛門等を始め十餘人、殿と定め、先手淺野右衛門佐、二の手淺野右近と、次第繰りに引く。宍戸備前一萬餘騎、先手阿曾沼豊前守、兒玉等を始め、段々に引きけるに、大明人數萬騎、足をも亂さず、眞黒に追來る事、甚だ急なり。幸長も立泳へく、自ら手を下し、火花を散し防戦しけるが、彦陽より蔚山迄、日本道三里の間、幸長近習の士多く討たれ、諸勢も手負、死人の數を知らず。大明人勝つに乗じて、逃ぐるを追ひて進みけり。宍戸備前守、太田飛騨守も、自身鎧押取り返しては突倒し、取つて返しては突散らし、息をも續がず防戦して引退く。然れども西より北より、大明の猛勢共、嶺よりも溢れ來り、かしこの谷よりも押上げ、曳々聲を出し、貝鉦を鳴らし、中々冷敷き事、肝魂も有ればこそ、日本の弱き雜人共は、離れくゞに退かんとせしを、宍戸備前守、大の眼を瞋らかし、斯様の

時、冷敷に氣を取られ、脇道へ懸れば、必ず討たるものなり。只心を一にし、真丸になりて、退き候へと、匂りく退きて行く。餘りに強く追來る時は、幸長引返し、自身鎧を合せ、突き倒しく首を取つては退き、斬拂つては引退き、逆も近れぬ道に極りたるを、蓬き働して、敵に笑るゝなとて、幸長後に引下り、返合せく踏怵へては突き寛げ、立怵へては突退き、防戦して三里が間、防ぎ退にして五十餘度迄防戦しければ、幸長、頼み切つたる勇士共、手負討死し、諸軍勢も押阻てられ、備前守は、道筋を退きけり。是により、淺野左衛門佐も、宍戸が後に付いて、城へ入りける。幸長は、三里の戦に、身近侍共大方討たれ、金の唐人笠の馬印も斬破られ、殿の物頭岡野彌右衛門・森嶋新五郎・太田源左衛門・長岡茂助を始め、七八人討死し、漸く蔚山に著せしに、大明人急に來りしかば、城へ入る事も叶はず、返合す者は斬つて落され、城へ取込まんとする者は、城戸逆茂木に堰かれて入るを得ざれば、蔚山城中、周章て騒ぎ、すはや此城、只今攻落されぬとぞ見えたりける。幸長も甲の吹返鉞形、皆斬り落され、左の二の腕二個所、右の大股三個所手負ひ、血の流るゝ事瀧の如し。

龜田高總
の奮戦

馬も七個所迄、手負ひたれば、倒れて死しぬ。持つたる鎌鎧も、太刀打より斬折られ、太刀は鏝本より打ち折れたり。馬には離れぬ、手は數個所負ひたり。敵味方押立て押立て來りければ、幸長も柵に犇と押付き、母衣籠も押潰れ、動く事も叶はず。既に城門近所にて、討たれんと見えける。城中よりは之を見て、悲み喚き叫ぶとも爲方なく、見えける所に、幸長が兵、龜田大隅守高總、只一騎返合せ、大敵の中心へ面も振らず、馳入りて、身命を捨て防戦ひ、吳惟忠が先手の部將王鶴子が勢二千計り、龜田を真中に取巻きて、餘すなとこそ戦ひけれ。大隅之を見て、此處にて討死せずんば、幸長助かり給はじと存すれば、目も懸けず、大明の王鶴子と押並び、むす組み、馬より下へ落ち重なり、終に龜田上に成り、王鶴子が首を取る。大將の討たれたるを見て、此手の兵二千計り、周章て騒ぎ、亂るゝ所を、城中より門を開きて清止が家人加藤清兵衛・小代下總守・佐々平左衛門・齋藤立木等、混甲千餘輩、拔連れて、突いて出でたり。寄手の大明人、一支もせず、ばつと引きける。其隙に、幸長も、太田飛驒守も、半死半生に討ちなされ、漸々城へ入り給ひけり。加藤清兵衛勝

淺野幸長
蔚山に入る

淺野幸長蔚山城に入る并大明人蔚山を圍む

つに乗じて、逃るを追うて大明人の首三百八十九討取り、長追すな早引取れとて、城中へ取込みけり。幸長・宍戸・太田が軍勢、道にて押阻てられけるか、又討たれたるか、士卒半分は見えざりける中にも、宍戸備前守は、城へ入るやうには見えしが、討たれたるにやあらん見えず。宍戸が兵共、涙を流し、口惜しき次第なりと、憤りけれども、大敵四五里四方に充滿ちたれば、尋ねに出づべきやうもなし。幸長は數個所の疵を蒙り、鎧甲も斬散され、朱になりて、母衣籠潰れたれば、母衣籠を引摺りつゝ、木全彦三郎・原勘兵衛とに、兩の手を引かれ、片息になりて、城へ入られけり。龜田大隅も、王鶴子が首を取持ち、半弓にて、鎧の引合を射させ、郎等の肩に懸り、引入りけり。簡程の大軍にて、追ひ來る勢に、直ちに城を乗取れば、城中には矢間配もなし。俄の事なれば、防ぐ便もなき程に、其まゝ落つべかりしを、寄手も草臥れけるか、謀の拙きか、外郭引破られたるを手柄とし、諸方の寄手、一里計り引退きける。城中是に息をつぎ、諸方の矢間配をなし、幸長大手を固め、毛利家は、大軍なれば、島山かけて請取り、太田飛騨守は目附なれば、持口をば請取らざる浮武者なり。加

藤清兵衛は、城代なれば、塀の手の合はぬ處諸人の糧米以下夫々に點じて渡しぬ。此城普請半ばにして、當座の人夫迄も集りたれば、兵糧少しもなし。殊に唐人の大軍に驚き、近邊の商賣人・百姓迄、妻子を連れ逃げ入りたれば、雜兵加へて二萬人計りなり。此人數を養ひなば、三日の糧も有るまじと、第一之を迷惑すれども、俄に運び入るべき手段もなく、働く軍兵共、其手を其手へ纒の兵糧を分け遣し、逃入る雜兵は、食物一粒もなかりける。寄手は楊鎬・麻貴大將にて、三協の大軍、追手・搦手五十萬騎、蔚山城外五里七里が間に遠卷し、面々に陣取りて控へたるに、旗・小符の立並びたる體は、夏野の草の滋合ひたるが如く、甲冑・劔戟の映じ渡る有様は、電光の激するに異ならず。四方十餘里が間は、野も山も、平等に人馬充滿ちたれば、蔚山城中の日本人共、雜人も肝を消し、膝を震ひてぞ覺えける。斯くして其日も暮れしかば、寄手陣々に、雲火を焼き連ねたるに、其光天地に映徹して、喩へば秋風吹き、晴れたる満天に、星の列なりたるが如くなり。今日彦陽より蔚山迄、三里が間の戦に、幸長・宍戸・太田が士卒共、過半討死・手負、又は押され阻りつゝ、城へ入り得ざる者共、

夜に入りて、方々の口々、又は塀柵を越えて、城へ入る輩、數百人なり。茲にても穴戸が兵共は、主の備前守行方を尋ねんとて、夜に入り、塀を越えて、外へ出で、方々を尋ぬる處に、備前守は、薄手少々負ひ、馬離れつゝ、郎等二人と共に、蔚山より二十町計り阻りたる小山の上へ登り居て、如何して城へ入らんと、歎じ有りける處へ、迎の者共の尋ぬるに逢ひ、互に喜びの涙を流し、備前守を肩に懸け、田の中を傳はりて、城に引き入りけり。明くれば廿三日卯の刻、左協副將軍李如梅、楊登山馬武者を選みて、五萬餘騎城際近く寄せて城の様子を見る。幸長竝に加藤清兵衛下知して、わざと鐵炮一つも打出さず、静まり反りて、待懸けたり。寄手も後陣の汰間は、岸涯に沿ひて、城中へ見えぬ様に、平伏して待ち居りしが、巳の刻計りに、諸方の寄手集ひ集まれば、遊撃擺賽大將にて、勝ぐれたる兵五百餘騎、一方の架を打破らんと、ひた／＼と堀涯に著し、兩方互の謀にて、城中は寄手を多く寄せて、突いて出で討取らんと工む。寄手は又後陣の備立ちたらば、擺賽李如梅、楊登山、塀を打破り、乗り入る真似をして、城中の勢を誘ひ引出し、討取らんと謀りしかば、擺賽が勢、城下に

明軍を破る

付くを見て、城中より穴戸、淺口、阿曾沼等、毛利家の勇士一萬計り、鐵炮を一度に放ち、関の聲天地を響かし、拔連れ門を開きて、大山の崩るゝが如く、眞黒に突き出づる。擺賽兼て謀りし事なれば、捨鞭を打つて、逃れ行く。冷泉、穴戸、阿曾沼等、勝つに乘じて喚き叫び、逃ぐるを追うて進んだり。李如梅、楊登山、之を見て、天の與ふる處なり。一人も餘すなとて、四方の伏兵、一度に起りて、城中へ歸り入れじと攻戦ふ。吾れ先に高名せんと、深入りしたる日本勢共、冷泉、民部、淺口、彦左衛門、阿曾沼、兒玉、穴戸が兵共ものともせず、極めて馬強なる打物の達者共、善き馬には乗りたりける。田も畑も論せず、眞平に乗立つて、大明の大軍の眞中へ駈入り、弓手に馳合ひ、妻手に駈違ひ、大明の猛勢を、切つて落し追廻し、算を亂して追廻し、將基倒しに斬落されければ、如梅、登山が大軍共、手下に討たれたる者、三千餘人、小腕討落され、朱に成りたる者數千人、爰に群立ち、彼に僻易し、七縦七横に駈立てらる。されども李如梅、楊登山、大軍にて競ひて來れば、城中の日本勢共、敵は大勢ぞ、討捨にせよと呼び、深入なせ。早々引取れと、颯と打入れる。此時、敵を討つ事、若干なりと。

いへども、彼は大軍なれば、少しも痿まず、切出でたる日本勢、四方の伏兵、起るに逢うて、討たれたる者、四百餘人なり。之を軍の手合として、副總兵の李芳春と解生は、西の手より攻寄せ、風を見て、近邊の在家に火を懸けたり。猛火雲を卷いて焼上り、黒煙城中に吹き懸りしかば、煙と雲と亂れ合ひて、空は霧の海と成り、十里二十里に掩ひ來り、宇宙に滿々とし、蔚山城を包みつゝ、常闇と成りにけり。解生、李芳春、是に利を得て、煙下に紛れて、塀際近く押詰め、本城と出城の島山の間の川に、日本船有りて、兩方持合ひけるが、芳春、解生共、其船を取りて、乗入らんとす。城中より、加藤清兵衛下知して、大筒、中筒の鐵炮を集め、數千挺筒を雙べて、雨の降る如く激しく打ちければ、芳春、解生が兵共、皆船底に平伏して、鐵炮を通れんと犇めさけるを、加藤清兵衛、眼を瞋らし、身を揉みて下知し、大筒を雙べて、入れ代り入れ代り、隙間もなく打たせければ、寄手の大明人共、船四五艘乗沈めて、死者數を知らず。艦權に取付き、泣叫びて、浮きぬ沈みぬ流れ漾ふ有様、喩へん方はなかりける。城中よりも島山よりも、彌、力を得、指夾みて打立ち射立つる事、雨の降るが如し。

大將解生も李芳春も、船を打沈められ、流木に取付き、漸々に遊ぎ上り、命計り助かりて、本陣へ歸りける。寄手手段を替へて攻むれども、城中少しも痿まず、手強く防戦せしかば、攻申んで、寄手是より引退くに、三里の間に陣を張る。此時寄手の方へ、城中の日本の兵、一人生捕りけるが、清正城中に有りと、堅く申しけるに依りて、大明人眞實なりと心得て、彌、攻口を寛^{くろほ}ける。寄手、猛勢たりと雖も、城中要害に便りて、防ぎければ、さまで退屈するに及ばず。清正名代加藤清兵衛は、城中を點檢するに、兵糧已に盡き、二三日の養ひにも不足なれば、此由、機張に居らるゝ清正に告げ、急ぎ後卷仕られ候へと、申し送らんとて、此旨淺野左京大夫の前へ參り、申達す。幸長尤もなりと領掌し、其使をぞ選まれける。京兆申されけるは、誰にても機張へ使者に參らん輩は、近頃の忠節たるべきぞやと有りけれども、此大敵の圍の中を出で、誰も機張へ行かんと云ふ者なかりしに、幸長の兵木村頼母助進み出で、苦しがるまじき儀に候はゞ、吾等罷越し、見申すべしと云ふ、幸長大いに悦び、さらば其方參り候へ。諸軍勢を助くる大忠節、此上は有るべからずと、涙を

流し感じつゝ、さりながら數萬騎の圍を出で、安穩にして又逢ふべき事、定まらざるなり。主従の名残なればとて、幸長盃を取上げつゝ、頼母にぞ差したりける。木村盃を給はり、今生の御暇乞是迄なり。今を限りと思ひければ、兎角の事に及ばずして、涙に咽びて立出でけり。加藤清兵衛、穴戸備前も見送りつゝ、相構へて恙なく、著き致され候へとて、涙を流し別れにける。哀れなる次第なり。朝鮮、寒國の取りえには、塀柵を付くるに、少し鍬形を付け柱を立て、其根へ水を懸くれば、水閉ぢて、磐石の如し。一夜の間に、出城の島山と、蔚山本城との間に、塀を附け、矢間を切り、鐵炮を調へて待懸けたり。明くれば十二月廿四日なり。昨日此手を破りし寄手に、麻貴、又荒手に加はり、號令を嚴にし、諸卒を隨へ攻め近付き、茅國器も、漸の兵を引牽し、昨廿三日李如梅、手痛く合戦し、多くの日本人を討取らば、彼が功に勝れんと工み、今日一手柄せんとして、兩手の兵、此架へ攻入りて、塀柵引破り、三の丸迄入りける故に、城中是に騒ぎて、鐵炮を集めて、雨の降るが如く、散々に打ち、五間・七間に引請け、差詰めて放しければ、鉛子一つにて、二人はつなげども、

冷泉元光
討死

浮矢はなかりける。寄手の大明人、或は打殺され、或は手負ふ者數を知らず。されども大軍なれば、手負も死人をも顧みず、三の丸を揉破らんとせし處を、幸長自身鎧を合せ突出しけり。然りと雖も、新手を入替へく攻込みく、透間をあらせざる事、誠に項羽が函谷を破りしも、斯くやありけん。三の丸を守りし毛利中納言輝元の家臣冷泉民部大輔元光は、毛利家に於て、事の急なる時は、必ず魁け殿の役たり。今度も、又普請等、首尾もせざる三の丸を守る可き旨、御目附太田飛騨守より、觸れ來りぬ。民部大輔、堅く守るべきの條、御心安く候へと返答せり。かく云ふも果てぬに、麻貴と茅國器、多勢手を分け襲ひ來りぬ。冷泉、手の者共、左右に従へ喚き叫んで、火花を散らし相戦ふ事、數刻に及べり。然りと雖も、或は手負ひ戦ふに因り、或は討死し、殘少に見えし處に、麻貴、茅國器、彌、勝つに乗りて攻入りしかば、冷泉民部大輔元光と名乗りて、長刀を水軍に廻し、手もとに進む敵共、十五六人薙伏せ、阿曾沼豊前守と一所に枕を並べ、討死を遂げたりける。弓手、妻手にて、郎等共廿餘人、一つ枕に討たれぬ。白松善右衛門尉伊賀崎又兵衛尉吉安太郎兵衛は、其折節、他の

口に有りて、討死せざりし事を、本意なく思ひ、元光死骸を火葬し、終に其野にして、腹十文字に搔切り、三人共に失せにけり。侍たる者は、斯様に義を守りてこそと、貴賤感涙を流しける。其志大切なるにより、討死せし侍二十餘人、追腹せし侍三人、假名・實名を記付け、冷泉領分出雲國龜山高瀧寺に寺領を附け、元光竝に郎等其の位牌を、毛利殿より立置き給ひけり。其後、堀尾帶刀吉晴、關原逆亂の忠節により、家康將軍家より、雲州恩賜有りて、入部しけるに、此時の由來を聞き、吉晴涙を流し、其節義を感じ、艶くも先矩の如く寺領沙汰せられけるとかや。扱て又、淺野左京大夫は、猶も弓・鐵炮を多く寄せ、火花を散らし戦ひけるを、加藤清兵衛申しけるは、淺野殿は將軍の御親族の中なり。急ぎ本丸へ入り給ひ然るべく候はんと、諫めけれ共、幸長他に譲り耳にも聞入れ給はず、二の丸に有りて、度々突いて出で、自身相働き、下知などもおいらかなり。されども冷泉元光討たれつゝ、皆以外あし〜になりしかば、麻貴・茅國器、兩大將勝つに乗じて、矢・鐵炮にも痿ます攻入りて、日本人の小屋、少々焼き拂ひ、城中の日本勢を、蔚山と島山とに追止めたり。今日の戦に、城中

に討たれたる者五百餘人、寄手は一萬人に餘れり。砦へ爰に陣を据ゑ、本城と島山の間を取切り、後陣の大軍を引付け、竹策を以て仕寄せば、城中怵へがたかるべきを、軍は是迄なりとて引退く。又明日寄すべしと議定せしに、夜に入りて、本城・島山兩城の通路をなし、堀・柵を附け、要害を架へしに依りて、毎日同様の迫合なり。寄手は夥しき大軍なれば、新手を入替へ〜、少しも屈する體なし。日本勢は小勢なれば、軍に勝つても、底意がなし。毎日攻めらるゝ時は、城中も島山も、責念佛を申し、雜兵湧返り喚き叫ぶとも、敵引退けば、又其の透に息をつぎ怵へ居たり。兎に角に兵糧はなし、次第に手負・死人重なれば、城中以外の外に、弱りてぞ見えたりける。

大明勢島山砦を攻む井加藤主計頭蔚山に入る

蔚山城強くして、寄手攻めししかば、諸大將、皆楊經理の前に來り申しけるは、只一途に、島山の取出を攻取らば、自ら本城は、弱るべしと評定し、十二月廿五日の巳の刻に、麻貴を大將にて、二萬餘騎、島山へ攻懸る。此島山と申すは、巖石峨々として、

古松枝を垂れ、蒼苔露滑なり。曲經凹凸として、人馬卒爾に登り難し。況んや物具差固めて、攻めらるべくや。城には、毛利家三刀屋四兵衛、野島掃部、淺口・高野瀬・三澤、佐世・高橋・官・三吉等に、清正が兵出田宮内少輔、佐々平右衛門、籠りしかば、少しも騒ぐ事なし。大明の猛勢を、塀下へ引附けんとせし事なれば、寄手は塀に附くまで、鐵炮をも打出さず、寂莫として音もなし。大明勢氣を得て、切岸を上り、取寄せたる處を、二三日間に引請け、千挺計りの鐵炮を、一度に放立てたるに、切岸より浪打ち涯まで、沓の子を打つたる如くに詰寄せたる寄手共、なじかは怵ふべき。一同に唾とぞ崩れける。手負・死人の伏したるは、算を亂せるが如くなり、大將麻貴、大いに怒りて、白旗を取りて、士卒を勵まし、又取返し、彌が上に攻め上る。島山は小勢なれば、突いては出でず。又蔚山にも、數萬の敵を請けたれば、駈合ひては、悪しかりなん。只鐵炮にて打殺せと、下知して出でず。麻貴怒り悶えて、猶も攻入らんと、鐵炮防の道具、挨拶布簾をかつぎ、連懸梯などの攻具を持ち、曳や聲を出し、險岨の山を攀登る。島山の兵共が、兼て工みし事なれば、架へ置きたる大石・大木を、一度

に二十計り切りて、落懸けしかば、壓に打たれ、石に當りて、將基倒をするが如く、一度に捲り落されたり。上を下へと騒ぐ所を、塀裏の矢倉の上よりも、鐵炮にて打ちひしげば、或は甲を通され、或は手足を打落され、手負・死人は山の如し。大勢の中へ、打出す鐵炮なれば、彈一つに、二人・三人はつなげども、浮矢は一つもなし。三時間計りの戦に、寄手の討死六千餘人なり。半死半生の者は、數を知らず。麻貴は之を見て、爰にて人種を盡しては、叶ふまじとて、手負を助けて、本の陣へ引取り、明日火攻にすべしとて支度せり。さる程に、淺野幸長の使木村頼母は、廿三日の月の出づるに、心細くも蔚山城を出で、十重・二十重の圍の中を、忍び出でて、山野の艱難を經、二日路有る機張へ廿五日の曉に、參著しけり。加藤主計頭急ぎ對面せられければ、木村蔚山籠城既に難儀に及び候由申す。清正聞くと均しく、庄林隼人佐一心を呼び、早々船を拵へよ。吾一騎なりとも、只今蔚山指して、乗出すべし。皆々其支度相觸るべし。吾日本を出づる時、淺野彈正暇乞に參り、子息左京大夫幸長事若輩に候なれば、必々頼入ると有りし時、心安く存せられよ。幸長難儀せば、必ず

助け申すべしと、堅く約束をなせり。幸長を討たせては、吾何の面目有りて、再び日本へ歸朝し、彈正に逢ふべきや。吾蔚山に入らざる前に幸長討死せば、一騎なりとも、敵陣へ駈入りつゝ、彼が弔の一戦し、討死を遂げつゝ、日本にての約束を、冥途黄泉迄合すべしと、清正六具をしめ、早貝を吹かせ、旗を出し進みしかば、手元に有る軍兵共も、吾もくゝと打立ちける。庄林は、船奉行梶原を呼び、船を點檢しけるに、只十艘ならではなし。此旨斯くと申しければ、さらば人を選ませ候へと有りしに、隼人承り、屈強の兵五百餘騎選み出し、船十艘に取乗りけり。西生浦城には、加藤美作守片岡右馬助、千五百餘にて、残し置き、機張城は捨てゝも苦しからず。釜山浦の大將達へ、急ぎ後卷せらるべしと申遣し、十艘の船の纜を解き、関を上げて押出しける心の中こそ冷しけれ。漕げや急げと、下知する程に、廿五日の卯の刻に出でて、終夜漕渡り、廿六日の辰の刻には、蔚山城へ一里半計になりけり。爰にて蔚山を見渡せば、鐵炮の音、事々しく鳴出し、汀には旗指物多く立騒ぎぬ。清正之を見て、扱は未だ落城せざりけると、上下勇み噴と勢出にけり。然れども蔚山近邊の渚を

見れば、大明人の番船千艘計り漕並べ、蜘蛛の子を散らしたるが如くなり。水手梶取之を見て、大に驚き震懼れつゝ、何としてあの中を御通り候はんや。及びもなき事にこそ、命知らずの主計殿哉と囁きて、艦を引入れつゝ、浪に揺られ居たり。箕部金太夫・庄林隼人、大の眼を見出し、船子共をはつたと睨み、何とて御船をば漕がざるぞ、言語道斷の奴原なんめりと、いらてけれども、聞かざる振にて、動きもせず。清正之を見て、井上大九郎・飯田角兵衛を呼び、あの紺の布子白き大筋附きたる大男めは船頭と見えたり。是へ連れて參り候へと、申されければ、大九郎・角兵衛承り、左右の手を引張り、主計頭前に引居ゑたり。清正はつたと睨み、只今の過言時も時にこそよれ。吾を始め、命有るべしとも思はざるに、汝一人死ぬる様に匂りし事、返すも奇怪なり。但し吾も、只今討死すべきなれば、先づ己を先に立てんと云ふ儘に、大兼光と云ふ刀を抜けば、玉散る計りになれるを、するりと抜き、齒を挽き試しければ、かの船頭以外の驚き騒ぎ、色違へして、平に御助下され候へ。御船をば一入早く仕るべしと、涙を流し歎きしかば、清正機嫌を直し、左もさうすとて助けゝり。

此船頭、聲を上げ、類船共を招き、いざ漕げや船子共とて、押立て漕出しぬ。吁大將哉とぞ覺えける。殘の船の水主共之を見て、吾もくと舫を直し、漕出でしかば、清正斜ならず悦びて、門出はよきぞ急げやとて、大に笑ひつゝ、十餘艘の船共、既に蔚山近く成りにける處に、大明の番船五百艘、主計が船を遮せんと、漕寄せ引包み、一揉に揉み、手痛く攻めし所を、弓、鐵炮を放立て、曳々聲を揚げ、眞一文字に其中を漕通りしに、森本儀太夫、飯田角兵衛、猛威を震ひ、番船二艘乗取り、撫斬りに海へ斬浸りけり。夫より主計頭が妙法の旗の船を見ては、敵の船共中を明けて通しけり。蔚山と島山との間の川へ押入らんとするに、爰にも番船數百艘有りて、弓、鐵炮雨の降るが如く、放懸けしかども、主計頭十餘艘計りにて、妙法の旗を押立て、清正は例の銀の長烏帽子の甲を著し、長刀を脇に挟み、六尺ゆたかにのび上り、船の舳先に立跨り、供船を下知しつゝ漕入りけり。大明人共、清正が出立を見知りて、恐れて近くは寄らず、只遠矢に雨の降るが如く、鐵炮を打懸けしかども、清正は徐々と蔚山城へ入りにける。城中大に悦びて、勇が以前に十倍せり。寄手は今迄、清正城中

清正蔚山に入る

に有るか無きかと、怪みけるに、まがふべくもなく押入らば、上下の大明人、力を落し、且は清正が武勇の程、敵味方共に舌を振ひ恐れしかば、五十萬騎の明兵共、彼が籠りたるに恐れつゝ、攻めんと云ふ者なかりける。城中には力を得、回天の力を出さんと、勇む事斜ならず。加藤主計頭、事故無く、蔚山へ籠られければ、本丸をば、淺野左京大夫幸長、太田飛驒守、並に清正名代加藤清兵衛、持固めたり。二の丸は加藤清正、穴戸備前守、三の丸は、加藤與左衛門尉、永野三郎右衛門、中の丸をば、箕部金太夫、九鬼四郎兵衛、持固めたり。されども萬里の風波を阻て、異國の中の籠城にて、殊に數萬騎の大敵に圍まれしかば、心細く思はぬ者はなし。かゝる事を、本朝の靈神、哀憐の眸をや垂れ給ひけん。爰に不思議の事有り。廿六日の朝、清正、蔚山へ駈入りて、三時間計り過ぎて、釜山浦より、毛利壹岐守並に安藝宰相秀元より安國寺瓊長老、金吾中納言秀秋より山口玄蕃、彼是上下百人計り、蔚山へ指越されけるに、大敵四方を取巻きしかば、入る事は中々思もよらず。蔚山近き浦に、暫く船を浮べ、城の體を眺め居り。兎やせん角やせんと、談合せし處に、日本の方より怪氣なる黒

大明勢島山岩を攻む并加藤主計頭蔚山に入る

雲立出でて、風に隨ひて、蔚山の上へ覆ひ來たり、近付くに隨ひて見れば、雲にも霧にも非ず、大なる鶴共、百千萬固まり、風に隨ひて飛揚せり。只野分烈しき秋の朝、散亂れたる木葉の、空に翻りて行くが如し。其數幾千萬と云ふ數を知らず。蔚山城の上に、飛上り舞下り、良久しく翩翩し、梢の風に吹かれて、何方ともなく、飛去りけり。朝鮮在陣六年の間、終に此鶴の鳥を見ず。此國に鶴なし。然るに只今の奇瑞は、是全く他に非ず、本朝垂跡の靈神、宗廟遠く西戎の空に立ちかけり給ひ、官軍擁護の力を、添へさせ給ふ者なるべし。殊更鶴は、天照大神宮・八幡大菩薩の權化なれば、此度の勝利疑ひなしと、城中にも島山にも、數萬の軍勢、頭を地に付け、手を又へ、禮拜をなし、只日本國大小の神明、冥道の天降らせ給ふ心地して、信心を疑はざるはなかりける。毛利壹岐守・安國寺・山口玄蕃も、此靈瑞を、頼もしく思ひ、一刻も早く、後卷を急がんとて、釜山浦へ引返しけり。爰に又不思議の事有り。本朝肥後國に、藤崎八幡宮と申し奉る神社有り。加藤清正分國なれば、此宮を信仰し、常に歩を運ぶ。神田・社領なども、寄進したりしが、慶長三年正月二日に、彼藤崎八幡の

神主の子、俄に物に狂ひ、様々の不思議を現しけるが、口走りて申しけるは、吾に八幡大菩薩乗りうつらせ給ひたり。如何に諸人能々承れ。高麗の蔚山城を、夷狄等數十萬にて、去る十二月廿二日より、今日正月二日迄、十一日の間、取圍みて攻むる事、夥しき次第なり。加藤清正も、彼の城に籠れり。夷狄等猛勢にて、既に城中難儀に及ぶ間、吾等彼地へ立籠り、五十萬騎の夷共を、明三日に悉く追拂ひ候はん間、皆皆安堵仕候へとて、飛上りく託宣し、良久しくして、物付は覺めて、本復せり。蔚山城は道遠ければ、日本にて知る人なし。皆々誠しからず思ふ處に、案の如く、正月八日に、高麗より飛脚舟著きて、舊冬十二月廿二日より、大敵蔚山城を取巻き、難儀に及びし由註進有り。扱こそ八幡宮の御託宣と、少しも違はじと、皆々信心を起しけるに、果して正月三日に、後卷有りて蔚山城圍を解き、大明・朝鮮人敗北仕り、大半討取り、籠城運を開き候通り、正月十八日に、註進到來せしかば、諸人彌、隨喜渴仰の頭を傾け、神力冥威の威徳を、讚歎せぬはなし。歸朝の時、清正右の旨聞き届けられ、増々歸依の志をそへ、藤崎の社頭へ參詣し、重ねて社領を寄せられける。世

明軍圍を解く

澆季に及びて、佛神の感應なきに似たりと雖も、かゝる奇特・不思議有りけるは、有難かりし事ともなり。

蔚山城兵糧盡くるに及び飢ゆ

井楊鎬加藤主計頭を虜にせんと欲す

大明の楊經理は、諸大將に向ひて、最前船にて乗入る時、取巻きて討たば、清正をば安と討取りし者を、今は後悔益なし。されば各、今一と攻め攻め給へ。餘りに本意なき事なりと、下知しければ、大明・朝鮮の兵共、二手になりて、十二月廿六日の午の刻に、蔚山と島山と、一同に攻駈る。持楯・竹束をつきかざし、曳や聲を出し攀登る。荒手を入れ代へく攻めけれども、城中には、清正入りたるに力を得、寄手を近々と引付けて、大石を落し、壓木を放懸け、濠ふ處を狙ひ濟まし、鐵炮にて、雨の降るが如く、打立てしかば、塀下に雲霞の如く、彌が上に重なる寄手共なれば、甲を摧かれ、腰を打切られ、岸の下へ捲り落さるゝ事、只沙を崩すが如し。城中の爲には骨折

蔚山城を
圍む

りながら、心を慰めける。終日戦ひ暮しけれども、城中少も弱らねば、寄手の諸大將之を見て、總大將楊鎬に申す様は、此城力攻にせば、只軍兵共の討たるゝのみにして、功をなす事有るべからず。某等熟と見るに、城中、水の手自由ならず、兵糧多からずと見え候間、只先軍を止めて、遠卷に陣取り、鳥も通らぬ様にせば、日數を経て陥落になり、戦はずして、清正・幸長を擒にすべしと、諫めしかば、楊鎬、此儀尤もなりと同じ、廿六日の暮より、四方の寄手、城涯に押詰め、嚴しく隙間もなく、打圍みたり。されども清正、入りたるに氣を得て物ともせず、本城・島山、互に力を合して、持堅めたり。主計頭は、諸大將に向ひて、清正城へ籠りたる驗しに、一夜討仕るべしとて、庄林隼人佐一心・森本義太夫・飯田角兵衛・吉村吉左衛門を大將にして、混甲三百餘騎・鐵炮三百張、眞先に押立て、蔚山の東の門を開き、左京の李如梅が陣へ向うて、関を揚げたりける。寄手、是に驚きて、得道具押取りく防ぎ戦ふ處を、清正が魁に、鐵炮をつるべ放つと齊しく、飯田角兵衛・森本義太夫・近藤四郎右衛門・古橋清助・相田權六、五人の兵共、眞先に進みて、一度に鎗を打入れ、黒煙を踏み立て挑戦

蔚山城兵糧盡くるに及び飢ゆ井楊鎬加藤主計頭を虜にせんと欲す

明軍復敗

す。庄林隼人、吉村吉右衛門、指揮を打振り、先駈討たすな、續けや〜と、下知しければ、三百餘の兵共、鞆を傾け、鎗先を雙べ、一度に突いて懸りける。李如梅が先手、茅國器、盧遊擊、董正誼、陳寅等、東西に披合ひ、南北に變化して、防戦ふといへども、清正が兵共、短兵急に拉げば、鎗下にて數輩の勇士討死し、大明人懐へ兼ね濠ふ處を、清正が兵、曳々聲を上げて、突立て〜、終に追崩し、軍に討勝ちて、大明人の首七百二十討取り、敵は大軍ぞや、長追すな。早や引取れと下知し、手負共を真中に引包み、打散りたる人數を索し、早々城へ取込みけり。李如梅は、頼切つたる剛兵共を討たせ、先陣を切り崩されしかども、大軍なれば、遠引きせず、雲火を燒きて、持直しけり。清正は、討取りし首共實檢し、機嫌斜めならず。今度の籠城の事、軍兵計りに有らず。近邊の雜人迄、逃籠りしかば、城中分内狭くして、人數の居住、中々難儀なりければ、二の丸と三の丸との間に、小屋を懸けんとて、明廿七日の朝、清正、小性物頭計り召連れ、二の丸三の丸の間に、平かなる芝原廣き所ありしへ出でられ、小屋の評定をなす。爰に蔚山より、北の方に高き山有り。臨江山と云ふ。是に楊登

山、彭友徳、數千にて陣取りて、蔚山城内を、目の下に直下せり。されども其間六町程有りて、普通の弓矢、鐵炮の届くべきにあらざる故に、大明人共、佛郎機を仕懸け、蔚山へ打懸る。清正は小性竝に物主共召連れ、芝原の高き處へ打出でければ、彼山の寄手共、すはやよき仕物よとて、例の石火矢を打懸けたるに、其玉過たず、清正が左の方に居たる歩侍に中り、胴中より上を寸々に打切り、腰より下計り残しける。皆々色を變じ騒ぎけるに、清正下知しけるは、何れも騒ぎ立つべからず。少も動くべからず。居敷きて罷有るべしと、掟をなし、皆々承り候とて、少も動かす有りけるに、又寄手より、同じ目當にて、石火矢を打懸けたり。此度は人には中らず、芝原へ狸の穴の勢に、黒煙を立て打込みたり。此時、小性馬廻、猶々懐へ兼ね見えければ、清正眼を瞋かし、命の惜きは、吾も人も同じ事ぞ。清正、爰に退かず居候間、相構へて少しも騒ぎ立つべからずと、堅く下知しけるに、三番目に、又石火矢を打懸けたり。此彈丸、目當高くして、詰城よりも、遙に高く玉通りぬ。其時、清正、床几を立て去れば、逃よ者共とて、一同にぱつと引入りける。楊登山、彭友徳等、之れを見て、初

蔚山城兵糧盡くるに及び飢ゆ井楊鎗加藤主計頭を虜にせんと欲す

て兩度は、目當下りたる故に、能く矢所へ行かず。さるにより、芝原の日本人共、少も騒がざりしが、三番目の石火矢、目當能くして、日本人の中へ打込みたるにより、皆々逃げ候と心得、其後は、石火矢を、三番目の玉行に、目當高々と打懸くる故、玉行、城の上を越え、城中へ一つも當らざるなり。其時、清正が兵共、感じ合せ、初め兩度の石火矢に、清正退き給はず、三番目の空を越ゆる、玉の時取られ退き候段、凡慮の及ぶ所にあらずと、稱美しける程に、城中偏に聞き及びて、哀れ能き大將軍哉。太閤の御器量、天才雄略は、古今に獨歩せし故に、御目金にて見立て給ひ、主計頭が勇士と云ひ、頓機と云ひ、人間の類にあらず。只鬼神の變化なるべしと、舌を振はぬは無りける。かくて寄手の大明勢は、遠卷にして、干殺にせよとて、竹束を附け寄せ、蔚山川には、船橋を架け、亂株逆茂木を振り、城の廻りには、鹿垣を結び、所々に井樓を上げ、弓鐵炮の手垂を入れ置き、詰りく番所を架け、衛士七八人づつ入代りく、夜番廻番絶間もなし。經理の本營に鐘を撞かば、諸大將の陣々の太鼓、井樓共の角を吹鳴し、一同に響き出し最喧し。夜中の挑灯松火の火行違ふ影明か

日本勢水に缺乏す

なり。城方にも、櫓々に兵共弦音して、抛炬猿火を堀より外へ投げ出し、若しや夜討も有らんと用心せり。されども水の手取切れ、城中、水に乏しくして、上下難儀に及べり。日中には汲むべきやうなし。夜々城外へ忍出でて、池の水を汲むに、池には死骸を取入れたれば、汲上ぐる水、盡く血なり。されども喉の乾くに堪へ兼ね、穢なき事も忘れ果て、之を汲み寄せ、清正幸長を始めて、血水を呑みけるに、常々の宇治橋の一二の間、小醒井の風味も斯くやあらん。其上、早や兵糧残らず盡きければ、紙を食ひ壁土を煎じて、呑みけれども、夫れも續かず、餘りに事迫り、清正が春風と云ふ名馬、幸長の巴と云ふ馬を殺し、其肉を調味し、兩大將、自身持口々々へ持つて廻り、働く兵共に、與ふる心の中こそ悲しけれ。働く士卒にこそ、一粒の米をも與へたれ。雜人共には、去る廿二日より、兵糧少も與へざれば、下々の窮困斜ならず、雜人原は、甲斐なき命助からんとて、柵涯迄よろほひ出づる體、眞黒に瘦衰へ、餓鬼道の罪人も、斯くやと覺えて哀れなり。朝鮮人の男女は、寄手に知人のみなれば、如何にもして、引出られば出でんと志し、柵に取付き、悶え焦れ、泣き悲し

む聲々、叫喚大叫喚の苦、目の前にて、見るにも聞くにも堪へ兼ねたり。外へ出でんとする餓人をば、寄手の大明人共、鐵炮・半弓にて射倒したるを、其外の餓人共、一所に集りて、未だ死に切らず、片息なる者を、小刀・脇差にて、肉を殺ぎ皮を斷つて、之を食す。目も當てられぬ有様なり。田の畦・岸の額に有る草をば、足輕共を遣し、取寄せ、清正・幸長も食しける位なれば、其下々は、喰へん方もなし。木戸の内堀の蔭に、よろめき居たれども、太刀をつかひ、弓を挽くに及ばず、只息をついてこそ居りたりけれ。今は早や精力盡き果てしかば、餘りに詮方なき儘に、勇士共は、夜に入り、城より忍出でて、討死したる寄手の死骸を搜し、腰に付けたる炒米・牛の炙肉を取りて歸り、大將達に奉れども、餓を忍びて、働きの能き士卒に、少づつ與へける。隨珠・和璧の玉よりも、彌珍しく覺えける。斯くては叶はじと思ひ、寄手を謀り退かせん爲に、清正は箕部金太夫・宮田平七を使として、寄手の總大將楊鎬に申されけるは、日本國大將加藤主計頭清正と、大明の楊將軍と相戦ふ事數日、徒に兩國の士民、罪無して死傷する事を憐む。是を以て、吾直に、楊將軍に對面し、日本の意趣を申

し、軍を撤し軍兵を引取るべしと、云うて遣しければ、楊鎬大に悦びて云く、倭將清正、勢盡きて降參を乞ふ。然れども吾之を赦さず。只今清正を生捕りて、闕下に獻せんと、陣中へ觸れ聞かせければ、大明・朝鮮の百萬騎、皆喜悅の眉を開き、一同に萬歳を唱ふ。此時、吳惟忠は、軍中に有りけるが、物馴れたる老武者にて、獨り楊鎬に囁きけるは、圍師必缺と云ふ事有り。此間、數日攻むれども、落ちざれば一方を開きて、逃出づる者を出しなば、義を守る勇士も、心惹かれて、必ず落行くべし。此時、伏兵を以て、落行く者を討取りなば、清正猛しと云へども、即時に、擒にすべしと諫めける。此儀尤なれば、諫に隨ふべきを、城中より扱の事出来れば、容易く清正を引出し、生捕らんとし詰めて、楊鎬、目を張り手を上げて、吳惟忠に向つて罵りて云く、老將軍は、吾一箇の活、清正を還さんと思ひ給ふか。今日・明日に生捕にして、御目に懸くべきものをと、憤りければ、此上は是非に及ばずとて、吳惟忠、再び諫めず。さる程に、約束の口にもなりしかば、城外の所を指圖し、寄手の大將楊鎬は、先立て其場へ行き、威儀を整へて、頻りに清正を呼び、兼ての約束なれば、參會せんとて、清

正、例の銀の長烏帽子の甲に、氷魚絨の鎧に、紫下紺の大袖付、小兼光と云ふ太刀を帯び、軍粧を刷ひ、床几に腰を懸け、頓て出んと支度し居りける所へ、淺野左京大夫馳來り、清正が鎧の袖にすがり、是は物の附きて狂ひ給ふか。是非出で給ふ事を、思止まり給へ。異國人の心、計り難し。若し對面の折節、傍に大力の兵共を隱置き、急に出でて御身を執へ、引立て行かんに、矢長に思ふとも叶ふまじ。將又彼と堅く約して、出でずして叶はざる事ならば、御身の顔を彼見知る事なければ、幸長御身の眞似をして、出でて會盟を降るべきなり。貴殿は、日本の弓矢の張本、幸長は數ならぬ者なれば、討たれても擒となりても、日本の弱將軍の御障になるべからずと、諫め申しければ、清正承引の色なく、其方を名代に出し、敵の手に生捕らせ、清正爭でか生甲斐有るべき。其上、流石本朝と異國との晴軍、殊更大明の將軍と約束せしを、忽に變改せん事、日本の御名折なり。是非出で候はんと、思切りたる風情なり。幸長、言を荒らかにし眼瞋し、斯かる淺ましき事にや候べき。太閤、多年思召立ち、朝鮮征伐し給ふ事は、今に七年、一朝にして捨てん事、豈悲しからずや。大行は不願

幸長清正
を諫む

細謹、大禮は不必辭諱、魚肉の身を以て、俎の中に入らん事、智才なきに似たり。されば人行非、時不順、友之義也。是程に狭き所存にて、君の御大事に立ち給はんや。出でずして叶はざれば、某出づべきぞ。早く胃を脱ぎ給へ。幸長、著しつゝ、名代に出で、忠を君臣の恩に報い、義を朋友の交に盡すべしと、涙を流して諫め申されける。されば幸長、廿二歳の若輩たりと雖も、申される處、一々道理至極なれば、毛利家の兵穴戸・吉見三刀屋・淺口等、竝に清正家人加藤與左衛門・箕部・九鬼・庄林・齋藤・森本・飯田等、皆一同して、左京殿御申しなされ候處、理に當り候。必ず御出候事、思止まり給へと、口々に押して遮れば、清正も道理に服し、某罷出でんと申すも、城中兵糧盡きて、爲方なければ、せめて斯様に計りて、寄手の總大將楊鎬と、出合ひ刺違へ、死ぬ者ならば、寄手定めて敗北すべし。さあれば、吾一人の命を捨て、城中數萬人を助けんと存する故に、思立つては候へども、京兆申さるゝ如く、彼に空しく生捕られては、其甲斐更になければ、先づ止り候はんと、義信面に露れしかば、當座に有りける諸大將士卒迄、皆清正の勇氣に感じ涙を流さぬはなかりける。即ち人を遣し、

清正今日出づまじきと、申遣しけり。楊鎬、猶も僞り引出さんと、さまざま申越しけれども、城中一同に出すまじと思へば、後には中々返事もせず、古より城下の盟と云ふ事有り。城を圍みて後、城主出でて、和談會盟し、寄手を引取らするは、城中の恥辱にて、寄手の爲めに本意なり。清正、勇知たりと雖も、文學なき人なれば、斯様の事を知らず、大明の大將に參會するは、日本の眉目なりと思ひつゝ、かくは取扱はれる。楊鎬は、相圖相違して、安すからず思ひ、一時も早く攻落さんと、士卒を馳集め、怒り悶え、攻めよ懸けよと下知しけれども、朝鮮國の習にて、寒き事斜めならず。風交りに降る霏に、肌迄濡れ通り、深田を渡りて攻懸くるに、深泥顔迄上り、鬚には垂水下り、毛も龜れ、足も凍え固りつゝ、一身に暖なく、寒苦に膚を閉ぢられ、骨迄も冷え貫きければ、後より進まんと勵めども、大明人も朝鮮人も、耳にも聞き入れず。爰の堤の陰、彼の岸の陰に固まり、鐵炮を遁れんと平伏す、聲々に喚き叫ぶ。只地獄の苦みも、かくやと思ひ知られたり。城中の日本勢も穀を絶つ事、既に十日に及びぬれば、極寒に攻められ、弓鐵炮を持ち乍ら、雪雨にうたれ、飢には

及びたり。一身皆氷の如くなれば、飢え疲れ、皆堀裏に倒伏し、喚叫の聲々を聞くに、心も消々と、力弱る計りなり。數年の大亂に、瘦黒み、鎧甲は穢く損じたり。顔も手足も垢付きて、人間の體とは見えす。かくては怵へ難く、如何せんと身を揉みて、今年も既に暮れぬ。十二月晦日になりけれども、歳末年始の沙汰にも及ばず、最後の近附を待居たる、心の中こそ悲しけれ。此旨、方々へ聞えければ、朝鮮國所々に陣取りたる日本の諸大將、竝に釜山浦在城の大名、小名、悉く蔚山城に後卷仕るべしとて、西生浦迄馳せ集る事、日夜引きも切らず、近日、蔚山城へ押向はんと、支度せり。

日本諸軍勢蔚山城後卷并大明人敗北

明くれば、慶長三年戊正月朔日になりしかば、小西攝津守行長、蔚山城後卷として、順天より打立ち、船にて先手の勢三千餘、大船共に乗り連れ、旗指物にて飾立て、水の手より、城へ力を合せんと、漕上る。釜山浦より、毛利安藝宰相秀元、黒田甲斐守長

日本軍明
軍對陣

政、竝に金吾中納言秀秋の勢、三萬餘騎にて、正月二日の晩景に、蔚山より十里計り
阻りたる高山へ上り、陣を張り、順天より加藤左馬助嘉明、蜂須賀阿波守家政、長曾
我部土佐守元親、脇坂中務大輔安治、藤堂佐渡守高虎等、四國の兵共二萬餘騎、蔚山
近き臺星山に取上り、大明勢と對陣せり。是をば城中には知らずして、元日にもな
りしかば、清正は鎧櫃より、干飯を二袋取出し、粥に煮て、士卒共に少しづつ配與へ、
年始の祝を表し、淺野幸長は、干飯だに無かりしかば、家の子郎等を小屋へ呼寄せ、
吾身は鎧の上に、北政所より贈り下されたる紫小袖をはをり、豆を火にて炙せ、物頭
には三粒づつ、士卒には一粒づつ、年始の悦とて配り與へ、是非に及ばざる事なり。
かくて餓死せんより、斬つて出で討死すべしとて、最後の支度せり。かくて元日も
暮れ、三日にもなりぬ。斬つて出でやする、腹をや切るべしと、評定しける所に、大
手を堅めたる清正が執事加藤與左衛門が方より、本丸へ人を走らかし、向の高山に
雲の如くなる物、夥しく見え候が、多分後卷の旗共かと、見え候と註進す。城中是
に勢ひて、清正・幸長・宍戸・太田も、矢倉に上り眺むれば、日本道二里計り阻てたる

向の嶺々に、日本の旗指物、幾千萬ともなく充滿ちて、只白鷺の飛び集るが如し。
海上を見れば、兵船千艘計り飾立て、小西が馬印日の丸書きたる茶袋を、春風に吹
き靡かし、大筒石火矢を放立て、喚き叫びて、蔚山指して漕ぎ近付き、すはや後詰の
來るは、あはれ潤色やと、悦び勇む聲々、矢倉々々、堀裏・役所々々に喧しければ、其音、
城中に響き渡り、只地震の搖るが如くなり。寄手の大明人は、後卷の押に置きし者
共より、釜山浦の日本人、同勢雲霞の如く、近付き來たる由、告げ來れば、山を顧み
海上を眺めて、如何はせんと周章てけり。總大將楊鎬恐怖して、後詰の手當をせん
とも思はず。只明四日に陣拂して、引退くべしと定めけり。陣々是より騒立ちける
程に、大明人の陣取りし所より、日本道一里計り近き臺星山に、狼煙二筋上りつゝ、
日本の國勢共、雲霞の如くに取上り、大明の陣中を、目の下に見下したり。旗指物の、
嵐に翻へりて有る様は、龍蛇の揚るかと怪まる。あはや日本勢の近付きたるはと、
云ふ程こそ有りけれ。大明人の陣々は上を下へぞ返しける。夜に入りしかば、加藤
嘉明・藤堂高虎以下、峯より嶺を傳へ、鶴翼に陣を取りつゝ、蔚山城中へ力を合せよ

とて、近邊の林を切りくべて、數萬雲火を焼きければ、陣中、其光に照され、只白晝に異ならず。蔚山城にも、遠火を合せよとて、本丸の大きな大庭にて、通夜遠火を焼きたりける。毛利宰相黒田長政・立花右近・吉川廣家等が陣にも、所々に火を放しければ、海上の小西が數千艘の兵船にも、箒を油断なく焼きける程に、汀につき、海上に光りて、身の毛豎ちて夥しく、其形勢、只四方に充滿ちて連りければ、銀漢高く澄みわたる夜に、欄干たる星の列るが如くなり。夜深に隨ひて、日本勢、陸路海手立挾みて、大明の陣に近付きたり。寄手總大將楊鎬は、明四日に引拂ふべしと定めけれども、後卷の日本勢、近付くを見て、明日迄の休場もなく、諸大將にも牒台しめしあはさず、吾先にと、遽に騒ぎて、三日の夜の亥の刻に、驚きふためきて逃げたりける。之を聞き付け、すはや總大將經理の落ちられたるは、敵に取巻かれては、叶ふまじと云ふ程こそ遅かりけれ。楊鎬が後を追ひて、吾先にと逃去る事、引きも切らず。廬遊擊二千餘騎にて、水の手を固め、陣取有りしが、是にも告知せず、總大將楊經理を始め、大將分の輩、吾も〜と退きけり。されども城北近く、押詰めたる勢は知らざれば、

明軍敗北

日本軍蔚山城に詰す

城よりも打つて出でず、兎角する内に、雞の聲々打頻り、曉かけて野寺の鐘、五更の空にぞ響きける。明くれば四日の未明に、後卷の魁黒田長政・立花柳川侍從宗茂・久留米侍從秀包・吉川藏人廣家等を始め、同勢安藝宰相秀元二萬餘、竝に金吾中納言秀秋二萬餘にて、蔚山表へ押詰める。加藤左馬助嘉明・脇坂藤堂以下の四國勢、臺星山より下し立て、段々に押來り、海上より小西が兵船共、雲霞の如く漕寄る。夜明けて見れば、寄手の大明勢、あはらになりしを見付け、扱は夜逃にしたる者なり。残る奴原、討止めよとて、後詰の日本勢、鐵炮を放立て、大軍、吾劣らじと突懸る。一番に毛利元就の孫吉川藏人廣家は、紺の唐綾緘の鎧に、八重櫻と名付けたる貞宗の太刀を佩き、蜻蜒留めすと云ふ大長刀を、馬の平首に引き側め、兩筋の馬印を、眞先に押立て、其勢七千餘騎、喚きて懸入りしかば、大明數萬の軍勢、嘩と崩れ立ち、吾先と逃上り、向ふの山に、古城有りしへ取込まんと上を下へ逃げ重りし所を、又吉川廣家下知して、大沼・深田へ逃げ懸り、討たる者數を知らず、黒田長政は、川向へ押詰めしかば、此有様を見て、こは如何に後れたるは、軍兵共、川を渡して懸れや〜

と指揮を振りて下知しけるに、喜多村孫之丞正清其時は長三郎とて、十五歳になりけるが、金の桔梗笠の指物にて、高雀毛の馬に乗り、一番に川へ乗下り、駿馬に鞭を進め、漲つて流るゝ瀬枕に、逆浪を立てゝぞ游がせける。之を見て、喜多村討すなとて、村上彦右衛門菅和泉守など、十騎計り、乗込みく、續きけるに、栗山備後守黒田宗右衛門等、五千餘一度に、嘩と打浸り、向の岸へ懸上り、追立てく討つて行く。加藤左馬助・藤堂脇坂・蜂須賀以下の四國勢、大明人を一人も餘さずと、喚き叫びて、黒煙を立て馳來り、蔚山城中、是に力を得、鐵炮を一同に放立て、三方の門を開きて、鎗長刀の鋒を並べ拔連れて、突いて出でし所に、如何はしたりけん、清正が兵森本儀大夫・庄林隼人・赤星太郎兵衛・鶴平次・古橋清助、五人の者共、眞先に鎗を打入れしかば、幸長・穴戸・三刀屋・太田の兵共、越されたるよと匂りて、一度に鎗を入れ揉合ひて、追崩しければ、大明朝鮮の數十萬騎、戦にも及ばず、前陣・後陣一つに成りて、捨先て鞭を打つて逃げたりける。返せくと匂れども、耳にも更に聞き入れず、吾れ先と父をも子をも打捨て、橋の危きをも、道の隘きをも云はず、彌が上に馳せ重り

ければ、人馬共に巖石・大河・沼田へ堰き落され押入られ、喚き叫ぶ音、さながら山の崩るゝが如くなり。澗川血を流し、死骸岡をなせり。吉川廣家・立花左近・黒田長政・淺野幸長・加藤清正等、手先を廻し、後を競ひ追懸けたり。手負ひたる者は、踏殺され、押殺され、返合する者は斬つて落され、死ぬる輩數を知らず。吳惟忠・茅國器は、兩手の軍兵を急度備へ立て、殿をしければ、清正打見て、長追ひなせそ。早く引取れと、銀の馬蘭の馬印を振りて、招き止めしかば、幸長・穴戸・太田は、追捨てゝ引返す。後卷の日本勢は、いづく迄もと、追懸けしが、茅國器・吳惟忠が除口へ追懸りたる者は、度々返合せ、六七度迄鎗の合ふ程なれば、戦ひながら追行き、日暮に引返す。協道を追懸けし者は、夜に入る迄追詰め、翌日本陣へ歸りけり。清正手へ、討取りし首數二千三百七十一、幸長手へ七百三十二、穴戸備前守手へ二千五百八十九とぞ聞えける。後詰の日本勢も、一手へ五百・七百・千計り取りける。されども吳惟忠・茅國器、身命を輕んじ備を立て、防退にせしに依りて、大明の諸大將は、辛き命助りて、逃げ延びにけり。太刀・刀・馬・物具・旗・小符・弓・鐵炮、盡く捨てたる事、足の踏む所も無

かりける。されば大明人二年の間に七十五萬の勢を催し、四海の力を盡し、朝鮮一州の軍勢を加へて百萬騎、一城をも攻め落さずして、散々になりて引退く。楊鎬が汚名、麻貴が短才、世間に流布し、笑を遠人に殘す事、末代の恥辱なりと、沙汰せぬ所はなかりける。後卷の大將の中、黒田長政は、城中心許なく思はれしかば、逃ぐる敵をば、手勢共に追はせつゝ、吾身は栗山備後守利安を召具し、一番に城へ駆込み、主計頭恙なしやと、問ふ所に、清正駆來り、互に悦びの涙を流し、萬死一生の難儀を語る。清正、此頃の飢に及び、日夜の粉骨に瘦せ衰へ、人間の形とは見えぬ。右の頬も、片顔大に腫れしが、長政に向ひて申されけるは、不慮に萬死を出で、御目に懸り候。此間、大敵の圍を受け、既に塀の手を破られ、漸く柵計りにて持ち泳へ候。兵糧一粒も之なきに付、吾等馬共を殺し、自身持廻り、皆々に食物に與へ候。士卒飢え疲れぬ。清正自身、駆廻り、鐵炮隙なく打ち候故、かやうに顔も腫れ候なり。新田義顯の越前金崎の籠城も、かくや候ひつらん。さりながら各の御後卷にて、運を開き候事、言語に述ぶるに違あらずと、申されしかば、長政も涙を流し、大將斯様に

諸將清正
の武勇に
驚す

身命を輕んせざれば、萬里の孤城に、數日の圍を防ぎ候はんや。年來と云ひ今度といひ、武勇のはたばりの程、舌を振り候とぞ申されける。扱も今日の後卷に、日本諸大將、何れも力を盡すといへども、中國勢毛利家より、一番に押懸けて、鎧を入れ其中に二つ引き兩の蜻蜒の様なる馬印の大將、中にも早く下し懸け突崩し、又大將古城の方へ、横切りに乗込み候に付、大明勢、其方へ退く事叶はず。眞薦池へ追込まれ、味方大利を得候。清正、蔚山城より右の次第能く見て、中國勢に逢ひ、其馬印を尋ねらるゝに、中國衆の云く、其馬印は、吉川藏人廣家にて候と答ふ。清正其後廣家に參會の刻、比類なきの慟感入候。流石に毛利元就の御孫、元春の御子息なれば、尤とは存じながら、中々目を驚かし候。さりながら御馬印、細少にて遠くより見えかわ候間、御改め然るべしと有りしかば、廣家申されけるは、主計頭御言に取付き、さ候は、御馬印の馬蘭中を下され候へかし。色を替へ持たせ申すべしと、申されける。清正所存に相叶ひ、さ候は、吾の馬印は銀にて候間、其外は何色にもなされ候へとて、持替の馬蘭を、廣家へ出されける。廣家、頓て朱にて塗り、赤馬蘭

の馬印とせられける。初め蔚山取巻かるゝに及び、難儀に候段、清正より林田八郎左衛門を使として、日本へ申上ぐるに、正月十八日に大坂城へ著き、此旨を申上げければ、秀吉公、直に聞召され、扱主計めは何くに居候ぞと、尋ね給ふ。八郎左衛門承り、清正は其節迄、西生浦とて、二日路脇に罷有候へども、此段を聞くと均しく、手廻五百計りにて、船に乗り蔚山へ籠り申す通り、言上致しければ、太閤御手を打給ひ、儲は心安し、此城持通すべし。秀吉後巻すべしとて、御具足を取寄せられ、日本の諸大名に急がれ度く、朝鮮の御動坐と仰ぎ出されける。然る所に其翌日、又清正より阿岐伊兵衛、早船にて歸朝す。去る正月四日に後巻候て、唐人百萬騎、悉く敗軍仕候を追詰めて、若干討取りて籠城し、運を開き、申し通り書付を以て、具に註進申上ぐる。將軍斜ならざる御感にて、清正が使を御前に召出し、段々直に尋ね給ふ。伊兵衛具に申上ぐる。寄手莫大に討たれ、蔚山近邊は死骸に充滿ち候故、諸大名知行高に割懸け、死骸を除き申候上は中々言語の及ぶ所にて御座無く候由、言上しければ、將軍斜ならざる御機嫌にて、御書を清正に下されけり。其詞云、

今度蔚山表大明人數萬騎取圍所、城中堅固相拘、數千人討捨付、敵令敗北之由、神妙の働きに候。然者兵糧五千石、最前被遣候へ共、重て五千石被遣候。都合一萬石被下候間、寺澤志摩守、手前より可請取候。就其蔚山、西生浦兩城、難拘之由、被聞召候。則毛利壹岐守、同一手之者共、西生浦に可成在城の由、被仰出候間、其意になり可相渡候。猶歸朝之者共罷戻、様子被聞召候て重て、可被仰出候也。

正月廿二日 御朱印

加藤主計頭殿

とぞ書かれける。其外の諸大將へも、銘々に御書を下され、或は御褒美、或は御切諫、其品々有りて、山城小才次木下半助を渡海せさせられける。

朝鮮征伐記第十二終

朝鮮征伐記第十三

大明人重ねて軍評定

蔚山の寄手百萬騎、手負ひ討たれ落散りて赤裸になり、慶州へ北入る事、日夜引も切らず、楊鎬已下の諸大將、猶も日本人寄せ來らんかと恐怖して、堀を掘り柵を振り、却つて籠城の用意せり。王城にて邢總督、此由を聞きて大に怒を啣みけれども、如何ともすべき様なし。只敗軍を盡く王城へ引返させ、再舉すべき謀をなす。爰に丁應泰といふ人あり。疏を奉りて、楊鎬が策少くして、敗軍せし罪を吟味す。爰に於て楊鎬は、經理の任を罷去り、諸大將も皆異官となりて、今一度合戦して、先敗の辱を雪がんと憤れり。邢珍思ひけるは、今度水路の兵來らざるに依りて、久しく師を慕ひ、兵糧乏しきに付きて、功を全うせず。今より江南の水兵を召し、海運

大明人軍評定

明軍の部

日本軍の防備

を議し糧米を蓄へて、敵の働を見て、軍を致すべしと分別して、江南の兵を催す。陳璘・劉綎・張榜・鄧子龍・藍芳威等、先後打續き、二月中旬に王城に著く。又天津巡撫の萬世徳を以て、經理の官となし、楊鎬に代へたり。是れ明王の命する所なり。日本人は、蔚山の圍解けて、大敵引取りたる事を、虎の口を脱れたりと思ひ、重ねて寄せ來る事もあるべし。城郭を大夫に拵へ、兵糧を運び入れ、籠城の支度せり。大明人は、今や日本人寄せ來ると、安き心もなく、用心して待つも、其沙汰なし。闐然として一所に居らん事は、謀の拙きに似たりとて、邢珍、則ち左手右備・中陣三協の兵屯を分けて、水の手一備・陸路三備と、四路に分つ。一路の主將を提督とす。中路の大將は李如梅、東路は麻貴、西路は劉綎、船手水路陳璘を大將とす。官兵屯に十萬餘騎、各、要害の地を固めて、機に應じ變に隨ひて、戦ふべしと定めたり。日本人、朝鮮に在陣する事、已に七年なれば、海手千百餘里に、二十箇所城郭を架へ、持固めたり。其内、大將の大軍にて、四方を下知する城三箇所あり。蔚山を東路とす。清正是にあり。順天を西路とす。行長是に據り、望洋・泗川を中路とす。烏津薩摩守義弘同

大明人重ねて軍評定

一一

又八郎忠恒父子、之を守り、三所共に海を阻て、堅をなし、進みては大軍を以て長驅し、退きては人馬の足を休むる居城なれば、何れも丈夫に拵へ、城の近邊に多くの兵糧藏を立並べ、其外に塙柵を幾重にも附け、矢倉を上げ、人數を入れ置きけり。其上大船を懸並べ、船の往來絶えず自由なれば、之を拒がん爲めに、三路に水兵を一備づつ添へて、海手を守らしむ。是は蔚山を攻むる時、西生浦より清正、早船にて島山の水手より、押入りたるに懲りてなり。四路の手分、既に定まりて、邢玠、諸將に命じて、三月の間に吉日を選び、血を啜り神に誓ひ、諸大將互に應援をなし、其機變を失ふべからずと定め、約束せし所に、中路の大將李如梅は、正月中旬に朝鮮を立ち、遼東迄歸り、馬共を買調へしが、兄の李如松、寧夏の敵強きに依りて、去年より彼方に在陣したるが、今年寧夏、大に起りて、如松戰場にて討死す。此人は、最前寧夏を平げて功を爲し、又朝鮮へ向ひ、平壤の軍に小西に打勝ち、開城府の軍にも、隆景と對々にし、久しく開城府に陣を張り、南安府所々にて、功を立てし名將なれば、急なる方へは、毎度、李如松を差向けられしに、今度、寧夏にて討死せしによ

李如松討死

り、大明の天子を初め參らせ、下々迄力を落し、せめて弟なれば、李如梅を以て、遼東の總兵となしつゝ、朝鮮へは差越さとりしかば、中路の大將なくなり、當時、其仁に當る器量の人なきにより、又月日を経て後、董一元を以て、李如梅が跡に入代り、中路の大將とす。此僉議に依り、大明の大軍、數月働かざりしかば、日本人も、此透に城々普請し、少時休息したりけり。

日本勢過半歸朝

蔚山は要害の地なり。之を敵に取られては、悪しかりなんとて、清正並に諸大將談合の上にて、毛利宰相秀元朝臣に、筑紫勢相加はり、正月より普請を始め、三月には塙矢倉・門々・役所残らず、丈夫に築き立てたり。普請成就して、清正に渡さんとせし時分に、順天城に籠りたる諸大將、小西行長を始め、皆城を開きて、釜山浦近邊へつばまんと評定す。其故は、順天は北、蔚山は南、其間百里に餘れり。大明、百萬騎の兵を起し、今度は順天へ取懸かる由、頻に申し伺りけるに依り、取巻かれては悪し

小西行長等順天を評議す

加藤嘉明
小西等の
意見に反
對す

かりなん。只中路の泗川、望洋と、蔚山の南方と、二筋を持堅むべしと定めけるに、加藤左馬助嘉朋進出で、各、御評定一途の上に、重ねて申す事、如何に存じ候へども、歴々の諸大將、此順天にありながら、百萬騎の敵、寄せ來るとの説に聞驚き、未だ敵の旗をだに見ずして、爰元を逃退かん事、町人、百姓、さては公家、沙門はいざ知らず、侍の道には、先祖子孫諸共に、皆廢れたる恥辱なり。誠に小松維盛が、鳥の羽音に驚き、富士川より北上北のぼりし、昔の臆病の跡を續ぐべき。將軍、吾々を此地に差向け給ふ事、全く別の事にあらず。敵を攻めよとの御下知なるに、追討使に向ひたる吾が、敵の寄するとして北げんには、兼ねて向はざるに如かず。各、は苦しからずと存せらるれば、兎も角も御計らひ候へ。嘉明に於ては、一人なりとも此城に残止まり、百萬騎を待受け、花々しき合戦して、討死仕るべしと申切られけり。行長、高虎、安治等、總大將宇喜多中納言秀家の前へ參り、此事、如何すべく候。流石、左馬助を捨置かん事も如何なり。又百萬騎を待受けんも、上策にあらずと、取々に評定し、口口に騒立つ。此由、蔚山へ告來れば、宰相秀元朝臣、主計頭清正大に怒り、安國寺の

秀吉赫怒

瑤甫惠瓊和尚を、順天へ遣し申されけるは、大明百萬騎、近日寄せ來るべき取沙汰、之あるに付き、秀家卿を初め參らせ、皆々其元、御引取り候はん旨、御相談の由承り候事、誠に候は、以の外然るべからず。縦ひ何事出來候とも、その表御引拂ひ候はん事、私にて叶ふべからず。日本へ仰せ上げられ、將軍の御下知次第に遊ばされ、尤もなるべきかと申されければ、宇喜多中納言も、小西、脇坂、藤堂等も、尤もなりと同じ、此旨、日本へ申上ぐる。太閤聞召し、大に怒り給ひ、大明百萬騎寄せ來らば、來るべきのみ。敵來ればとて、開いて退く事やあるべき。初日より城地を見定め、大明人猛勢出たりとも、越度を取らぬ様にと、重ねて申聞かせしを忘れたるか。先づ百里を阻て、廣々と城を取る事、沙汰の限なり。大明人、五日路、六日路の中にもありとも聞かず。冬ならでは寄來るまじ。必ずおびえ、関を作り北げ仕り候はば、首を刎ぬべき事必定なり。其内に入らざる人數は休息させ、九月より又渡海さすべし。城々在番には、清正、行長、義弘父子、鍋島信濃守勝茂、淺野左京大夫幸長、黒田甲斐守長政、毛利壹岐守、筑紫上野介、久留米待從秀包、六萬餘騎にて固むべし。

秀吉秀元
清正を賞す

小早川金吾中納言秀秋・毛利宰相秀元・宇喜多中納言秀家、其外四國勢は、先づ歸朝して休息せしめ、九月にまた渡海さすべしと、五月にぞ仰遣されける。蔚山城攻のとき、早々後卷仕り、今度順天へ安國寺瓊長老を遣し、騒動を静め候段、神妙に思召され候由にて、落葉の御茶入・正宗の御腰物に、一紙の御感狀を添へ、毛利宰相へ下され、清正にも、御感狀に光忠の御太刀を添へ下されけり。毛利安藝宰相は、蔚山を渡し、備前中納言秀家、竝に中國・四國衆は、順天を立ち釜山浦に出で、次第々々に渡海しけり。同六月中旬には、秀家・秀元・中國・四國衆、残らず皆、京都伏見へぞ上り著きたりける。

日本中國四國勢歸朝伏見に著く

宇喜多中納言・毛利宰相、既に伏見へ著かれしかば、中國・四國の軍兵、其、残らず上京したりけり。太閤聞召し、江戸内府家康・上杉中納言景勝・中村式部少輔一氏を以て、朝鮮表の働の甲乙を正し、忠否を穿鑿ありて、蔚山の後卷に、遅く出でたりし大將

達、竝に順天を開きて、除かんとせし衆を御咎ありて、御對面を免されず。毛利宰相秀元は、數度の軍功といひ、今度、順天へ安國寺を遣し、騒動を止められし條々、御感ありて、翌日御對面ありて、様々の懇情を盡し給ひ、加藤左馬助をも召出され、數度の戦功の中、六年先き、巳の六月、朝鮮唐嶋にて船軍の時、番船數百艘の中へ、左馬助が船、只四五艘にて乗入れ、大利を得し事、今度蔚山へ後卷の砌、一番に後詰に出でし事、竝に順天を開き除かず、一人なりとも守るべしと、申せし忠義、殊更御感ありて、若年よりの忠戰を、一紙の感狀に載せられ、領知を添へて給ひける。其狀に曰く、

其方事、天正十一年夏、於江北柴田合戦之刻、於秀吉眼前突一番鏖、其働掲焉。爲御褒美、一廉令加増畢。又於朝鮮唐嶋番船數百艘の中、離味方類船乗入、乗取敵船數多之手柄、其勇功誰立于上手、孰比于下手。殊今度、於順天城可引入之旨、各、雖令一途、重義勇、蔚山加藤主計頭等難見捨付、不隨談合之旨、神妙之至、御感不斜也。依之手前代官所、有次第三百七十石令加増畢。本知合拾萬

石之内、一萬石者可爲無役。諸大名之内、臆病者於有之者、彼闕所、猶以可被成國持之條、重命可抽眞忠之狀、如件。

慶長三年六月十六日 秀吉御判

加藤左馬助殿

とぞ遊ばされける。残る大將達も、面々に申分あるは事無き故、召出され御對面ありて、御暇下され、皆歸國に定り休息をぞ仕りたりける。

大明人蔚山順天表働

井劉綰小西行長を擒にせんと欲す

大明の總督邢玠は、七月下旬に諸大將に命じて、來月出陣して、九月廿日に、三路の大將を并せて、一度に順天蔚山望洋の三城へ働き、互に應援をなし、行長・清正・義弘を盡く追落すべしと、約束を定む。是に依つて八月末に、東路の大將麻貴は、頗貴・牛伯英を率ゐて、溫井に陣を張り、蔚山城と對陣せり。されども清正、爰に籠れ

東路の明軍蔚山を攻む

ば、向城を堅く取りて、勢を出さず。其内扱を掛けて、後陣を待たふる謀をなせり。九月廿一日に、諸手汰ひければ、夜中に蔚山へ取詰めたり。城中には、去る正月の籠城とは事違ひ、普請は思ふ儘に丈夫なり。兵糧は澤山なり。人數丸樂、一として乏しからず。攻め近づく敵共を、目の下に見下し、夜晝矢軍して、射立て打立て、寄手若干打殺されければ、麻貴も攻め呻みて、厚き盾を拵へかつき、寄せ攻めけれども、清正が兵共、木村又藏・出田宮内少輔・鵜平次等打見て、盾板、端は厚くとも、眞中は薄かるべしとて、狙ひすまし打つ程に、一枚もつかず悉く打抜き、手負・死人數を知らず。九月廿一日の夜、清正は、加藤清兵衛を呼び、若き溢者共召連れ、今宵一夜討せよと下知しけるを、鵜平次井上大九郎進出で、夜討は足輕の役にて候間、清兵衛・隼人は後詰めせよ。某共、先駆仕るべしといふ。清正尤なり。さあらば、鵜井上に先をさせ、打立ち候跡へ、清兵衛・隼人は働くべしとて、九月廿一日の夜、小雨降り籠なるに、大手の門を開き、平次・大九郎鐵炮を調へて、一度につるべ放ち、関を揚げたりける。門涯に詰めし大明人千餘人、手負ひ討たれて、一度にばつと引く。麻

大明人蔚山順天表働井劉綰小西行長を擒にせんと欲す

明軍敗退

貴は之を見て、すはや天の與なるぞ。附入にせよとて、太鼓を打つて懸り、柵涯にひしと附く所を、城中より入代りく、鐵炮にて打立つる事、雨の降る如し。寄手、打痿められ濠ふ所を、清兵衛、隼人、指揮を振ひ門を開き、切つて出でよと下知するに、言の下より門を開き、榊平馬、和田備中、堤權右衛門、一番に鍵を入れしかば、残る兵共、一同に嘩と懸りける。先陣に進みたる大明勢、一支戦ひしかども、突立てられ、數輩討たれ手負ひつゝ、本陣へ引取りける。明くれば廿二日、麻貴、彌、怒りて、城涯に土手柵を付け、廿三日より總軍七萬餘騎を以て、蔚山總構へ押寄せけるを、清正下知して、柵涯迄引付け、鐵炮にて打立て、其崩口を見合せ、加藤清兵衛、同與左衛門、齋藤立木以下申合せ、諸口より一度に切つて出でしかば、寄手大明人、數多討取られ、手負數を知らざりしかば、麻貴、又討負けて本陣へ引入りけり。爰にて、色色手段を替へけれ共、清正、少しも痿まねば相叶はず。同廿九日に、向城陣々に放火して、五里引取り、溫井に陣を取り、毎日物見を出したる計りなり。西路の大將劉綎は、七月下旬より水源の地方に陣して、小西が籠りたる順天を攻めんとす。され

西路の明軍順天を攻めんとす

劉綎行長を慮にせんと謀る

ども、順天は海邊に續き、大船數多懸りて、勢を廻すべき様なし。沈惟敬がせし手段を思出し、扱をかけ、行長を誘引おびき出し、生捕らんと思ひ、帳下の將吏を集め、潛に謀りけるは、順天在陣の日本勢、誠に小勢なりと雖も、行長が勇悍、我が十萬の勢に敵せり。戰を以て卒爾に拉き難し。今吾熟と思ふに、日本人は武勇甚しと雖も、元、孫吳を學ばずして、軍法に闇し。吾れ策を運らして行長を虜らんとて、吳宗道を間使として、順天へ遣し、行長に告げて曰く、先年貴公の封號を乞ひ、専ら和議を好まれし故に、事既に成就せんとす。然るに清正が邪謀に阻まれ、關白怒を起し、又今度の大兵起れり。誠に憤るべく歎くべし。今大明の官兵等、萬里の波濤を凌ぎ、朝鮮に來り、久しく師を曝す事年あり。望郷の念、常に息まず、歸國の懷尤も深し。日本の諸將も亦斯くの如く成るべし。且つ兵を窮め武を黷すの戒、今此時に當れり。兩兵他郷に間關たる事、猶以て君上の身として、痛まざらんや。矧んや今兩軍、共に師疲れ糧乏し。吾れ自ら出でて、親しく貴公と會盟し、好を通じ、前の盟を修し、兩國生靈の願を遂げ、互に軍を班さば、士民の大慶、爰に有るべしと申遣

大明人蔚山順天表勸并劉綎小西行長を擒にせんと欲す

しけり。行長、初は猶ほ疑ひて、和談誠しからずとて、取合はざりしが、通辭度重り、其上劉綎、只一騎にて中道迄出向ひ、日本人を疑はざる風情を見せければ、行長扱は眞實なりと心得、今は疑ふべからずと、信を取りて、九月十九日、城外三里にある青鋼原〔カ〕といふ原に出でて對面し、和談致すべきにぞ極まりける。劉綎は、小西が返事を聞き、行長が淺智さぞあらん。天兵利を得ん事、此一舉にあり。誠に倭將勇猛なりと雖も、謀るには安かりけりと悦びて、大力の兵を數十人選置き、小西を生捕らんと支度せり。敵味方よりかねて對面の場に、兵士を附置き、帷幕を引き、互に大將の來るを待つ。行長は大明人の手段をば、夢にも知らず、十九日の午刻、城より出でつゝ、對面の場へ赴く所に、小西が運や強かりけん。劉綎が陣中に日本人あり、此者仔細ありて、大明の陣へ去々年より駈入り、總の官になり、此謀を知りければ、行長が來る路次へ出向ひて、會盟の座にて、行長を捕へんとする謀を告げたりけり。行長大に驚騒ぎ、鏑の口を遁れたる心地して、胸に早鐘を撞き、大息ついて道より引返しけり。劉綎之を聞くよりも、さては謀洩れたり。此儘に追ひかけて討たん

とて、二萬計りを左右に隨へ、足をも亂さず、眞黒になりて追來る。行長追付かれ、返合に及ばず、屈強の兵數多討取られ、順天へ取込みかね、漸く松島へ逃入りしかば、對面所に附置きたる雜兵已下、悉く拾殺〔被カ〕劉綎に討取られ、辛うじて命のみ助かりけり。劉綎、力に及ばずして、空しく水源城に歸り、如何して此謀を洩しぬらんと、牙を噛んで憤りけり。監軍陳效咎めて、劉綎が謀、拙き事を禁めければ、劉綎も慚憤し、其手の兵も、口惜しく思ひて、是非一戦せんと憤りけれども、日本人は、大敵を見て、卒爾の軍しては惡かりなんと、楯籠りて出合はず、日々に矢軍計りなり。

太閤秀吉公御薨逝

斯かりける所に、同年七月初より、日本伏見の御城にて、將軍秀吉公、御心地例ならざりしかば、施藥院典藥頭は申すに及ばず、洛中・大坂・堺の醫師、數を盡して參集し、攻補寒温の術を施し、起死回生の劑を奉りけれども、病氣日を逐うて重り給ひ、今は早、頼み少く見え給ひければ、恩寵の近臣心を焦し、諸國の大名伺候して、

太閤病む

太閤秀吉公御薨逝

晝夜肝膽を碎きけり。然れども生者必滅の習なれば、誰か閻浮を去らざるべき。身體次第に衰へさせ給ひければ、江戸内大臣家康加賀大納言利家は、太閤の御枕に近づき、涙を押へて申されるは、相國の月再び光を増す秋に逢ひ、博陸の花、竟に咲くべき春を待ち候處に、有待の世、限ある事にて、無常の時既に到り、今は早頼み少く見えさせ給ひ、御脈變らせ給ふ由、施藥院秀隆・半井驢庵・延壽院玄朔一同に申し候間、今は偏に一品の尊位を思召し捨て、九品の蓮臺に赴かせ給ふべき御志こそ、御尤に存じ候へ。さるにても、一念繫念の故により、五重罪障の雲に沈み候と承り候へば、萬づ御心に懸り候はん事、委しく仰置かれ候て、一筋に厭離穢土の御望を遊ばされ候へと、申されければ、秀吉公御頭をもたげさせ給ひ、苦氣なる息をつぎ宣ひけるは、吾は元、東夷の下賤たりと雖も、龍登鷹揚の器量あるに依り、東夷・南蠻を目前に隨へ、西戎・比狄を脚下に踏至り、若鹽即闕の臣となり、一天四海を掌に握れり。故に生前死後の事、一つも心に懸る事なし。幼稚秀頼事は、親子の懐、不便少からずと雖も、是れ又彼が器量次第なれば、少しも思置く事にあらず。其故は、

秀吉の遺言

頼朝天下を以て頼家に授けしかども、終に豆州の誦死となり、北條九代の榮華、忽に高時が拙きに、亡父賢にして、富貴を譲ると雖も、子愚なれば、其後を嗣がず、之を以て思ふに、皆其身の戒か素姓に依るなり。父祖の力によらず。故に秀頼が事を少しも思置かず。只黃泉冥途迄、障ともなるべきは、此度思立ちし事を遂げず、大明四百州を斬伏せざる事、返々も無念なり。其に付けても、我れ死ぬるならば、少時之を隠し、淺野彈正・石田三成を渡海せしめ、朝鮮在陣の軍兵を、悉く引取るべし。諸軍皆、恙なく歸朝せば、吾が死したる事を披露し、諸大名それづくに、皆遺物を與ふべし。若し朝鮮強くして、兩人渡りても、引取る事ならずば、天下の固に頼み思召し、家康渡海あるべし。若し又日本に逆心の族ありて、渡海する事成らずば、秀頼の後見利家、渡海せらるべし。天下に大名多しと雖も、兩人の内、一人渡海せずんば、大明百萬騎、出でて遮る事なれば、中々叶ふべからず。只是のみ心に懸るなれば、相架て家康・利家に頼み候間、朝鮮にある日本勢十萬餘を、空しく他國の土となすべからずと宣ひつゝ、只弱りに弱り給ひ、八月十八日に、秀吉公六十三歳にて、終

太閤薨去

太閤秀吉公御薨逝

に薨逝し給ひけり。悲しいかな。博陸位高くして、百官是に隨ふと雖も、三途の旅に赴くに、從ひ奉る人もなし。哀しいかな柳營勢甚しくして、三軍爰にありと雖も、九泉の途に迷はんに導き奉る人もなし。諸人の心、只萬里の航革に楫を失ひ、五更の夜、雨に燈の消えたる如し。此人天下を治め給ひて十六年、四海、其威風に服すると雖も、身は忽に東岱前後の煙と立上り、骨は空しく止まり、黃泉莓苔の塵と成りにけり。さらぬ別の悲しき上、國家の倚頼失せぬれば、天下又亂れんずらんと、歎かぬ者はなかりけり。即ち御遺骨をば、阿彌陀峯に納め奉り、其麓に御廟を建立す。木食興山上人承りて之を經營せり。萩原ト部某を以て神主となし、禰宜社人、其外勝げて計るべからず。月忌毎に諸宗の僧徒を集めて御弔あり、聖護院門跡道澄を以て、大佛殿の任主となせり。様々の御追善種々の御弔ありければ、過去聖靈も、今は安養上品の臺に到り、成等正覺の門に入り給ふらんと、參詣集會の男女共に隨緣眞如の光を仰ぎ見、佛聞法の功徳に預らんと、歡喜の涙を流さぬ人は無かりけり。

遺骨を阿彌陀峯に納む

望洋永春昆陽の三城大明人攻取る

將軍秀吉公薨じ給ふ事は、道遠ければ、未だ朝鮮に聞えず。中路の大將董一元は、部將已下十萬餘騎を率ゐ、八月末に尙州に到る。日本中路の受手は、島津薩摩侍從義弘子息又八郎家久、一萬餘騎にて之を防がんとて、六七箇所に城を架へたり。望洋は、天險の地なり。北は晉江により、東は永春に築き、西は昆陽に築きて、三つの城、鼎の如く峙ちて犄角をなし。新寨の前に峙ちたり。新寨城、三面は海を廻らし、一面計り陸に通ず。之を義弘居城とし、外には石壁を高く架へ、柵を構ふる事數十重、海を引きて堀とし、大船數百艘、城下に絆ぎ置けり。又金海開城を、左右の翼として、中に東陽の倉を作り、糧を積む事數百石、此外に、舊城泗川に、屈強の兵共を屯して、急あらば搦手より懸合はんと定め、望洋より新寨城に到る迄四十八里、日本道八里八の城を連ね築きて、歩々營をなす勢、甚だ盛なり。故に日々に、義弘兵を出し、〔宜イ〕陝川、〔冥寧〕咸陽、高靈邊を掠めつゝ、在々を攻め隨へて、威を振ひしかば、かねてより島津が武

望洋の防備

望洋永春昆陽の三城大明人攻取る

勇に恐れしに、今更、城郭の備、堅きを見て、攻めんといふ人こそ無かりけれ。此時に、全州に陣取りたる遊撃茅國器がいひけるは、義弘が狡黠、諸人の恐るゝ所なり。願くば、吾等先手を仕り、一當^{あて}當らんと申しける。邢總督、其言の壯なるを感じ、重ねて人数を茅國器に加勢して、星州を守らしめ、島津に對陣せり。此時中路の大將董一元は、宣府にありて未だ至らず。此故に、茅國器が陣取りたる星州、三面に敵を受け、勢危きを以て、浙の歩兵三千人に、應得功が馬兵三千人を添へて、星州に遣し、茅國器に力を併せて之を守らしむ。石曼子が兵、物ともせず、日々に討つて出で、合戦を挑むと雖も、大將董一元、未だ著陣せざれば、茅國器も出でて働かず。此間に姪の茅明時に命じて、和に諭す檄の文を作らしめ、又史世用に下知して、平秀吉が十惡大罪を擧げて、一通の書に顯し、日本の諸大將へ遣しけり。同八月晦日に、中路の大將董一元は、數十萬騎を隨へて、諸大將と大舉を議し、進んで高靈、晉州に陣を取る。晉州といふ所は、前に大江あり。江の南は、即ち島津義弘が手先の望洋城なり。望洋の南は、皆日本の城、日本人望洋に據り、江を阻て、固く守る。其

明將茅國器檄を日本に送る

明の將士島津を畏る

上義弘が勇略大膽、かねて聞及びし事なれば、大明勢、恐れ震ひて進み得ず。故に義弘も出でず、互に守る事一月餘なり。茅國器進み出でて申しけるは、望洋城より、義弘が居城の新寨迄、城を取る事、勢長蛇の如し。望洋城は其頭なり。其首を摧けば、餘は竹を割るが如くならん。但し、晉江といふ入海を飛んで渡る事能はず。謀を以て取るべしといふ。董一元、此謀を用ひんと、工夫を廻らしける所に、茅國器が先手の者共、打廻りに出でけるが、日本城より女一人出でたり。即ち捕つて其故を問ふ。彼の婦人、一紙の書を懷中より出す。茅國器が兵共、驚きて披見するに、其詞に曰く、

此婦將度異域矣。吾甚憐之。捐貲以贖放還故土。天朝兵將、當恤其窮困。勿加殺害。則救蟻之德也。尾云、知吾姓者、令公之後埋兒之父、問吾名者有、或之口無才之按、

とぞ書きたりける。即ち此婦人を引連れて、茅國器に見す。國器此書を讀む事再三、其心を曉らす。いかに案ずれども、合點行かざりけるに、標下の贊畫に、諸葛錄

望洋永春昆陽の三城大明人攻取る

茅國器郭
安に書
を送りて
内通せし
む

茅國器望
洋城を攻
む

といふ者あり。之を読み、即ち解して曰く、令公は唐の郭子儀、兒を埋む父といふは郭臣なり。或を口に入れば國の字、才なき按は安の字なり。婦を贖ひ出し、此書をかきたる人は、郭國安なるべしとぞ申ける。茅國器則ち參謀の史世用に語り、手を拍つて悦んで曰く、郭國安はより先に、日本にある時に、古き約束あり、中國に報じ記さんと云々。今日本の城中にあり。彼を間者として、城中を引破るべしとて、高麗人の商を三人仕立て、日本の城中へ入れ、其隙を搜り窺ふに、義弘猶ほ泗川の城にあり。郭國安は、望洋城にありと聞きて、史世用が書を持たせて、潛に郭國安に見せ、約束を定めて曰く、九月廿日に、郭國安望洋城中の兵糧庫に火を懸くべし。其煙を相圖として、晉江の入海を渡り、望洋を焼屠るべしと極めけり。されども、之を島津は夢にも知らず。大明人は、勇み悦んで其日を待つ。さる程に、九月廿日、相圖の時刻になりしかば、茅國器二萬餘騎、川を渡りて望洋城へ押寄する。望洋には、島津中務少輔忠豊楯籠りしかば、晉江の岸に備へて、渡口を遮止め、矢尻を支へて散々に射る。大明人射立てられ、遠淺に洋控へける折節、望洋城中に、火の

島津忠豊
泗川に退
く

島津勢新
寨に退く

手を揚ぐ。島津之を見て、あはや、城中に失火の出来たるは。白晝なれば、よも手過にてはあらし。心替の者こそあらめとて、入海の涯を打捨て、城中さして引取りけるを、茅國器勝に乗つて引付けて慕來る。島津が兵共、數度取つて返し突返しけれども、大明勢大軍にて晉江を早渡り、望洋へ押入り、城の架二箇所、竝に軍勢の小屋二十餘焼間拂ひしかば、島津中書、爰にて討死せんと踏止り戦ひけるを、軍兵共押阻て、今は矢長に思召すとも叶ふまじ。甲斐なき討死は、犬死同前たるべしと諫めければ、忠豊も是非に及ばず、望洋城を捨退きて、泗川の舊城を守る。董一元は、望洋城、火の手揚るを見て、同日申の刻、李寧・徐世卿を大將にて、二萬餘騎永春城を取巻き、平攻に攻入りけるに、城中島津が勢共、小勢なれば迎も叶ふまじとて、大手・搦手共に突きて、平田・本多・松浦・別所の者共、太刀・長刀・鎗先を並べ、喚き叫んで駈入りたり。大明勢多勢なりと雖も、兩方へ颯と分れ、中を明けて散々に射る。島津が兵共、東西に開合ひ、三方へ追捲り、黒煙を立て挑み戦ふと雖も、大敵拉ぐに難ければ、其勢、過半討たれつゝ、其上、敵、城中へ亂入りしかば、終に相叶はず、永

望洋永春昆陽の三城大明人攻取る

春城を捨て、新築城へ落行けり。大明人永春城を襲破り、近邊の役所、悉く焼拂ひしかば、黒煙天にさゝへ、鯨波地を動すこと夥しとも斜ならず。茅國器徐世卿、二つの城を乗取り、勝に乗つて、廿一日の五更に、西の方昆陽城を破り、月下に戦ふ。此城には、島津が一族、給黎町田・佐多・新納等固めたりしが、此有様を見るよりも、爰は遁れぬ所なり。何れも皆嗜みて、日本の者を下すべからず。一足も退くな。皆此城を枕とせよと下知をなし、島津が家の朱鍵の兵共、鋒を並べ、矢・鐵炮を左右に隨へつゝ、寄來る唐人原を、馬も人も微塵になさんと、獅子の切齒はがみして、下重つて待懸けたり。李寧・盧得功二萬餘騎、矢頃やがたに寄りて控へたり。島津が兵之を見て、なじかは怵ふべき。弓・鐵炮を一同に放立て、屈強の兵共、鞣を傾け、鐵玉をついて、一度に突いてぞ懸りける。相從ふ若黨小者原も、手々に刀を抜連れ、主々に引付いて、眞黒になりて駆入りたり。大明人、猛勢なりと雖も、日本一二と沙汰せられし、鬼神を欺く島津が兵共、一つ枕に討死せんと、死を競ふ事なれば、何者かは面を向くべき。一捲りに捲り立て、眞黒に駆入る勢々、左も右も嫌ふ事なく、只薙打に打つて懸

島津勢明
兵二千七
百餘を討
取る

義弘泗川
城に退く

る。大明人一刃も合せず捲り立てられ、魚鱗にも進み得ず、鶴翼にも開き得ず、人馬共に震懼れて、右往左往に北げ散り、討たる輩數を知らず。一時計りの戦に、大明人、討たる者二千七百五十餘なり。されども、寄手大軍なれば、搦手の柵を打破り、矢倉に火を懸けたり。折節北風烈しく吹きしかば、猛火城中に吹覆ひ、島津が勢、戦ひ疲れて見えけるに、大明人荒手を入代へ、透間をあらせず攻め入りしかば、義弘が兵共、過半手負・討死し、終に叶はず、昆陽城を開いて、泗州城につばむ。頃は九月廿一日の寅の刻の事なれば、月は隈なく照りたり。明の大軍関を作り懸け、追來る事甚だ急なり。新納・佐多の兵共、取つて戻し、鍵を合せ七八度迄、突返しければ、大明人も戦疲れ、追捨にして引還しけり。三所の城を攻め破りしかば、董一元、兵を江南に留めて、石曼子、義弘と戦はんとす。新築城中より之を見て、島津が兵共、突いて出で、追拂はんと勇進みしかども、義弘固く制して曰く、彼は大軍なり。卒爾の軍して、越度を取るべからず。さりながら、謀を全うし敵を不意に陥れ、其時一舉に戦を決せば、唐人原を盡く討果すべしと制止めしかば、皆

進んだる兵も、怒を抑へて止みにけり。

泗川落城

董一元は、望洋永春、昆陽三城を乗取り、勝に乗り進む事、恰も竹を割るが如し。大明勢、勝誇らすといふ事なし。然れども、義弘が居城新寨、堅く保へてあり。其上、此間の戦に、石曼子が勇力を見るに、尋常に合戦して、中々、勝難しと見てんげれば、所詮只、和談を取組み、一には城中の案内を見、又は彼を服せんには、如かずと思ひ、茅國器が甥茅國科を使として、新寨城へ遣し、多くの金帛を進物とし、義弘に見えて、様々に言を盡し、利害を説き、關白秀吉を捨て唐人と和談し、日本を取る謀をなすべし。然らば、大明の大軍を遣し、征伐すべしと誘ひ誑しけり。義弘彼が心を能く知らん爲に、佯りて同心しければ、大明の諸大將、手を拍ちて悦び勇めり。間人郭國安も、傍より進出で、頻に和談を勧めけり。されども、義弘實に與するにあらざれば、音信の金帛を返し、和談を破る。董一元、さては、謀を以て取難しと思ひ

董一元島津に和談を勤む

義弘和議に同ぜず

つゝ、九月廿八日の夜半に、一元自ら、三十萬を率ゐて、島津中書新納武藏守が籠りたる泗川城へ押寄する。此城に籠る島津が兵、僅に三百騎に過ぎざりければ、一番に攻め取り、高名を抽でんと志し、大同の驍將李寧手勢計りにて、拔駟に寄せたりけり。之をば夢にも知らず、新納武藏守手廻計りにて、夜廻に出でたりけるに、闇紛れに礮と行逢ひたり。出合頭の事なれば、一矢も射ず、田尻荒五郎、一番に礮を打入れしかば、武藏守も、二番に礮を入れ、一度に礮と突懸り、急に採立てしかば、李寧防ぎ戦ふと雖も、突立てられ、礮と崩れける所を、武藏守指揮を振り、急に透間もあらせず追詰めければ、大明勢數百人討たれ、剩へ、大將李寧も、島津が勢に取籠められ、終に討死してんげり。残る奴原を、追伏せし首數多討取り、勝凱作つて、泗川城へ引入りけり。大明人は、李寧を討取られしに、氣を臆して、先手夜中には進み得ず、夜明けて後陣の大明大勢、數萬にて進來る。城中には、之を知らず、夜前の戦に、李寧を討取り勇誇りつゝ、明くれば廿九日早天に、刈田をせんと、島津が勢、討つて出でたりける所に、向を見渡せば、數萬の唐人充ちし、只今寄來るに行逢

李寧討死

明兵大舉して泗川城を攻む

泗川落城

一處

泗川の將士援を新寨に乞ふ

慮得功討死

敵兵城中に亂入

ひたり。味方驚きて、足早に縋りつゝ、城中へ取込みけるを、大明人駿馬に鞭を上
げ、眞霧に追來り、其儘、門を立てさせじと攻め戦ふ。城中小勢なれば、籠城は中々
なるまじ。突いて出で敵を拂ひ、是より根城の新寨へ取込まんと、中書忠豊・新納
已下三百餘騎、喚いてこそ懸りけれ。新寨へは、急に後詰して救はるべしと申遣し、
爰を先途と命を惜まず、面も振らず防戦ふ。斯かる所に、遊撃の慮得功、眞先に進
みて下知しけるを、大將と見おほせて、島津中書自身、鐵炮を以て狙ひすまし打ち
たるに、慮得功眉間を打たれ、聲もせず俯に馬よりどうと落ちたりけり。其手の
兵共、是に痿みて、三町餘引退き、二の手の茅國器・徐世卿入代りて、大手の門へ込
入りけるを、島津中書、門口を堅めて、追込めば出し、斬入れば突出し、半時計りに
九度迄込出しけり。島津中書が切つて出で、一捲、捲つて歸る。其跡は、手負死人の
伏したる事、河原の石に異らず。中書眼を瞋らかし、臆したる者に言をかけ、餓鬼
め引くなと恥しめて、後詰の來る迄、城を持堅めんと勵しけるに、寄手夥しき大軍
にて、既に城へ亂入り、早城に火を懸けたり。中書・新納も、斯くては叶ふまじとて、

泗川の軍新寨に退く

同落城

雲霞の如く控へたる大敵の眞中へ、三百餘騎喚いて懸り、前後左右へ追散らし、是
より日本道二里餘の新寨城さして引退く。新寨城にては、島津が軍兵共、泗川城の
鐵炮・石火矢の音・関の聲、手に取る様に聞えしかば、心許なく思ふ所に、案の如く、泗
川落城と見えて、火の手夥しく上りたり。扱は攻め落されたり。急ぎ加勢して助け
んとて、混甲五六百出立ちけるを、義弘大に怒り、一人も出づべからず。泗川の者共
を捨殺すは、不便といひ本意なけれども、彼の大軍に、此城を附入にせられては、總
軍の負なり。頓て敵軍、此城へ寄來るべし。役所々々を請取り、急度持固め、下知な
くば一人も出づべからずと、制しければ、浮立つたる軍兵も、皆靜りて持口をぞ固
めける。義弘が家老、伊勢兵部少輔貞昌進出で、泗川の兵共除來るべし。貞昌一人
參り、其様を見て參り候はんとて、只一騎にて乗出し、泗川さして馳行く所に、二十
町計りにて、泗川より除來る者共にぞ會ひたりける。中書・新納も、其外の兵共も、
手痛く戦ひたりと見えて、甲の吹返鎧の袖に、矢三筋・四筋づつ射立てさせ、何れも
切疵・矢創を蒙り朱になり、太刀刀・鎧・長刀、盡く刃を折り、血の付かざるは無かり

敵兵新寨城を圍む

敵圍を解いて退く

けり。中書新納野村等、聲々に伊勢兵部と呼びかけ、萬死一生の戦に逢ひて、爰迄遁れ來れり。愚にも助勢を給はらずして、捨殺し給ふかとかこちけり。早追ひすがうて敵競ひ來れば、伊勢兵部、後陣に乗り下し、返合せく防ぎ戦ひ、漸く新寨城へ取込む。泗川を出づる時、三百餘騎ありける輩、大方討たれつゝ、新寨城へ取込み、残る者共、僅に百二十人計りなり。勝誇りたる大明人共、追ひすがうて押寄せ、東陽の倉を焼立て、勇進んで新寨城を、ひたくと取巻く。義弘、嫡子島津又八郎は、若武者なれば、甲の緒を締め、手鍵押取り色めき渡つて、是非突いて出でんと進みけるを、父義弘堅く制し、何を騒ぐぞ忠恒よ。敵の人数を見切らずば、必ず卒爾に戦ふべからず。守則不足、攻則有餘。善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上といへり。少しも騒ぐべからずと怒りければ、忠恒も父の下知に隨ひ、是非なく静まりけり。夜に入りて、數萬の寄手、いつの間にか、盡く圍を解いて、泗川へぞ引取りける。又八郎忠恒を始め、士卒共に至る迄、唐人共を討洩しぬる事、扱も殘多き者かな。手に取りたる敵なりしに、無念さよと憤り、泗川へ押寄せ、是非一合

戦せんと進みけり。此時、義弘は子息忠恒に向ひて申されけるは、又八郎、能く心得候へ。武勇の家を繼ぐべき其方が、左程に忍情なくは、中々叶ひ候まじ。士卒共、何といふとも、大將は左はいはぬ者ぞ。心を静めて待ち候へ。頓て唐人共、寄來るべし。大事の軍仕損じて、日本の恥辱を取り給ふなど、事々しく叱りければ、忠恒を始め、諸軍勢も皆静まりけり。

大明人新寨城を圍む并大明勢敗軍

さる程に、九月廿九日に、董一元は、諸大將を集めて、島津義弘が居城新寨を、取らんと議定す。されども、義弘が居城なれば、如何あらんと、諸人の異見を聞く所に、茅國器進出で、吾れ頻に、數々の城を破ると雖も、敵、盡く新寨へ取籠れば、さまでの働にあらず。新寨に義弘籠れば、容易く攻め破り難し。先づ固城の砦を攻めば、新寨の銳氣、立所に拉ぎつゝ、來り救はん事叶ふまじ。固城は、城小にして勢少し。攻め取るに易し。固城降りなば、新寨の便なくなるべし。其後、機を見て進まば、全

敵將軍評定

大明人新寨城を圍む并大明勢敗軍

敵兵新寨
を攻む

策たるべしといへり。董一元、望洋等を容易く破りたるに、氣を得て、敵を侮り、新寨とても、多くの敵もなし。固城は、小城なれば攻むるに及ばず。今先づ新寨を攻むる事、疾雷耳を掩ふに及ばざるが如く寄せなば、必ず破るべし。然らば固城は、戦はずして自ら落ちんといふ。其上、彭信古も、元來敵を侮り、謀少き者なりければ、此評定に同じ、彼所より爰に至りて、探視するに、城中の煙火、多からず。今、大兵を一舉にして攻めんに、義弘、首を授けん事、手の中なりと談合一決し、十月朔日、先手茅國器葉邦榮、彭信古が歩兵三備、直に新寨城へ取詰む。又郝三聘、師道(里イ)立、馬逞文、藍芳威の四備、馬武者を分つて、左右の堵伏とし、歩兵一備を以て、本營を守らせたり。大手搦手二十萬騎、新寨城へひたくと付く。中にも茅國器葉邦榮は、卯刻より攻め進みて、巳の刻に至つて、堀下に付き、木槓を以て、大門の扉一枚はね破り、其外、矢倉三箇所打破り、彭信古を初め既に乗り入らんとす。城中より島津が者共、突いて出でんとせしを、大將義弘、馳廻り堅く制して、外郭を乗破るとも、突いて出でずして、只内より込出せと、身を揉んで下知し給ひけり。寄手、雲

城兵突撃

島津忠恒
突撃

霞の如く重り、猶も木槓を以て打破り、心安く乗入らんとする所に、石曼子が運や強かりけん。木槓破れて、内の薬に火付きければ、千雷の音の如くはね、黒烟半天に聳えて、四方眞黒になりければ、大手に付きたる寄手共、一同に喚き叫んで、上を下へ返すを見て、義弘、制せらるゝと雖も、最前寄せし時、突いて出でずして、唐人共を退かせしを、無念に思ひたる兵共、なじかは怵ふべき。手鎧提げ、堀を乗越え乗越え、三千餘一度に突いて出づる中に、上方牢人に、三浦三左衛門といふ兵、黒四半に、銀のざら／＼付きたる指物にて、十文字の鎧を持ち、只一人、一番に堀より飛び下り、面も振らず、大軍の敵へ走懸り、鎧を打入れ、名乗懸け、大音聲を揚げ攻め戦ふ。島津が兵共、あれ討たすな。三浦討たすなと、堀より飛び下り／＼、三千餘眞黒に鎧を入れ、突立てしかば、群立ちたる寄手共、なじかは怵ふべき。一度に墮と崩れけり。島津又八郎忠恒は、之を見て、すはや敵が北るはとて、董草の背割具足を、黒革にて中二段緘したるに、銀の鱗尾(鱗カ)の甲の緒をしめ、鳥毛の母衣かけ、黄瓦毛なる馬に打乗り、穂長の鎧を馬の平首に引添へて、小門を開かせ、二千餘を左右に引率

大明人新寨城を圍む并大明勢敗軍

し、鐵炮を一同につるべ放つて、濕雲の雨を含みて、暮山を出でたる如く、眞霧に斬つて出でたりけり。此小門へは、彭信古、三千餘にて詰寄せたりしが、之を見て弓、鐵炮を下重ね、矢袋を作り、筒先を並べ、散々に射る事、雨の降る如し。馬武者は、轡を並べ轟く所へ、忠恒、眞先に進みて、喚いて駈入る。大明人、得たりやおうと待受けて、火を散らして戦ひけり。東西に分れ南北に靡き、萬卒に面を進め、一舉に死をぞ争ひける。汗馬の駈け違ふ音、太刀の鐸音、天に應へ地に響き、追靡け駈立てられ、巻きつ巻かれつ、五六度が程戦ひけるに、大明人、爰にて屍を晒さんと、踏止りて攻め合へば、地煙は、大風の砂を吹立てたるが如く、血は混々として草を濛はし、屍は累々として散り満ちたり。引組んで首を取りつ取られつ、切先より火炎を出し攻め戦ひ、互に味方を恥しめて、引退く者こそ無かりけれ。忠恒も、精兵七八百人、混甲にて身命を惜まず、進戦ふ所へ、新納武藏守手勢五百餘、柵を踏破り、喚きて横鍵を入れしかば、忠恒彌、進みて、曳や聲を出し、揉立てしかば、彭信古が三千餘、盡く討たれ、只五六十に討ちなされ、董一元が本陣さして引退く。郝三聘、師道立が馬

敵兵敗北

武者、踏止まりて半弓にて射んとすれども、引立ちたる大勢へ、島津が兵共、打交り透間をあらせず追立て來れば、叶はずして、郝三聘、師道立も、同じく押立てられ、右往左往に落ちて行く。勝に乗つて、新納、樺山、平田、伊川、野村、伊勢、松浦の兵共、関を作懸け、拔連れて追懸けたり。大明勢、爰にては追倒され、彼所にては突倒され、討たる、者數を知らず、野原を血に染めて、草はさながら色を變へ、人馬、汗を流して喚き叫ぶ音、天地に響きて夥し。されども、大將義弘は、少しも動かずして、赤地の錦の直垂に、紫座紺の鎧に、糸緋緞の大袖付け、如意半月打つたる星甲を、猪頭になし、正宗の二尺七寸の太刀佩き、馬より下りて、手蓋兼長の長刀を小膝にのせ、床几に腰を懸け、屈強の兵五千餘、廣庭に竝居、面も振らず、急度城中に居給ひける所に、是をば知らずして、茅國器、葉邦榮は、城を攻めずして、五六町脇に控へたるが、城中より突いて出でたるを見おほせ、一樣に鎧立てたる赤武者一萬餘騎、城中に人なしと心得、乗取らんと進みけり。義弘、兼ねてより思儲けし事なれば、手元に残し置く兵五千餘、天も落ち地も裂くる計りに、関を作りて突いて出で、餘さ

義弘奮戦

じと戦ふ。茅國器葉邦榮も、爰を先途と喚き叫んで下知をなし、一足も退かず攻め戦ふ。義弘、眼を瞋らかし、軍兵を指揮に隨へ、千變萬化して揉合ひたり。義弘元來、堅を破り利を摧く事、趙奢が勢を呑み、子雲が勇に及ぶべければ、大勢の中へ駆入り、蜘蛛十文字に駆破り、八方を拂ひて、四面に同じく當られければ、茅國器葉邦榮が屈強の兵共一千餘騎、義弘が馬の弓手、妻手にて討たれしかば、茅國器聲もかれ息も切るゝ計りに、怒り匂り下知しけれども、耳にも聞き入れず、二組二萬餘騎、立足もなく捲り立てられ、吾一にと崩れ行く。藍芳威は、二萬計りにて十里の外に控へて、義弘突きて出でば、後を取切らんと謀りしも、大軍に引立てられ、捨鞭を打つて逃走る。董一元は、總大將なれば、馬を立直しく、蓬し人々、一元是にあり。見捨て、何方へ退くぞ。返せや、と身を揉んで、もり返さんと下知すれども、落行く勢は、耳にも聞き入れず、人馬一つに押立てられ、塀堅ともいはず崩懸る大軍、なじかは押しむべき。二十萬騎の勢、望洋にも怵へ得ず、大河を越えて、散々になりて北げて行く。中軍の徐世卿、二千餘にて望洋城へ取込まんとすれば、島津中

敵將徐世卿討死

敵兵星州に遷走

書、早や入代り、勝凱を作る聲、城の内に聞えたり。後より島津忠恒、勝に乗つて追懸けしかば、徐世卿踏止まり戦ひけるが、生捕られて討たれにけり。忠恒は若武者なれば、自ら數度勝負を決し、薄手少々負ひ、馬をも二太刀まで斬破らせ、馬も吾が身も朱になりて、何所迄もと追懸けしを、父義弘、乗切つて驅せ來り、團扇を振り、長追なせそ。早く引取り候へと、制し止め下知し給ひしに依りて、望洋より追捨て、城中の勢は引入りけり。是に依り、茅國器は、望洋に踏止つて期する所は、天險の地なり。之を取る事易からじ。若し捨去つて、敵に取られなば、後悔すとも叶ふべからずといひて、諸大將を呼集め、打散る勢を收めて、望洋を守らんと、董一元に問ふ。一元、今度の敗軍に、諸人、恐怖する體を見ていひけるは、此望洋とても、援の城なし。固城の日本人と、新寨の義弘と、よく力を合せて來攻めば、防ぐに便なかるべし。只少時、星州に歸り、再び大軍を起し、此恥辱を雪がんと申しければ、諸大將、なじかはたまるべき。前後を分たず、吾れ先にと、星州さして北げ入る事引きも切らず。此時、城中より追懸けなば、一人も生きて歸る者はあるまじ。跡より追

ふ者なしと雖も、吾れ先にと急げば、蹈倒され轉落ち、己が太刀、刀に貫かれ、死する者數を知らず。新寨より星州迄、百五十里の間、山野共に死骸にて埋れ、足踏む所はなかりけり。大明朝鮮の將士共、彌、舌を振つて、島津が勇悍を、甚だ以て恐れけり。島津が手へ討取る首數、三萬八千七百六十六、耳鼻をそぎ、大樽十に入れて口本へぞ渡しける。

淺野彈正石田治部少輔博多に到り朝鮮

在陣の日本勢引取らんと欲す

さる程に、秀吉公御遺言の如くに、淺野彈正石田治部少輔は、家康の指圖を受け、九月の初、伏見を立ち、筑前の博多に著き、渡海の用意せり。其内に、先づ家康よりの使、永壽昌法印宮木長二郎豊盛を朝鮮へ遣し、太閤御薨逝の由を告げ、急ぎ引取るべしと、大將達へ銘々に觸れ送る。間人郭國安之を聞き、太閤薨逝し、日本人引取らんとする由、潛に大明人に告知らす。さりながら、泗川の新寨にて、島津義弘に

石田淺野
博多に至る

打負け、大明人若干討たれしに依つて、結句小西行長が居城順天表へ、取詰めたる劉綎已下の大明勢も、十月十日に、圍を解いて引取りぬ。誠に今度、島津、新寨の軍に勝たざれば、中々、日本人は、一人も歸朝する事なるまじきを、今度の敗軍に懲りて、太閤薨逝の由を、敵にも聞くと雖、進近づかず。日本へは島津勝ちし事は、十月朔日の事なれば、聞ゆべき様なし。彈正治部少輔は、博多に居て渡海せず。家康、晝夜苦勞に思ひ、利家に天下の制法を申置きつゝ、内府渡海あるべしとて、關東勢を呼上せらる。利家は其頃病中なれども、元來勇進んだる人なれば、家康渡海し給はし、天下の守なかるべし。秀頼、幼少なりと雖も、年寄奉行、守護し參らする上は、病中なりとも、利家渡海すべしと、達て申されけり。兩方互の志、尤もなれば相殘る大老、景勝、秀家、輝元を初、奉行衆に至る迄、兩人の間に異見すべき様もなし。此間に、時日移れば、家康思案し給ひ、されば先づ、和泉守高虎を遣し、朝鮮の様を聞くべし。此人、久しく朝鮮に在陣して案内者なり。殊に手輕き者なれば、早速に左右を申すべしと、加賀大納言へ相談ましますば、利家、尤もにて候と同じ、即ち藤

淺野彈正石田治部少輔博多に到り朝鮮在陣の日本勢引取らんと欲す